次に重要なのは、「凡てを理解する事は、凡てを許す事になる。」と云ふ言葉の實際的適用である。鞭を以て最上の物と考へてはならない。牢獄を以て最後の歸着點と思つてはならない。英國では或る義俠的な個人が毎年八千人の孤兒や浮浪兒を救ひ上げて、カナダその他の殖民地へ働きに出してやつてゐる。獨逸では捨て子を善良な農夫の家庭へ委托する制度を取つてゐる。日本でも此の方面の事が熱心に考へられ、現在なされてゐるよりも以上の善い計畫が實行されねばならない。

あらゆる少年を――除外された少年をも――人生の賞す可き規準に従つて、極く自然的に教育せしめよ、衛生に反する一切のもの、殊に過度の痛苦と恐怖を彼れ等に近附けてはならない。

前掲の受刑少年に就いて再び考へよう、個性調査書に依つて見ても明らかな如く、彼れは本來善導の可能を持つた生れつきであつた。唯だいけないのは彼れの前に、『無理解の象徴』とも云ふ可き鐵槌が現出した事である。《斯かる無謀に對しては暴力的反抗さへ必要となる。》

あらゆる教導は善意と許容とから生ずる。この二つの物がスクーナー建造所の一隅にも、眼鏡商人の店頭にも嚴として存在せねばならぬ。斯くて此の社會がそれ自身大いなる學校として役立つ時には、過つて罪を犯す者の數が恐らく三分の一にも減ずると云ふ事は、太陽が天にあると云ふのと同じ自明の眞理であらう。

出獄者品座(しなざ)龍彦の告白

私！……之は一體何んな人間なのだらう？　厚みもある、幅もある、成る程！　物質的には極めて確實な存在だ、私は何もそれを決して疑はうと云ふのではない。

然し、私の精神？　この方は隨分とドギツいに拘らず、何となく不確かな存在のやうに自分でも感じられてならないのだ。勿論、それは暗くて重い。形のある物で喩へたら、先づ、地下の土管のやうだとでも云ひたい位だ。だのに、この土管には缺陷がある。洩れる、洩れる——さうだ。何かしら面白からぬものが沁み出しさうなのである。

考へて見るに、私の胸の中には二本の土管が貫通してゐた。それ等は一つの系統によつて相連らなつてゐたとは云へ、然も、何だか質をも量をも互ひに相違させてゐたやうだつた。おゝ、勿論、之は又しても一種の詭辯かも知れない。でも、私としては、ことさらに僞りや厭味をたくむでゐる譯ではない、いや、その僞りから、何うしたら何時も遠く隔たつてゐられるかと云ふ事に隨分心を傾けてゐるのだ。

かまはない。思ふ通りを打ち明けよう。前にも云つた通り、心の狀態は二た通りである。そして、その一つには次のやうな性質が含まれてゐた。

——自分が若い頃から持ちあつかつてゐる色々の慾——女以外の人間には餘り强い愛を感じない事——可成り勢力的な事——その結果、無理に體を働かせ過ぎ、勞れ切つて、氣を苛ら立たせたりする事——

いや、並べて見ると、何一つ特殊なものはない。男として、之位な性質は誰れだつて持つてゐよう。さて、それでは次の、殘りの一つは何うであらう？

——何時も倦怠を感じる事——晝間から居眠りをしたり、背骨を柱に押しつけて、唯だウツラウツラと物を思つてゐる事——何うも痛みを耐へる力が足りなくて、その爲めに仰山な苦悶の動作をする事——死を考へると、狂はしい迄に氣がせき出す事——

まづ、そんな風だつた。

で、私は自分一人で考へるのだが、前者の方の性質は私の「生命の過剩」から來てゐるらしく、又、後者の性質は、私が老境へ入るに從つて、しづ〳〵とその領分を擴張して來たものに相違なかつた。だから、今の所、前者は多少受太刀の氣味があつた。

いや、又、詭辯だ。私はそれから逃れねばならない。そして、もつと直接に、重要な點を持ち出さう。さうだ。到頭、惡い日がやつて來たのだ。そして私の身の上に妙な事件が突發したのだ。

方ずつと、以前、つまり三年程前の話しです。けれど、誰れか一人位は未だ記憶してゐるでせう、

方の新聞に、「ラックを溶いて、幼兒の屍骸の足へ塗る。」と云つたやうな見出しで、或る不可解な事件が報道されたではありませんか。

私がその犯罪の下手人ではなかつた――勿論さうではない。然し、矢張り、この事に關係してゐて、兎も角も仲々重い罪に落され、結局K監獄へ投げ込まれて了つたのでした。

何う云ふ譯で、又は、何んな目的で、幼兒の足がラックで塗り上げられたか、それを答へるのは私として造作ないのですけれど、何うも私は話したくない――聽いた所で何んの利益をも皆さんへ與へないのに、私自身は大變恥かしい氣持ちをせねばならないのだから。

飛び飛びになりますが、私はもつと先の事を話し出しませう。

私は段々眞面目に考へ、考へして、しまひには涙さへためて、後悔と似たやうな心持ちにもなつてゐました。いや、實際、深く後悔してゐたのです――何をでせう。凡ての事をです、決してあの一つの犯罪丈ではない、そこへ至るまでの私の心中のあらゆる原因、日々の生活のあらゆる斷片をです。よく世間の人は忽然と悟ると云ひますが、私には、この場合でもそんな後悔の心持は味はへませんでした。早く云ふと、私の犯罪には、私として正當らしく思へる理由があつたので、急にハッと思ひついて懺悔の涙に暮れると云ふやうには行かなかつたのです。私は苦しい精進によつて、毎日少しづつ、考へを變更するやうにつとめ、その努力の斷片をいくつともなく集めて、やうやく一つの覺悟なり、後悔なりを作り出した譯です、だから少さい弧線をいくつも拾つて、つなぎ合せ、圓形を描き上げると云つたやうな體裁なのでした。

さうだ。私は何の道、直線的な人間ではない。旋回的な玉ころがしの玉みたいな人間だつたらしい。

人々は聞いて呉れるだらうか――私が監獄の中で何んな生活を續けて來たか――と？　けれど、許して下さい。その不快な思ひ出を私は今、充分告白する丈の時間を持たない。だから、私はそれを他の日に讓らして貰ひ、私があの暗い領域で得た經驗の部分の又部分丈を、ほのめかせる事で滿足せねばならない。

先づ私が服役してゐる間に、「監獄」と云ふ名稱が「刑務所」と改められ、囚人達は「受刑者」と呼ばれるやうになつた。この一事は昔、驛遞局が郵便局と變名されたのと同じやうな極く簡單な動機に依るものであつたか何うか私は知らない。けれど、或る法學者は斯う云つてゐた相だ――

「極めて徐々にではあるが、監獄の内容は改良されて來た。そして刑罰は復讐でなくて、教育であると云ふ思想が色濃くなつて來た。内容の移動に連れ立ち、もしくは先立つて、監獄と云ふ名稱も改め

られねば……。」

之が事實なら、私は可成り幸福な時代に監獄入りをしたものに相違なかつた。

さて、飛び込むで、一番初めに困つたのは、食物の種類の急變だつた。世間の人は「臭い飯を喰ふ」と云ふ立派な熟語を持つてゐるが、全くその通り、此處で與へられる飯は麥七分、外國米三分と云ふ調合で、馴れない間の食事の辛さは唯だ經驗者だけが語り得るものに相違ない。私は初めの內、胸がつかへ、喉がふさがり、悲しみが額のあたりに漂ふので、與へられた丈の量を平らげる事が何うしても出來なかつた。

そんな譯で私は段々瘦せて行く一方だつたが、その內、到頭トリ目に掛つて了つた。すると、設備はとゝのつてゐて、私には直ぐ肝油が與へられた。それが又、何と云ふ粗惡な品だらう。此の頃では、三共製藥會社なぞで製造する其れは薄荷の香りを加へて、隨分風味よく出來てゐるが、監獄で出すのは「ドブロク」と云つても好い程のもので、之も亦、甚だしく私の味覺をしひたげるのであつた。

とは云へ、極く僅少な慰藉が一つだけ此處にある。あの三時頃に貰ふ麥焦がしの粉は私に取つて何と云ふ魅力だつたらう。ところが、之はサジに一杯以上は許されないのだ。實に大の男に取つて、イヂらしい程の量ではないか。量が少ければ少い程、私はこのコガシを愛好し、戀慕さへした。しやれて云へば、この鋸屑のやうな粉が喉の濕氣迄も奪つて、ずつと胸の中をコスれて落ちて行く時には後朝の悲しみがコミ上げて來るやうな氣さへしたのだつた。私はそれで、態と、ちつとづゝ嘗めては、嘗める間々に、一種儚い眼くばせをして、遙かに遠い何ものかを見やつたりしたものだつた。

その內に、御飯の方も大分行けるやうに、私の內臟が順應した。私は受刑者中での模範だつたので、赤の代りに青い衣服を着、又、御飯も一日二合五勺づゝ食べる事を許された——次手に云つて置くが、成績が惡いものは一合五勺位しか與へられないので、空腹の苦しみから、段々善良になつて行く——。あゝ、もう一つ思ひ出した。一週に二回丈、「ダンゴ」が食べられる。之も、成績の好い奴にのみ惠まれるのだが、悲しい事に、甘くはなく、鹽がつけてあるのだ。

入浴は一週間一回しか許されない。然し、全體から云ふと、受刑者はそれ程不潔でもない。刑務所の內部は色々設備が行き達いてゐて、貧乏な裏長屋に住むよりは快い位である。もつとも便所は室の片隅にあるが、汚物は下から拔き取られるやうに出來てゐるのだ。

この特別の世界の中で、一つ不思議なのは「光線を遮斷する刑罰」と云ふものが、獄則を犯した囚人へ與へられる點だつた。小さい藏のやうな建物があつて、中へ入れられ、戸を閉められると、もう一分の幅の光線さへ漂つては來ない。人間は元來、光りを好む點では草木に負けない生物である。で、長い時間續く闇黑は想像したよりも以上に、苦痛の烈しいものだ相だ。もつとも此の刑罰は七日間より多くは與へられない。きつと、體に障るからだらう。さうだ、法學者は云つてゐるのだ——「罰

は教育なのだから……」ハッ、ハッ、教育とは人の眼へ闇を見せる事なのか？ いや、私はそんな皮肉を云ふ權利を持つては居ない。私は知つてゐる――この光線遮斷は極く溫雅なお仕置きに相違ない。少くとも、鞭と痣との相關關係を考へ出して見れば……。

話し出せば未だ切りがない。あの黑い掲示板なぞも面白いものゝ一つである。

秋が來た
蟲が鳴く
家では誰れが泣く

なんて、歌が書かれてある。天は高く澄み、秋風がサッサと鳴つて渡る。囚人たちは色々の思ひを懷いて、この歌を讀むのだ。之は確かに淋しい。普通の感傷以上のものだ。〔囚人には全く無感情の奴と、感傷的な奴と二通りある。〕

だが、私は別段、私が刑務所內で得た長い經驗と苦惱とをまだ少しも話し出してはゐない。それは前にも斷つた通り、別の機會に讓る可きであらう。

私は寧ろ此處で、そんな苦しみより、慰めの方を語る方が好い。さあ、それは何だつたか………。思ひ出さねばならぬ。私の心は齒車に卷き込まれた如く紛亂してゐる。

私は斯う自分で考へたのだ――

「いや、此處には未だ何かしら希望がある。私自身が昨日他所の刑務所で死刑に處せられたあの大男の高島君でないと云ふのは、まあ、何んたる神の恩惠だらう？ 私は何時もこの私だ。決して死刑囚の內の誰れでもない。噂に聞けば、彼れ等は首を絞められる前に腹中の汚物を完全に下すため、浣腸をされる相ぢやないか？ 今日は殺されると云ふ日の朝は朗らかで、庭には霜が一杯降り、何だか清淨な感じに鎭まり返つてゐる、さあ、其處へ醫者がやつて來て、死刑囚へ向つて云ふ。

「氣を落ちつけて……もつと腹から力を拔いて……」あゝ、之は何たる事だ。もうグリセリンが直腸の中で泡立つて、遠い雷のやうな音を立てゝゐる。普通の場合でさへ、泡が立つたり、消えたりする響は儚い氣持ちを誘ふものだ――まして、それが絕望してゐる腹の中であつて見れば尙ほ更の事だらう。それから？――それから當然、汚物が排泄される。もう腹中は空洞のやうだ。反響を起す程ガランとしてゐる。汚物と一緖にきつと大腸小腸それ自身も拔け落ちて了つたに相違ない。もう自分の體が紙バサミのやうに二つ折れになり相なのだ。「無」だ！ この痛さは何うでせう？ いや、それどころか、もう直ぐ絞首臺へ昇らねばならない。雲の上を步くやうな足どりで……。さうだ。伊太利だかでは既に死刑は廢止された。然し、スペインだか何處だかでは刀で首を切る昔の方法がその儘傳はつてゐる。血が霧を吹く。恐ろしい事だ。所で、私は？ 未だ、未だ希望がある。時間――それを待つが好い。」

この他、色々と慰めの仕方や、分別のつけ方があつた。然し、此處で一々思ひ出してはゐられない。いや、もう一つ丈を加へよう。

K刑務所の中へ這入つて見た人は誰れも驚く事だが、あの庭の美しい花畑は何うであらう？　朝露に輝いて青々としてゐる所はなまじいな女なぞを見るより餘程魅力的ではないか？　女と草？　似ても似つかぬものを比較するなんて、之は何うした事だ？　然しそれが「慰藉」の方法なのだ。支那女と朝鮮女を比較するのは造作もない。然も、おゝ、それでは「慰め」でなく、「そゝのかし」になつて了ふ。

忘れもしない。時が滿ちて監獄を出ると、私の食慾が病的に昂進して、もう自分でも恐ろしくなつて了ふ位だつた。ことに、果實と甘い物に對して目がなくなつて了つたのは何故だらう。

それで苦しまぎれに街を歩き廻り、金があればありしたがひに、私は食べる丈食べた。

信州産の青リンゴ、乾し柿の黒くて堅いやつ、價が安いため、種子のある蜜柑、芥川製菓會社のドロツプ、少し黴の生えたボンス、ウエルチのグレープジユース、それからオースタラリヤから來たグースベリーとブラツクベリーのジヤミ、干ぶどう、バナヽ、ようかん、アツプルパイ、まづ斯んなものを片はしからたしなむで見た。

飽食は或る落ち着いた氣分を私に與へるやうになり、從つて、之から何うして生きて行くかと云ふ問題を私に考へさせ、又色々の計畫を作らせました。

大體から云ふと、私は幾らか漠然とした悲しみを混ぜた所の大まかな諦めの心――早く申すと、何時死んで了つても、それで好いやうな心をはぐくみ初めてゐた。ことによつたら、自殺して了つてもかまはない――と私は何度か思ひめぐらした。

その頃、私をふと涙ぐませ、何となしに柔和なものへ思慕の情を起させたのは、私の心易い小學教師が話した次のやうな話しでした。それは別段、教訓的のものではない……然し何かしらが私の氣に入つたのです。

その教師が語りました――

「あなたは、丘上盲唖學校を知つてますね、あそこの若い教員に、有音と云ふ人が居まして、この頃、強い失戀をしたのです。分りますか？」

彼れの戀があんまり誠實だつたから、從つてこの心の傷手は大變痛切に來た譯です。彼れはもう自殺でもして了はうかしらと思つたり、ピストルの筒口をみがいて綺麗にしたり、譯もなしに樹の枝を物色して歩いたり、海の方へ行つて涙ぐむだり、まあ、そんな事をして、つまらなく、味氣ない日を

過してゐたのですね。

所が何うでせう。彼れの前へ一人の可愛い盲目の女の子が、よち〳〵と出て來たんです。それが、勿論、この教員の教へ子だつたのは明かでせう。

子供は甘えるやうな擧動をして云つたのです——

『先生は其處に何してゐますか？』

『唯、立つてゐるのです。』

『先生が、此の間、點字で印して下さつた、あのヘレンさんの話しね……』

『あゝ、ヘレンの自叙傳から取つた一部……』

『あれを私、毎日手で撫でて、もう暗誦して了ひましたわ。早いでせう？』

『私が何もしないでゐる間に、貴方は大變好い事をしてゐたのですね。』

『そんなら此處で暗誦して見ませうか？』

『教へた私が忘れて了つたのに、教へられた貴方が覺えたのですか？　さあ、聞かして下さい。』

そこで少女が小さいセルロイドの輪のやうな口を開いて、次のやうに初めました。

【作者註……ヘレン、ケラーと云ふのは、大概な人が知つてゐようが、盲目で啞の女性であつた。それで、彼の女を教育する人は、大變な骨を折つて、特別な手段で、彼の女の品性や知慧を高めてやつたと云ふ話である。他の多くの聾啞の人の如く、彼の女も初めの長い間、唯だ譯の解らぬ聲を出す丈で、まとまつた言葉を語り得なかつた、目が見えぬので、發音を學ぶのに人一倍骨が折れたのは元よりである。彼の女は教師の顏や、唇、舌等へ手を觸れ、その動く樣子を眞似たのであつた。だから、少女と先生とは心を一つに合せ、呼吸をそろへる程に熱心でなければならなかつたであらう。

教師は又、色々の言葉が浮き出して書いてあるカードを造り、これらを取り合して、文章を組む遊びを教へた。ある時、ヘレンは「少女」といふ札を自分の前かけに附け、戸棚の中に入つて、その棚に「戸棚の中に居る、」と云ふ文字の札を組み合せて貼り、一つの文章を爲した。次に示すのが盲目の教へ子が暗誦したヘレンの自傳の抄譯である。】

「私が初めて『愛』といふ言葉の意味を先生に尋ねた時のことを今でも私は好くおぼえてゐます。庭でスミレの花を三つ四つ摘んで持つてゐたので、それを先生のところにたづさへて行きました。サリヴアン先生はやさしく私の肩に手をまはして、抱いて、私の手に『私はヘレンを愛します。』と、お書きになりました。

『愛する。』つて、何の事ですかと、私は尋ねました。

すると、先生は私を強く抱きしめて、私の胸を指でおさへながら『それは此處にあります。』と、書いて下さいました。その時生れて初めて私は胸の皷動を知りました。今まで何でも觸つて見なければ

分らなかつたものですから、この答へは私を非常に困らせました。私はスミレの匂ひを嗅いで、『それはこの愛らしさですか？』と、云ふ意味で尋ね返しました『いゝえ、』と先生は仰言いました。

もう一度私は考へました。太陽が私の頭の上で暖かく輝いてゐましたので、私はその熱の來る方向を指して『之が愛ではありませんか？』と聞きました。

けれど先生は頭をおふりになりました。私は大變困つて、失望して了ひました。私は自分の先生が愛を示して下されないのを可笑しいとさへ思ひました。

その二三日後の事でした。私は色々の大きな南京玉を糸に通して居りました。三つの小さいのを通したら、今度は大きいのを二つ通すと云ふ風に、私は幾度も間ちがひをしましたが、先生はその間違ひを、辛棒づよく、やさしく敎へて直して下さるのでした。到頭私はその順序が大層過つてゐるのに氣がつき、一寸の間、玉つなぎの事に心を集中しました。そして、何うしてこの玉を順序よく糸に通し直したら好からうかと、考へました時、先生は私の頭にさはつて、『考へる。』と、お書きになりました。この時、光線のやうに、私の頭に浮むだのは、この言葉が今私の頭の中でやつてゐる行ひなのだなと、云ふ事でした。そして、そもそも、之が初めて、私が形のない物の名を知つた動機でした。」

盲目の子が此處迄語り續けた時、有音さんの目にやさしい淚が湧き起つて來ました。けれど、光りを知らぬ少女にはそれが見える譯もなかつたのです。

『あゝ、考へ、考へる。考へるとは何んな事なのかしら……。』と若い敎員はつくゞゝ思つてみたのでした。はつきりした事は分らなかつたけれど、あのヘレンが盲目で唖の身でありつゝ、やはり、その小さな胸の中で、あれこれと考へ、又、こゝに居る自分の敎へ子が、ヘレンの書いたものを暗誦したりして、慰めやら、樂みやら、喜びやらを味つて、やはり何かを考へてゐるなんて、一體何う云ふ不可思議な事に起因するんだらう？ と有音さんは獨り言を言つたのでした。それから何時迄も有音さんは何かしらあれこれと考へ續けたさうでした。

これ丈で、小學敎師の話しは終つて了つたのです。何だか、もつと先があるやうに思へてならなかつたが、又、もう、之で皆分つたやうな氣もする妙な話しですね。

それで、私は氣持ちがよかつた。夜の池のやうに心が靜かになつて、眠くなる迄眠れなかつたけれど、苦しくつて吐息をつくやうな事はなかつたのです。

「嬉しいから、目醒めてゐろ、明方になる迄、微笑むだり、寢返りを打つたりしてゐろ！」實に、斯んな風でした。

それから、事態は何う進むだらう？

敎師の話しが原因したか、それとも別の事が作用したのか、私は兎に角考へ通しに考へました。こ

の事の原因があの話しにあると云へば、何だか無理なコジツケのやうに聞えていやだ。と云つて、それが原因でないとは誰れも斷言出來る譯がない。何故かならば、私は、ウトウト考へ續けてゐる内に、何十回となく、盲目の子の砂糖菓子のやうな口が可愛く動く場面を思ひ出しては、それを打ち消すやうな事をやつてゐたではありませんか？

いや、ラチの明かぬ詮索はもうやめよう。それより、飛び移つて、もう一つ別の事を話して見たいのです。面倒でも、我慢して、もう少し聞いて下さい。

私は妙な心持ちになつて、突然K市からY市へ飛び移つた。其處で私が何かしらを考へ續けた後の結果は、何んなふうになつて世間へ表れて來たか？ 又、それが何んな工合に世間へ關與し、影響したか？

私は入獄前、Bと云ふお人好しの瀬戸物商人に預けて置いた三千圓餘の祕密な金を返して貰ふと、すぐ、實際的に體や心を動かし初めたのでした。

私は先づN村の、あの川のほとりへ、一軒の家を建てようとしたのです。勿論、つまらない安普請だ。設計圖を造らない内に、家の方が先へ「建て前」になつちまふと云ふ位なゾンザイなものだつた。でも、私は何だか、夢中になつて、北の方へ走つたり、南の方へ飛んだりした。そして、自分が輕業(かるわざ)の道化役なぞでなければ好いがと自分でも心配した。さあ、その内愈よ「建て前」の日が來ました。私はこの家が自分自身の爲めではなく、もつと別な目的の爲めに造られたのだと云ふ考へにそゝのかされ、何かしら、この家が異常に神聖なものゝやうな氣がしてならなかつた。つまり、この氣持ちは私自身が過去の自分を厭ふ餘り、發生して來たものに相違なかつた。

「さうだ、神聖なのだ。だから棟へ上る仕事師なぞに、シモがゝつた病ひを持つてゐる者なんかがあつてはならない！」之が私の幼稚な、未開人的な考へだつた。

だが、全體から見て、仕事は神聖に――妙な云ひ廻しだが――兎も角、神聖に進むで行つた。

さて、斯うして出來上つて見ると何だか馬鹿に淋しかつた――その人の居ぬ家を、夕方なぞ、外からのぞいて見ると、新らしい木の香がして、床の上のカンナ屑が風で搖いで……私はもう堪へられない涙に襲はれて了ひました。

それから私は「向上會」と云ふ、大層平凡な名の看板を、あまり目に立たぬやうにして、家の入り口へ掛けました。

免囚保護のための小さい仕事に――私は二三の知人、たとへば、B氏、S氏、敎誨師や、救世軍の將校やの助けを借りて、着手したのです。（勿論、之等の人々に對して、私は反感を抱かぬ譯ではなかつたが。）

そして手初めに五つ組位の兇囚や、その小さい家族を引き取り、幾分か彼れ等のために盡しもし、再びあさましい犯罪へ走らないやうな色々の注意を與へたりしたものです。私はそんな時、隨分と熱心でした。目をつむつて見ると、何だか腹の底に手答へのある重みが感じられた位でした。

「もう大丈夫だ！」と私は折り折り獨りで叫びました。「なるほど、いかにも私の斯んな仕事は面倒くさく、その上、困難でもある。然し、此處にうまい考へ方があるんだ。何か？　つまり斯うだ、凡そ、この世間では、六ヶ敷いものに本統の味があり、樂しみがある――全く、その點に氣がつけば、もうしめたものだ。例へば、私は幼い頃、よく南京豆を買つて食べたぢやないか、あれは實にうまかつた。所で、その時、幼い私が感じた事だが、あの豆を、子守にむいて貰ふのが何うも厭だつた、だつて、子守は私がうつかりしてると、直ぐ彼の女の口へ豆を投げ込むから、それで私は一生懸命骨を折つて、自分の力で豆の皮を割る事に成功した。あゝ、その時の豆の味のうまさ、勞役の後に來る報酬の味と云ふものは、實に二倍にも三倍にも受け取れるものだ。そら見ろ、世間では六ヶ敷いものが一番樂しいのだ。だから、もつと勇氣を出せ、勇氣が出たら、それを同じ度合で持ちこたへろ、「容易い事には近よらぬ、」と力むだ昔の支那人の言葉を何時もはつきりと思へ……」

何だか、自慢のやうで、氣が引けるが、然もさう考へたのは僞りのない所でした。

だが、何が嬉しかつたと云つて、向上會へ流れ込むで來た兇囚諸君が私の事を「兄貴」だの、「大將」だのと云つて、人なつこくして與れる時の私の喜びに越すものはなかつたやうだ。ウム。彼れ等は皆愛す可き奴等だつた。一同はそれぞれの日課が濟むと、すつかりくつろいで、五燭の電燈の下で勝手な對話に耽つたものだつた。まづ、私はそんな談話中の二三を此處に紹介して見よう。

金田重三郎は恐ろしく出目な男で、首の邊の皮膚が鰐のそれのやうに厚かつた。彼は以前トビ職をやつてゐたが、彼れが酉の市で露店を開いて賣り出した淺漬にサツカリンが使用してあつたので直ぐその筋へ引かれて了ひ、それから段々檢べられた所に依ると、サツカリン使用は卸し屋の親父が一人で謀むだので、金田は何も之に關係してはゐなかつたが、何だか別の惡事が一緒に露顯して、彼れは刑務所へ投げ込まれたのだ相でした。で、彼れは私に斯んな妙な話をしたものだつた。

「凡そ地面位有り難いものはないと私は思ふんだが、皆にはそれが分るかい？　忘れもしない、Yの再來山のずつと裏に、地藏堂がある、その又、右手の裏の方を私は掘り下げたことがある――なあに、地藏堂の改築工事のために、それが必要だつたのだ。所が、グン〳〵と掘つて、段々下の方へ進むで行つた拍子に、――あゝ、お地藏樣は何う思し召しになつたものだらうな――その拍子に、ゴトンと私の足が落ち込むだ。土を分けて、足で探つて見ると、其處は二尺四方位の穴ぼこになつてゐて、何だか冷たい風が湧いて來るやうだ。今度は手を突つ込むで見ると、變に重々しい、ドツシリし

たものが指の先へさはつた。何の氣なしに持ち上げて見ると、昔風な首かざりや鏡が出て來た。丁度、その時、仲間は別の方へ行つて居た。しめたと思つて、私は一番立派な飾りと鏡を腹がけのドンブリへ納めて了つた。其處へ折よく皆がやつて來た。

『おい穴があるぞ！』

『何穴だい？』

『口ぢや云へねえ。』

それで一同で掘り返して見ると、之は又驚いた。人が這つて通れる程の横穴が其處から北の方へと續いてゐる。私は眞先に這ひづり込むで見た。一間半程行くと、今度は三疊敷程の洞が出來てゐる。その中にも鏡や飾りや劒などがグサグサとしてゐた。だが、もう取ることは出來ない、何だか勿體ないやうな氣がして、もう、寒氣が體中を粟粒だらけにしやがつた。私は唯だァーァーと叫むだものだつた。時に皆さん、地面は實に妙なもんぢやないかね？　あんまりよいものは、何だか氣味が惡いぢやないか、」

この話しは私に深い印象を與へたらしかつた、何故なら、その晩、私は一人で何處かの裏の土を一生懸命掘つてゐる夢を見た位だつたもの……。恥かしい事だ。だが、人間として、こんな夢を見る位は、先づ許して貰はねばならないと私は思ふ。

飛び飛びになるが、私はもう一つ別の話をして見よう。

大河原角造の事なんだ。彼れは脹れぼつたいムクむだやうな瞼を持つてゐる、エスキモー風な男だつた。片腕の無い片輪だつたので、その擧動は餘計に懶さうでした。彼れはナマコのやうに重々しくその唇を動かして斯う物語つた——

「驚いちやいけないぜ。俺は工場をしくじつてからと云ふもの、すつかり喰ふに困つちやつた。驚いちやいけないぜ。女房も俺の所から逃げ出したくつてウヅ〳〵してゐたが、うまいことにリヨウマチスで腰が立たなかつた。眼ばかりキヨトキヨトさせて、腰はぢつとさせてゐるんだ。だから家の中の事は何でも知つてゐた、やれ炭取りに穴が開いてるの、天井で鼠がお産をした事のなんてなあ……。

所が或る日の話しだ。俺は勤め口を探し廻つて、泥だらけになつて家へ歸つて見た。すると女房が居ない。さあ、俺は怒つた。けれど、考へて見るに、之は妙ぢやないか。驚いちやいけねえぜ。俺はすぐ外へ出て、隣りの婆ァにその事を尋ねて見た。知らないと云ふ。俺はあつちの露路、こつちの露路、シン道と云ふシン道を探し歩いて見た。所が何うだい？驚いちやいけねえぜ。俺の女房の奴、一人の男に背負はれて、足をぶら〳〵やりながら、氣がセクと見えて、頭を一生懸命に前の方へと振つてゐるのだ。この有樣には俺もあきれちやつた。一體、その男は誰れなんだ？　間男なら承知しないと思つた。そばへ寄つて行つて見ると、男と云ふのは女房の従兄に當る耕造だつた。奴は汗を一杯かいて、フウ〳〵云つてゐる。で、俺は直ぐ奴の背中から、女房を受け取つて、又背負つて、家迄連れ

戻つて來たものだが、隨分變な事もあるもんぢやないか？ 何でも女房は俺と一緒ぢやウダツが上らないので、耕造に賴むで背負ひ出して貰つたんだと云ふが、やつぱり俺の女房だけあるぢやないか……えい？」

この話しを聞くと、私は感じた——フフム、自分の女房を背負つて立つと云ふ所に、何だか男らしい健氣なものがあるやうぢやないか。成る程、從兄の耕造に背負ひ出して貰つた女房の心持ちも私にはスツカリ分るやうな氣がする。この女はバラの新芽へたかる油蟲（アリマキ）なんだ。男どもは蟻なんだ——まあ、私はそんな風に獨りごとを云つた。

さうかと思ふと、私に次のやうな話しを初めるのは並木次郎だつた。斷つて置くが、彼れは或る金持ちの結婚式に難癖をつけて金をゆすつた事から捕へられて、別の罪狀のために刑務所入りをやつた男なのだ。顏だちはやさしく、色が白く、首が細くて前へのめり出してゐた。さうだ。彼れが云つたのだ——

「私は一時、惡い筋の客引きと云ふものをやつてゐたんですよ、之は實に男らしくないものだ。自分が何となく女見たいな氣持ちになつて了ふんだ。何でも、暗い橫丁の角に立つて、斯う待つてる。向ふから黑眼鏡の紳士がやつて來る。餘り上品でもなく、さうかと云つて下品過ぎもしない、丁度持つて來いの客だ。其處で私はコツソリと近づく……

『えい、今晩は、旦那え、』さう云つて袖を引く——『えい、旦那、之から向ふの橫丁を眞直ぐに行つて、又一つ曲りますと、實に好い所があるんです、旦那へ、實にもう、實に好い所なんで……』

紳士はぢつと私を見る、その擧動で大概うまく行つたか行かぬか分るんだが、まあ、私はまるで女のやうな氣持ちになつてゐる。紳士へ一寸色目さへ使つて見る——あゝその氣持ちつたら……」

分らない男だ。斯んな奴に關り合つては居られない。だから、今度は、あの幸田松次郎の事を話さう。彼は大變な智慧者に相違ない、それ丈、私に取つては愉快でない相手だつた。彼れは一時「信用購買組合」なぞと云ふものを設立して、極く惡い手段で金儲けをした男なのだが、如才のない事はそのチヨボロとチヤプリンひげとで直ぐ察しられる程だつた。彼れは士族の出だから、言葉使ひも仲々立派だつた。で、彼れの云ふ事に——

「ねえ、品座君、私は投網の名手なんですよ、之は六ケ敷いものだ。澤山のオモリが同時に水面へピシヤリと落ちるやうになる迄が一修業さ。それから、曲打ちと云ふのを習ふ必要が生じて來る。つまり打ち場所に邪魔物があるとする、こんな時には、網の廣がる形を三角にでも、菱形にでも變へる事が出來なきやいけないんだ。さあ、其處で、やり方には陸打ちと舟打ちと、二つがある。が、面白いのは何と云つても、夜の舟打ちだね。秋が一番好い。舊暦十月二日前後、强雨でもあつて水が濁つてでもゐて御覧なさい。そんな闇夜にや、魚の方で化粧して網を待つてますぜえ！」

何だか此の話しには一種の慾心が附きまとつてゐるやうで、私は厭な氣がした。それで少しコジツケだが斯う答へてやつた——

「ハッ、ハッ、貴方は水の上で投網をやるだけぢや滿足出來ないで、街の眞中で一打ち打つて見たいと思つたんだね。貴方が刑務所へやつて來たのも、初め投網で習つた或る氣持ちが原因してるんぢやないだらうか？」

それは何うでも好い。もう一つ別の話しが此處にある。他でもない、松岡國造の事なんだ。彼は恐ろしく脛が長く、それも細くて、毛だらけだつた。で私は彼に斯う云つて見た事がある——

「江の島へ行くと、ザリ蟹と云ふものが居らあ。强さうな毛むくぢやらな足をしてるが、その癖臆病で、人が行くと、毛の足を貝殼の中へすつ込めて、ぢつとしてらあ。」

「その通りです、その通りです。」彼はもう面目なさ相に私の前で頭を掻いたものだつた。その松岡國造が次ぎのやうな話しをしたのです——

「いきなり申しますが、私は捨て兒をしようとしたんですよ。」

「お前の事だから、きつと、すぐ思ひとまつたんだらうね？」

「その通りです。その通りです……」と、彼れは長い足の剩餘を持て餘しながら、女のやうに柔しく話しを續けた——

「……えゝ、私は渡り大工でした、セッチン叩きでした。それだのに、女房に死に別れちやつた。赤ん坊が一人取り殘されたけれど、私が餘り濃いミルクをやつたので、腹を悪くして毎日泣き通し、たれ通しだつた。變だね。私は濃い滋養をやつたら、早く育つだらうと思つたんだが、そのあべこべに、赤ん坊は痩せて行くばかりだつた。私は毎日仕事を休むで子供の面倒を見ねばならない。さあ、喰ふに困つて來た。まあ、この赤ん坊は何と云ふ足手まとひだらう。その上、頭はできものだらけだ。あゝ、あゝ、と私は泣いた。私は考へた——何でも病院には親切なお醫者さんや看護婦さんが居る、だから、若し、この子を病院の玄關前へ置いて來れば、きつと、あの人たちが拾つて救つて吳れるにきまつてゐる。看護婦長さんなんかで隨分柔和な顏をしてる人があるもんだ。そんな人がこの子を可愛がつて拾つて下さるだらう。それで私は赤子を背負つて、ある夕暮れ、外へと出掛けて行つた。一つ所を行つたり、來たりした。子供を捨てようとするのに、自分が捨てられるやうに悲しかつた。所が何うでせう。私の氣のせゐか、背中の子供が段々つめたくなつて來たやうだ。しまひには私の背中が水で濡れたやうに總毛立つた。私は變だなと思つて兒を抱き下して見た。すると、もう、赤子の唇はカップシ見たいな色になり、眼はふさがつて居た。あゝ、死んだのだ。之は濟まないことをした。だが、貴方、私はそのお蔭で罪を犯さずに濟むだぢやありませんか？　で、私は今でも時々思ひ出すんだが、あの赤ん坊はきつと、斯う考へて死んだのだらう——お父さんを許してやらうよ。私

は神様の所から來たのだから、又、神様の所へ歸つて行かう——とね。きつと、さうなんだ。私は悲しくなる。神様は私を罪から救つて下さつたかはり、子供も取り上げて了つたんだ。」

随分間違つた考へ方だ。然し私は彼れを憎めなかつた。この悪德は彼れの資性からよりも寧ろ無数育から來てゐる。

おゝ、私は急に氣が附く。私は無駄なわき道へ入り込むで了つた。斯んな利益にもならぬ個々に別れた小さい話しはやめにして、もつと、私自身の生活に密接した事を持ち出さねばいけなかつた。私の地主は親切な人だつた。それで、地續きの三百坪ばかりを、無代で私達に貸して吳れたのだ。之は瘦地だつたから、仕方なし馬鈴薯畑に使用され、幾人かの兇囚が心を淨める一つの手段として、其處で百姓の生活を模倣して見るのだつた。又、地所の一部分は花の畑になつた。仲間に一人、植木屋上りがゐたので、計畫は容易く成就して了つたのだつた。

黄色の花のマンヂウ菊、姫コスモス、金蓮花、赤い花の松葉菊、それから、女學生にもてるトレニヤ、或ひは矢車草、ホウセン花、秋咲きのコスモス——未だ色々な花が私たちの家を賑はして吳れた。

其處でゝす。聞いて下さい。不思議な事に、私が引き取つた兇囚の內、二人迄が片輪だつた。一人は指が三本足りず、一人は左の腕がもげた男でした。で、彼等の云ひ分は斯うだつたのです——

「手が自由でない。だから手先の職にありつけない。と云つて、頭でやる仕事は一層困難だ。だから、獨り手に暗い方へ行つて了ふのだ。」

この云ひ譯は、然し、單なる云ひ譯に過ぎぬものとして、見過さる可きではなかつたでせう。私はその中に、半分丈、噓でないものゝあるのを、直覺によつて察知してやつた。教師さんは聞いて考へた。考へてから云つた。

「片輪な勞働者の救濟、之を小さいながらも、自分等の手で初めて見ねばならない。人を待つてゐるのではもどかしいから。なあに、端緒をさへ開いたら、方々から補助者が出て來るにさうゐないし、又、將來は獨立した事業として認められるだらう。」

「端緒は一體何んな所にあるんです？」

「恥しい事だが、何と云つても、外國でやつてゐるのを參考に見ねばいけない。例へば……」

「ペンシルベニヤ復職局や國際勞働事務局でやつてゐる仕事なんかですね？」

それで、二人は色々な報告書なぞを集めて検べ初めました。

例へば伐木者が脚を失つたとする。さうすると、復職局はこの人に機織りを敎へる。

例へば視力と左肩の使用力とを、ある男が瓦斯の爆發によつて失つたとする。復職局は彼れを敷物

織の職工に仕立て上げる。

例へば鍛冶工が右手を失ふ。巧みな義手が與へられる。之を使用して、元通りの仕事を働く事が出來るやうにさへなる。〔教員の話しでは、ドイツのジーメンス、シユケルト型の義手が良好だ相だ。〕

其處で負傷者が訓練された新職業は、電信、無線電信、發動機工學、機械工業初步、交通事務等に亙り、尙ほ色々の賣子、機器卷方、計算、書き方、ピヤノ調子合せ、時計細工、パン燒等もある。義足の男が自轉車へ乘つて郵便配達をし、手のない者がタイプライターを打つのだ。

「何からやる可きか？」

「端緒はもうつかまつた！」

私たちは上手に相談し、利巧に働いた。で、先づ、家にゐる二人の片輪へ、各自に適するやうな新職業を與へて見ようとしたのです。何も大きく計畫する必要はない、小さくとも、實際的なのがよい、と私は思ひました。

腕のない男と云ふのは、ある人造肥料會社にゐて、しらべ皮に卷き込まれたのだし、指の足りぬ方は或る木工場にゐて、椅子を造つてゐたのだが、機械カンナの中へ手をすべり込ませて、斯んな仕末になつたのでした。で、彼れ等は頭の惡い方だから計算や書き方には不向きらしい。之からの仕事として、何んな種類のものを選ぶ可きでしたらうか？

「俺は小供の時から、手品師をやつて見たかつたんだが……」と、スペードのジヤックのやうに眼の大きい、顎のしやくれた例の指無しが呟いたが、この申し出は何うも不可能のやうに見えました。所が私の所へよく來る或る學校の先生から精神檢査を受けて見たら、さう云ふ方面へ全く不向きではないらしいのが分つたし、もし、うまく手品に熟練すれば、二本指の手で藝をするのが、存外、人氣を呼び得るかも知れぬぞと想像された。それで、私は一人で奔走して、彼れをK演藝團の下廻りに住み込ませてやつたのでした。〔其の後彼れは獨力で曲藝用義指と云ふものや、珍奇な手袋を造つた。〕

もう一人のエスキモーのやうな顏の方は模倣癖の強い性質で、

「俺も小さい時から手品師になりたかつたんだ。」と、云ひ出したが、私たちは一生懸命に彼れをなだめ、もつと彼れに適した仕事の方をすゝめて見たのだつた。

その內或る親切な人によつて經營されてゐる寫眞機の工場で彼れを使つて吳れると云ふ約束が出來た。それで、私は可成りな出費をして、彼れに立派な二種類の義手を與へた。一つは職業用の、一つは普通の——。

「斯う云ふものがあるなんて俺は今迄知らなかつた……。」と、彼れはエスキモー風の眼れぼつたい眼に淚を浮めて呟きました。さうです、彼れ等の多くは何も「より善いもの」を知つてゐないのだ。

さて、この男は右の手の甲に青々とイカリの彫りものをしてゐた。それで或る大學生君が、この男

の新らしい門出に際して、このイカリを話材に次のやうな餞別をしてやりました。

「さあ、もう一度、その手の甲を見て下さいな、ね、イカリ！　好い形のものですね。まことに廣い海を思ひ出させ、旅の事を考へさせますね。で、このイカリの話しだが、之は何も舟に上げられてゐる時と、水底へ投げ込まれた時と、別に形に於いて異る譯ではありません、それだのに、お聞き下さい、こゝです。それだのに、舟に居ては舟を止める力がなく、水へ入つて初めてその役を果すのですね。お分りでせうね。え？　だから、適當なものを、適當な場所へ置いた時、初めて、そのものゝ効用はハツキリして來ると申せませう。さあ、其處です、貴方は之から愈よ、自分に適した仕事につく事が出來るやうになつた。で、之からは決して、心にも身にも間違ひと云ふものは起りますまいよ。」

大學生さんは實にうまい事を云ふもんだ、と、私もそばで思つた。そして、この言葉を忘れぬやうに手帳へ附け込むだ位でした。

所で、このエスキモーのやうな片輪男は人からうまい事を云はれると、自分もそれを眞似て見たいと云ふ性質だつた。だから、彼れは一寸首をかしげてゐたが、急に、途方もない事を云ひ初めた。それは斯うだつた——

「ねえ、君、大學生さん。世の中は仲々六ヶ敷くなつてるね。例へば、日本人の勞働者は石をかつぐに、エンサ、エンサ、エンサと云ふだらう。所が朝鮮人の勞働者はそんな時、チンヤー、チンヤーと云ふんだよ。」

何も意味なんかありはしない。でも大學生さんは感心して聞いてやつてゐた。さうだ、斯んなつまらない事にでも、感心出來るやうになれば、もうその人はしめたもんなんだと私は又思つたりしました。

「好意を含んだ注意！　之は心の中での寶玉である。この心持ちで何事をも見てやるがよい。」私は獨り微笑むでさう云つたものだつた。

だから、私は又考へた。「子供が五目並べをしてゐる所を見るに、勝ちたがらない子は單純な無駄石を打つが、賢い子は後に有効となる石を打つ。一寸見ると、それも無駄石の如く感じられるが、實は未來的な生命を持つて ゐるのだ。つまり、そこには行く先の暗示があり、新らしい構成の要素がある。」

出來る事なら、私も自分の生活をぐつと引きしめて、自分の歩いて行く道に成る可く無駄石を打たないやうにしたい——まあ、そんな風に考へたやうなんでした。考へては喜び、喜むでは考へました。

その頃私の伴侶になつて與れてゐる教誨師は教誨師で、次のやうな事を云つて私に勇氣をつけて與れた——

「いかにも、この世の中では、容易く出來ると思はれるやうな事が、仲々さう早くははかどらぬし、

さうかと思つて見ると、反對に、仲々出來さうもない仕事なぞが、計畫の動機の正しいために、割合造作なく進むで行くと云ふやうな實例も澤山あるんですな。」

實にうまい、實に嬉しい。私は感心した。そして、朝は早く起きた。時とすると感傷的になつて、自分の體を刺してゐる蚊を打たずにそつとつまみ上げた。すると、蚊は一寸藻掻いたが、私のつまむでゐる長い足を殘して、體丈向ふへと飛むで逃げて行つたりした。さうだ。都合の惡い部分は捨てさつて、さつさと好い方へ進むで行くんだ。

然し、誰れかゞ此處で私に難詰しないだらうか――「お前は一番肝腎な方面、即ち向上會に於ける免囚の教化に關する事柄を一寸も言明しない。」と。

「いや、私はそれを一番先に話したかつたのだが、やはり、幾らか遠慮して今迄控へてゐたのです。何故か？　何うも、自分の柄にもない事を云ふと、皆の人が「出過ぎる！」と怒り出しさうに思へたからだ。けれど、聞いて呉れるなら、云つて了はう。

私は、實を云ふと、私自身、その方面の小さな一部を擔當した、が、大部分は一人の教誨師さんに委して了つたのだ。この善良な人はその道に長けても居たし、智慧のある人には智慧をもつて話し、愚鈍な人には愚鈍の形式を取つて、然も好い事を話し得るやうな性質だつた。彼れの持論が斯うであつたのを私は好く覺えてゐる――

「人間は一つの惱みには好く堪へ得るやうに出來てゐる。然し、三つ四つと惱みが一時に重なつて壓到して來る時には、何うも立派に之等と爭ひ拔く事が出來なくなる。絶望して自ら死へ走つたり、自棄になつて自ら罪へ落ちたりするのはそんな時で、それで、死と罪とは樣相こそ違へ、同じ根元から來た二つの大きな闇である。」

又、彼れは或る時、一匹の犬を私の所へ連れて來て斯う云つた――

「一つの惱み！　之は寧ろ、我々に勇躍を教へ、精進の刺戟にさへなる。所が、二つ三つ四つ！　之はいけない。このいけない物を持つて街の中を行つたり來たりしてゐる人間が段々增して來たやうだ。そして、今年は又しても大變な不景氣ぢやありませんか？　お金が恐ろしく太い幅をして外國へ流れ出す、それと一緒に、人間の德や智慧迄が吸ひ出されて海の外へ消えてなくなる。可哀相な者たちが、臟腑を拔かれたやうに前屈みになつて、島の中でうろ／＼してゐる。このうろ／＼が犬に迄も傳染して來た。さあ、君、この妙な顏の犬を見てやつて下さいな。この犬はジョンと云ひます。或る空罎屋の主人に飼はれて居りましたが、その男が或る酩酒屋の女に引かゝりまして、家を逃げ出して了ひました。殘つた女房は夫の犬を毎日いぢめては泣いてましたが、此の頃、この犬にシラミがたかつたので、到頭、きたながつて、追ひ出して了つて、今では食事もやらないのです。所が、まだ、いけない事が續いて起つて來ました。ジョンは白内障にかゝつて、片目になり、殘りの目の方とても、何

れ又曇り出しさうなんです。近所のいたづらな小僧が面白半分に、ジョンの首の鑑札を取り去つて、自分の拾つた小犬にそれを附けてやり、又、別の、ふざけ盛りが『この犬を犬殺しに上げます。』と書いた手紙をジョンの首環へ結び附けました。然も、犬は眼が惡い上に、人間の字が讀めない。だから、平氣で道の眞中をその儘歩いてゐましたが、今日、或る荷車に腹の所を轢かれてね、さかさになつて、叫びながら、一生懸命、藻搔いてゐると、折も折、彼れの戀敵のハチが駈け附けて、相手に際のあるのを幸ひ、いきなり、耳へとかぶりついて、まあ、そこいらは血だらけでした。それと知つてか知らないでか、空罎屋の女房は、コノシロを燒き返しながら『夫は歸らないでもよいから、ジョンが死んで吳れゝば好い。』なんて、口小言を云つてる仕末なのです。」

眞に此のやうな犬が我々の隣りに實在する。繰り返して云はう。惡いのは二つ三つと重ねて起る所の災厄である。それは生命を滅ぼさないで、然も粉碎する。誰れかよく之に堪へて、涙なきを得よう。それ故に、我々は祈る。斯かる犬に幸福の餘波でもよいから惠まれるやうに。いや、犬の話しではない。何故、私は斯う廻り道をするのだらう？

さうです。勘定高い人達はきつと向上會が何れ程の資金を得て維持されてゐるかを知りたがるだらう？　だが、この方面の心配はして吳れないでも好い。實は、以前、私立特殊小學校を經營してゐた富豪Hさんが、何かの事情でその學校を廢めたので、今迄、其の方へそゝがれた經費の半分を向上會へ寄附して吳れる事になつてゐたのです。その資金はK銀行へ預けられ、Hさんと教誨師さんとの傳票を貰つてからでないと、引き出せない規定になつてゐたから、私が自分勝手に濫費するやうな虞れは決してなかつた。

さて教化の方は教誨師に委し、資金はHさんが出してゐるとしたら、當の私は一體何をして毎日暮してゐたか？　疑問は此處に集まる。馬鈴薯掘りや、花いぢりばかりしてゐては皆さんに濟まない。それで、仕方なし、自分の職業として、Bホテル附きのガイドを勤める事にして了つた。さうだ。人間は一度に色々の才能を持ち得ない。それで、職業なぞもさう度々新奇のものを選ぶ自由がないぢやありませんか？　私は以前にもガイドを渡世にしてゐた。だから、厭々ながら又其處へ歸つて行つたのです。この氣持ちには新鮮な潑剌としたものがない。然し、何とも云へぬ、いぢらしさとしをらしさが其の中にあつた。まあ、考へて見て下さい。皆さんの内、一度斯んな經驗をなさつた人はないかしら？　一度冷えた湯ざましが又煮える。何うも鐵氣くさい。生の炭酸の滋味が缺けてゐる。だが、又、內氣ながらチーンと鳴り出す所に、撫でゝやりたいやうな、泣き出したいやうな氣持ちがあるぢやありませんか。いや、もう一つ別の例を引き出して見よう。私の友人N君と云ふ文士は一度書き損じた原稿紙の裏へ、又、何かを書き附けてゐる。何だか古くさくて、半分ばかり悲慘だ。然も、其處にじつと耐へてする滋味な反復がある。それです。私の復職にはそんな氣持ちが伴つてゐたらしいのでし

た。

さあ、之で私の生活に明瞭な區切りが出來、人生の行路の半ば路に、大層眞面目な心を取り返して、一つの新らしい標木を打ち込むのだ、と、天へ感謝して見ました。

それだのに、何うも心の裏側の方が大變淋しかつた。私が表面で力めば力む程、隱してゐる方の心持ちに缺けたものが増した、それは宛もアルコールラムプの焰が勢ひ好く燃え上ると壜の中の原料が益々減るのに似てゐるとも云はれませう。之は何故だ？ 何う云ふ譯だ？ ハハア！ 分つた。自分の身の廻りが他人ばかりで、親身と云ふものが散り散りになつてゐるからだな。

私は之でも一人の內緣の妻を持つてゐた筈ではないか？ それが何うして今は身の廻りに居て呉れないのか？ 皆、思ひ出す事が出來る。彼の女は私が未決監に押し込められてゐた頃、急に二千圓貸して呉れと云ひ出した。私はそれを斷つた。すると、案の狀、お金の工面をして呉れぬなら、次手に、緣を切つて呉れと云ひ出した。緣を切つた上で何うするかと聞いたら、ハッチンソンと云ふ英國人の妾になつて、當分食をつなぐのだと正直に答へた。歌にも次のやうなものがある――

お前の亭主が巡査につかまつたら
お前も誰れかをつかまへに出掛けろ

實際その通りだ。私は氣輕に彼の女を許してやつた。さうだ。私と彼の女との仲は始終この「氣輕る」で押し通されてゐたのだから、今更、何も驚いたり、泣いたりする要はなかつた譯だ。

だから彼の女は其の後ハッチンソン氏のそばに附き切りで、段々、年をとつて行つた。今、私が淋しいからと云つて、彼の女をハッチンソンから奪ひ返す程の勇氣を私は持ち合してゐない。早く云へば、彼の女は私にそれ程魅力的な働きを仕掛ける價打がもう缺けてゐた。その上、私には此の頃、何うも女を愛する力の方が駄目になつてゐた――之は長い監獄生活の呪はれた結果の一つだつたらしい、――考へて見るに、彼の女も隨分美しかつたではないか？ 殊に肌が柔かで滑らかで、彼の女は好くその肩や腕をコスリながら、

「手がスベる。スベる！」

なぞと、仰山に騷いだものだつた。さうだ。何に附け仰山で、時には物を蹴倒したりするやうな質の女だつたが、其れ丈、私には可愛かつた。いや、よさう。彼の女に就いての思ひ出は私を大變不眞面目に返す。之は大變いけない事だ。

それより、私は自分の子供に考慮を向けねばならぬ。いやでも聞いて下さい。淺倉リン子と私との間には二人の子があつた。說明は略していきなり云ふが、その內の一人はもう二十一才になつてゐる男の子であつた。或る玉突クラブの事務員、笠原貴一へそれ迄預けられてゐたが、この子の方は私が入獄以前にも一度自分で引き取つて手しほにかけて育てた事があるので、まあ二人の子の內では、よ

り多く私に親しみがあつた。其處で私の考へた事だが、私はこの子、卽ち正二と之から一緒に住み、久しぶりで、親身の情愛に觸れたなら、斯んな風に心の裏にくすぶつてゐる取りとめもない淋しい感じを追ひはらふ可能性がありさうだつた。

だから、私は豫定を確實に實現した。正二は私の家へ引き取られた。私の豫期に反して大分學問の方が遲れてゐるやうだつたから、大急ぎで、ある私立大學へ這入れるやうに、私は獨りで奔走してやつた。其處迄は上首尾であつた。然し、それから追ひ追ひ、彼の素行の上に、何かしら私の氣に入らぬものが澤山見出されて來たのは一體何う云ふ譯だつたのだらう。いや、正直に云ふと、私には彼れの顏立ちからして氣に入らなかつた。まあ、何と云ふ形の好い鼻筋だらう？　何だか厭な氣がする程、整ひ過ぎてゐるぢやないか？　それに、睫毛の中に一つ大きなホクロがあるので、その方の眼が餘計黑ずむで大きく見えてゐる。役者の造つた眼見たいだ。役者！　おゝ、私はその名を憎む。私は役者が大嫌ひだつた。嫌ひな者に自分の息子が似てゐる！　もう世話はないぢやないか。「息子！　自然で居て、然も、造り過ぎた顏をしてゐる！」私は何うも腹が立つた。それでも、ぢつと胸にこらへた。時にはこらへた無形の怒りが波のやうな顫へになつて、喉の處へ形ちでもつて表れさへした。(私は又しても生理的に惡の捕り兒となり初めたのか。)

いや、もう一つ、厭なのは、彼れのお辭儀の仕方だつた。頭を下げるのでなくて、頭を投げ出すのだ。活動寫眞の喜劇の中から、斯んな形式を學びでもしたのだらうか？　おゝ、其處にはあらゆる現代的な「浮薄」のナマな象徵が見られたではないか？　眞直ぐに頭を下げない。態と曲げて下げる。それのみか、かゞむ拍子に右足を一足あとへと引く。フム、まるで道化だ。いや、步き方も大變惡い。態と醉つたやうなフリをする。いや、話し方も氣に入らない。何？「さうですねえ。」と云ふ所を「さうですニー。」と發音する。その上、そのニーへ波形のアクセントを附ける。風變りを好い事とでも思つてゐるのか？　馬鹿め！

この父親は何と云ふみじめさだ。可愛がらうとした子供から斯んな風に突きはなされてゐる。でも、私は耐へた。さうだ。時間を待たねばならない。今に好い日が來るだらう。勿論、ツギをした瀨戶物からは、ツギの筋は消えない。然し、その痕に甘んじ、それを許し、それを忘却する時はきつと來る。まあ、そんな譯で、私はぢつと雨や風の過ぎるのを氣長に眺めやつたものだつた。

考へて見れば之と云ふのも罪は皆私にある。人に委して置いて、子供を立派に仕立て上げ得ると云ふ規則は何處の國にも存在しない。悲しいではないか、一時、正二は小學校の模範生として、校長から感狀だか切符だかを貰つた事さへあつた。彼れは怜悧で、實直だつた。だのに、今、此處に表れてゐるのは何か？　一たい、彼れは何うして、私に斯う色々のものをネダる事を遠慮しないのだらう？　ハンティングキャップを買つて吳れ、萬年筆とシースを買つて吳れ、オーヴスエタが破れました。何

故此の頃の靴は斯う切れ安いのだらう。實はヴェストポケット、コダックが欲しい。單玉で十三圓だ。それで私は十三圓やつた。彼れは頭を妙に曲げてお辭儀をした。それから一週間、今度はバットと燒き枠と材料一式と云ふ名目で七圓をねだつた。私はすかさず、

「だが、コダックと云ふのは何れだ？」と尋ねて見た。

「友達に貸してあります。」

フゥ、そんな事だらう。又、一ヶ月たつと彼れは云ひ出した。

「お父さん、大變です。友達が私のコダックを質に入れちやつて、流れさうです。早く八圓貸して下さい。受け出して來なくちや！」

エイ、小僧の癖に、「流れる」だの、「受け出す」なぞと、何の口でほざくか？　之が現代風と云ふものなのか？　第一、質屋通ひをする友達なぞを半分でも持つてゐて、此の先一體何うするのだ。

私はその頃から段々細かく正二の擧動に氣を附け初めた。或る夕暮れ、彼れは何時もなら鍵のかゝる机の抽き出しへ大切に藏ひこむ日記帳を、不注意にも疊の上へ投げ出したまゝで外出して了つた。私は惡い事と思ひながら、それでも子供の將來が氣になるので、一寸、その一部を開いて見た。さうだ。一體彼れは毎晩のやうに何處へ出掛けるのか？　之が一番の問題であつた。

日記には何回となく、「オルガニザチオン、べーへ行く。」と認めてある。何？　オルガニザチオンだつて？　子供らしくない、長い綴りだ。何處の言葉かしらないが、まあ、私流に、つまり、ガイド流に譯せば、それはオーガニゼーションの事だ。組織だ。組だ。團體だ。べーとは何か？　Bかも知れない。B組合？　何の取り引き所だ。それに又、斯んな洒落た名目を態々附けるその組合長は何んな惡黨の混血兒なのか？

到頭、耐へ切れなくなつて、私は或る日、正二を馬鈴薯畑の中で捕へ、いきなり、露骨に斯う聞いてやつた――

「オルガニザチオン、べーとは何だ？」

「知りませんよ。何故？」

「さつき、若い男がお前の留守に來て、べーから參りましたと云つたんだ。答へなさい、何故べーなんだ、え？」

「あゝ、それなら、野球の團體の事ですよ。」

「又嘘をつく、知つてるぞ。もつと惡ふざけをして遊ぶ組合なんぢやないか？　フム困つたものだ。友達が皆惡い。獨逸人の合ひの兒なんかも又一緒なんだな。えい、えい、面白くない奴ばかりだ。例へば、此の間あそびに來た安井と云ふ青年――ありや何のざまだい？　奴は無學な癖に利巧さうに見せかけようとする卑しい性質を持つてゐるぢやないか。『このやうな』と云ふ所を「コレ的」なんて

ホザいて平氣でゐるなぞは、もうあきれ返る段ではない。あの分ぢや、今に『腐敗的なものは瓦斯的なものを發生する。』なぞと、やり出すやうになるのが落ちさ。さうかと思ふと、あの北見の方は一層淺薄で、蒲田撮影所から流れ出す一時的な新熟語なぞを連發してさ、何うにも鼻持ちがなつたもんぢやない。『止せ』と云ふのを『ヨソエ』と云つたり、俺の事をウルサ型なんぞと陰口したり、そんなに新らしがつてる一方で、古風なナタマメの煙管なぞにも趣味を持つてゐるとは、まあ何たる事だ。お止し、お止し、もうあんな奴等と一緒になつてゐる事はコンリンザイならんよ。皆、駄目な奴だ。二十五錢で世界地圖を買つて見て、もうそれ丈で地球上の事は何でも分つた氣になるのが彼れ等なんぢやないか。」

　私の斯んな意見を聞きながら、足の先で死にかゝつたミヽズを蹴つてゐた正二は、風向きが惡いのを見て取ると、あゝ、何たる事だ！　彼れはちやんと手心を覺えてゐて、好い拔け道でも見附けたやうに、いきなり私に斯うノシかゝつて來るのだ――

「お父さん、ミヽズは妙なもんですね。」

　この小僧、ふざけやがつて……私は首筋を熱くしながら、怒鳴つた――

「正二！　きつと云ひつけたぞ、好いか。うむ、それにオルガニザチオンとは何だか云つて見ろ！」

「お父さん、私は活動寫眞で、一人の警視が官服を着たまゝで盜人を働く所を見たけれど、安井の話しでは、ありやあ以前お父さんのした事を芝居に仕組むだのですつてねえ？」

　おゝ正二よ、お前は手心を知つてゐる。之は何と云ふ逃げ道だ！　私は口惜しさで顫へつゝ高い天を見上げて涙ぐむだ。白い大きな雲が悠々と動いてゐる。後光さへさし添つてゐる。私は驚いて目を落し、ふと自分の身のまはりを見すゐた。あゝ、風が柔和に吹いてゐる。馬鈴薯の何の奇もない葉が一つ一つ同じ速度でおとなしやかに顫へてゐる。だのに、私の心に丈、何故、この混亂がある！　廻りは皆平和ぢやないか！　天よ、貴方は、この父親と、この息子の仲を將來何う云ふ工合に變更しようと心掛けてお出でなのか？

　仕方がない。私は少し聲を落して云つた――

「馬鹿な！　私は以前鐵道院につとめてゐたのだ。可成りな教養もあつて、或る大きな驛の助役をしてゐたのだ。だから、小さな驛の驛長より、ずつと俸給も多かつたのだ。」

「では、お父さんの罪は、何か鐵道に關係してゐたの？」

「お前は妙な子だ！」

　私は不愉快でした。一體、この子は何を考へてゐるのでせう。私をうしろからぢつと眺めたりして、何をひそ〳〵と考へてるのでせう。鐵道に關した罪――たとへは、運送する荷物の拔き取り、電信を應用した何かしらの詐欺、そんな事を思つてゐるにちがひない。私は一生懸命辯解した。けれど

も子供は唯だ疑がつてゐるやうな氣味の悪い笑ひを洩らすだけでした。

之ではいけない、もう少し家の中がしつくりせねば……、それでないと、私迄又心が駄目になつて了ふ、と私は悲しみに似た心持ちで一人呟きました。

さあ、之が不快でないと誰れが云ふか？　だから私は餘りくどく泣き事は續けまい。好い。好い。之で好いのだ。然し、何が好いのか？

ちつとも安心はならない。私は毎日正二のうしろ姿を見やつては甲斐のない思案に暮れてゐた。時間は早く遲く色々の歩調で過ぎて行つた。そして、到頭、私の眼前へ妙な事件を運むで吳れたのです。

或る日――と云つても造り事ではない――れつきとした某月某日の夕べ、私は外出する正二の跡をつけて行つて見た。さうだ。彼れは之から鼻唄まじりでオルガニザチオンへと出掛けて行くに相違ない。

然も、結果は案に相違した。彼れの足どりがO川岸をよろめいて行く頃、もうすつかり邊りは闇が濃くなつてゐた。私は彼れの影を見失ふまいとして、段々彼れとの間隔をせばめて行つた。彼れは、あの大クレーンのほとり迄辿りつくと、一寸足をとめた。その拍子にクレーンの後ろから一つの人影がよろめき出して來た。誰れだらう？

それは男か？　女か？　それとも私の見あやまりか？　何うも暗くて凡てが判然としない。もつと近寄つて見ねばならない。然し、そのために私が耻ぢをかくやうな事でも起つたら何うする？　いや人の跡をつけるなんて、もう初めから耻ぢは掻き切つてゐる。では構はない。もつと近附いて行つてやらう。

さう考へるか考へぬ内に、私の足は獨り手に前へ進むだ。直進せずに、何だか圓く歩き出した。さうだ。やはり心が怖えてゐる證據なのだ。何故、斯う怖えねばならぬのか？　正二と並むでゐるその不可解な人影が既に不可解ではなくて、もう可成り明瞭に私の眼に浮むでゐる。私は電光形によろめきつゝ、更に今一息近づいた。

はて！　男か？　女か？　和服を着て帽子を冠つてゐる。それなら男に極つてゐる。女がまさか拔衣紋をしながら帽子を冠つてゐる譯がないぢやないか――いくら、歐化が盛んになつたからつて……。

男と男と密會する？　之は妙だ。其の奥に何かしら「悪」が祕むでゐねばならない――私はさう危ぶみつゝ、遠慮しないで、もつと近くへ寄つて行つた。何うも全體の感じが變だ。妙にそぐはない。怪しい男の帽子はソフトやハンティングではなくて、私の眼が過ちでなくば、黒いボンネットらしい。私は其處で心臟を引き締められるやうな氣がした。もつと、もつと、よく觀察せねばならない。はて……帽子には白いリボンが卷いてある。それなら尙更男物ではない。それに、何うだらう、その怪し

い影の歩き付きは……見た所……如何にも物柔らかではないか。一寸立ち止まる時なぞ、內股にさへなる。腰を曲げたりする場合も素直で、その邊が丸く幅つたい。腕を持ち上げた、と、衣服の袖がスヽべこく下へ落ちて、二の腕まで見える、その擧動も確かに女性的である。いや、疑ひはない。あの袂は長くヒラめき、八ッ口も開いてゐる。では何故、帽子を冠つてゐるのか？ 矢張り不良な女で、奇と云ふものを好む性癖が强い奴ででもあるのか？

もつと私は接近して見た。女が一寸振り返つたが、私は早くも斜めに步いて何氣ない風を見せたので、女は別段私を不審がらなかつた。其處で、もう一度、女の頭部へ私は注意を向けた。

何でもない。帽子なのではない。美しい 西洋髮の上から白い 繃帶をして ゐるのだ。 怪我か？ 怪我！ 旣にそれは何となく「危險」の象徵であるやうな氣分を起させるではないか。

困る。繃帶の女とは困る。

然も、若い女性に違ひない。その動作にねばりがある。湯から上り立てのやうに彈力がある。ぢつと見すゑてゐると、軈て若い女は首をかしげ、手をさしのべ、正二の腕を捕へた。正二も右方の肩を心持ち上げて、體を二三度ゆすつたが、すぐ女の肩へ手を掛けて、それをずつと押した。押すとは妙だ。女は後へよろけた。よろけるとは妙だ。然し次の瞬間、正二はよろける女をぐつと前へ引き寄せた。何だらう？ 喧嘩か？ 云ひ爭ひか？ おゝ、さうではない。「引き寄せる爲めに、先づ押しこくる。」動作を誇張してゐるのだ。戀愛遊戲の一種なのだ――と、私は直覺した。

私は驚いた、落膽もした。正二は未だ二十一だが、もう戀人を持つてゐる。いや、戀人を持つのは許し得る。唯だ心配なのは相手の女性が何う云ふ家の娘で、何う云ふ過去と現在とを持ち、何んな未來を豫示してゐるかと云ふ點だつた。けれど私はもうその上この二つの影の戲れを詮じ詰め、見きはめる勇氣を缺いてゐた。

私は考へ、呟き、迷つて家路へ急いだ。正二の影、女の影、それが私の頭の中を黑くゆらぎ廻つて何時迄もやまなかつた。仕方がない。仕樣がない。成り行きは遠慮なく進むで行くものである。いや、然し、あの女は誰なのか？ はて、之は何だ、この私の心の中にしやがんでゐるのは？ 若しかしたら嫉妬、或ひはその隣りのものであつたら何うする？ 好いではないか、正二に戀人があつても！ 私にだつて若い時代には次から次と三人も四人も戀人が出來たではないか？ いや、それでも正二を打ち捨てゝは置けない、彼を私と同じものにするのが私の希望だとでも云ふのか？ 違ふ、違ふ。私は旣に過ちを完了した人間だ、正二は之から過ちをしようとする人間だ、私は何うしても彼のほしいまゝな行動を運命にまかせてすてゝは置けない。さうだ。問題はあの女性が誰れであるかと云ふ點にある。それを知らねば、何一つ考へがまとまりはしない。

私は家へ行き着いた。もう一度、正二の日記を檢べてやらねばならない！ 之が一番肝腎な、然し、

何となく罪深い考へだつた。でも躊躇しては居られない——私は急いで彼れの机の抽き出しを引いて見た。鍵が掛かつてゐる。鍵は何處にある。彼れの蟇口の中だ。外出する時、彼れは蟇口を持ち出したか？　いや、案外にも、それは本箱の上に、無造作な形で投げ出されてあつた。

私は抽き出しを開いた。罪の造り次手に日記をも開いて見てやつた。然し、案に相違して、其の中には何故か一つの情事も記してはなかつた。私は一寸落膽した。うむ、探つてはならぬ。と云ふ神の知らせが此處に見出されると私は考へ直した、その拍子に私の視線は日記帳の上からすべつて、抽き出しの中へと走り込むだ。凡てのものが白い中に、一つ丈、黄色い光輝のあるものが私の注意を惹いた。何だ？　絹の紐か？　紐にしては幅が廣過ぎる。リボンの切れはしだ。私はそのはじを持つて引き出して見た。リボンへ一寸縫ひを加へたしをりだ。女が呉れたものに相違ない。所で、私がこのリボンを引張つた時、一緒に出て來たのは一冊の帳面だつた。私は初めそれに注意する暇がなかつたが、次の瞬間、その表紙に「Sの手記」と書いてあるのを發見すると、急にこの方へ手が伸びた。手蹟は正二のものである。私は開いて見た。

一番初めには彼れが玉突きの「ゲーム取り」をしてゐた頃の悲哀が可成り上手に敍述してあつた。

その次には、母親、淺倉リン子に對する非難のやうなものが二三頁認めてあつた。三番目には私の事でも書いてあるかと思つて注意して見ると、私の眼を早くも射たのは全く別の「見出し」だつた。

「彼の女は何うしたのか？」それが標題だつた。その下に器用な筆づかひで一つの大きな眼が描いてあつた。二重瞼で、上眼を使つてゐる。

それは何うでも好い。正二の書いた女に關する手記と云ふのは大體次の通りだつた。

それはカカオ脂のやうな匂ひの、ベルガモットのやうなそよ風を起す娘なんだ。若い、そして何だか派手な色をしてゐる。蟲にも警戒色と云ふのを持つてゐるのがあるでせう？　光つたり、鮮かだつたり……。

その若い娘はまるで背の高い昆蟲のやうだつた。髪にはガラスと銀が光つてゐた。觸角のやうな濃藍色のものがピラピラしてゐる。首は油が塗つてある鳩の羽のやうにつやゝかだつた。樺色の頬紅をつけてゐた。それに、前髪を少し鋏で切つて、前へ垂れてゐた。私はこの娘を瓦斯燈の下でちらつと見ると膝がしらに力がなくなつた。胸がむら〳〵した。するとドキドキと音がはずむ。娘の方でも私を振り向いてゐる。心臓の中へ石が落ちたやうに、ドキドキと音がはずむ。血が波紋をかく。血管が一度に太くなる。

之を私は毎晩やつた。さうです、娘が街を通る時間もきまつてゐるのです。

それに妙な娘ではないですか？　彼の女は街上で私を見ると、驚いたやうに緊張する。それから必

ず。後ろを一應ふりかへり、そこらに人の居ないのを確めると、今度は大膽に私の方へ寄つて來るのだ。

私は初め此の人が私を好いてゐて吳れるのだとは思はなかつた。その內、彼の女の眼の色が段々强くなつて來た。初めは石盤色だつたが、了ひには黑漆のやうになつて來た。私はそれを思ふと病氣になりさうだつた。

到頭、又、別の事が起つた。娘は私のそばをすれちがふ時、態とよろけて、私にぶつかつた。頭にある靑い觸角がピラ〳〵とふるへ、耳が象牙のやうに光つた。サクッと何處か音がした。黑漆の流れのやうに視線が走つた。暖かいベルガモット水のやうなものが吹きこぼれた。あたりは水々しい匂ひが霧のやうだつた。チロ〳〵と鈴がなつた。彼の女はそんなものを袂へ入れてゐたのかしら？

私は惡い夢に取りつかれたやうになつた。何も晝間はしなかつた。夜が來た、闇だ。燈火だ。街路樹に露が降り、小石が濡れて眼を開いた。

又、强い力が私を呼ぶ。私は指の關節をポキンと伸ばすと、すぐ出掛けた。

娘が來た。綠の帶をしてゐる。半分飛んでる山鳥のやうに、足を浮かせて、前のめりになつて私の方へ寄つて來る。もう、顏が私のそばにある。大きい花のやうだ。それが私をのぞき込む。彼の女はよろけ、私の足を踏むだ。

「あら！」と、娘は唇をほころばした。「ごめんなさいましね……貴方……」

「かまはない……」と、私は云ひよどむでよろけた。だが、私は眞紅に眼れたやうになつて、急いで其處を過ぎ去つて了つた。

何でも正二の手記と云ふのは以上の如きものであつた。

彼れ等二人は唯だ唯だ步き廻つてゐる。大變に妙ではないか？　この手記は、全然、造り事なのか？　いや、何かその根柢に事實が祕むでゐるのは疑ひない所だ。では、あの女性が何處の娘かも分らぬ內に、正二はもう交際を初めたのか？　之は何と云ふ野蕃な會合だらう。この新しい世紀の中で行はれて好いやうなものではない。それにしてもオルガニザチオンと云ふのはこんな會合を指してゐるのかしら？

そんな臆測を重ねてゐる內に、幾日かゞ又過ぎて行つた。私は一度忘れた例の女の事を又も思ひ出した。

「若いに違ひない。乳の上さへも蔽ふ程、高々と帶を締め、おはしより無しで、帶の直ぐ下から腹を突き出し、威張つて步くやうな女だらう、口が馬鹿に大きくつて、眞面目な時と、笑つた時とでは、別人のやうに顏の形相が異つて了ふやうな……」

そんな女だらうか？　私は知らなかつた。正二と彼の女とは何時もあの大クレーンの下で落ち合ふのかしら？　それなら、假りに、私がクレーンのボイル油くさい機械場へ忍むで待つてゐたら、あの女の顏を見る事も出來、彼の女の敎養、彼の女の親の財産なぞ迄も知る機會をさへ捕へ得るだらう。

一方、正二の浮き浮きした擧動は少しも改められなかつた。それに、或る日なぞは、次のやうな感想めいた事を私の前でれい〳〵と口にした――

「私は幼い時、海へ這入つたが、何でも波が一丈程もあるやうに思へたつけ。それから、象を初めて見た時には大きさが三丈位あるやうに思ひ取れましたね。所が今になつて見ると、何でも小さく見えて仕方がない、やはり、自分の丈が伸びた爲めでせうか。」

私はこの言葉が氣に入らなかつた、何故なら、彼れは私を物の數とも思つて居ないと云ふ意味をそれとなく私に打ち明けてゐるやうに考へられたからでした。私は一日胸が惡かつた。そして、その夕方、恥かしい事だ、私たちはもう耐へ切れないで口論を初めて了つた。（おゝ、私は又、回歸的に、時間的に生理的に惡黨化したか？）

それも原因は些細な點にあつた――つまり、塵芥箱の位置の變更と云ふ事だつた。もう一つは、私が鐵瓶を火鉢の上へ掛けると、その口の向きが惡いと云つて、正二は直ぐ鐵瓶を掛け變へた。それが私の立腹を買つたのだ――實際、人にも話せない愚かな事だ。

到頭、奮興した正二は、

「お父さんは何故牢死しなかつたんだ！」

と叫び出した。私も敗けずに、

「お前こそ、火事見舞ひにでも行つて、ビステキ見たいに燒けて了へ！」なぞと大業な口をきいた。なぐり合ひが初まつた。正二は口惜しがつて齒ぎしりをした。さうです。力は私の方が强かつた、體の幅も私の方が廣かつた。それで正二はいきなり緣の下から鋸を取り出して、向上會の看板を外すと、直ぐ二つに挽き初めた。つまり、私が斯う云ふ高尙な事業に適しないのを思ひ知らせてやらうと云ふのが彼れの魂膽だつたのです。

私は彼れの背中へ飛び掛つた。だが、その時、免囚たちが畑から歸つて來て、二人を引き分けて吳れた。それでよかつたのだ――さもなくば、きつと、何方か怪我をしたに相違なかつた。恥かしい。そこいら中は籠から轉がり出した馬鈴薯で、足の踏み場さへなかつたではありませんか？

その晩、外出した正二は夜中の一時頃、やつと家へ歸つて來た。彼れは眠つてゐる私のそばへ氣附かれないやうに忍び足をして近寄つて來た。私は何となく無氣味になつたので、眼を開き、ぢつと彼れを睨めてやつた。

「なあんだ……」と、正二は呟いて、又、向うへ戻らうとした。一體、何う云ふ積りなんだ。私は彼

れを呼びとめていきなり、露骨に斯う云つてやつた――何故云つたのか分らない――

「お前には女があるな？　正二！」

「なあんだ……」と彼れはうなだれ乍ら不可解な答へ方をした。

「あれは惡い女だぞ！」と、私は息をはずませつゝ、すかさず、附け加へた。

「檢べてゞも吳れたのかい？」と彼れは不氣味な顏をして呟いた。

「切れろ！　あの女は化け物だぞ……」

「何を？　貴樣こそ狸の癖に……」正二はいきなり手を擧げた。紙に包むだ圓いものを彼れはその手の中に持つてゐた。菓子でもはふり投げるのだらうと私はたかをくゝつて安心してゐた。すると、彼れはその持つてゐるものを力まかせに下へたゝきつけた。恐ろしい爆音が室中に反響した。私は驚愕の餘り飛び上つた。死なゝい迄も、何處か怪我をしたらうと直覺した。然し別段煙りが立たない。よく見ると、硝子の破片が飛むでゐる――おゝ、彼れは電球を投げたのだ。餘り人を馬鹿にしてゐるではないか。

斯んな不快な事件のために、二人の間が益々遠くなつて行つたのは、もう態々云はないでも分つてゐる。然し、此處に疑問がある一體何故私は斯う迄正二を憎み、彼れに敵對せねばならないのだらう？　此の氣持ちの原因は約まる所、何物にあるのだらう。

私はもう此の問題に大きい興味を持つ事が出來なかつたのを言明し得る。さうです。私は私一流の倦怠の感に捕へられて、その頃、取りとめのない居眠りを仕續けてゐたのだつたから……。けれど機會と云ふものは必要でもない時にやつて來る。そして、祕密は偶然な機會から明るみへ押し出されるものだ。いや、さうではない。私は間違つてゐた。私は故意にあの毛脛の男――その頃も向上會の小使ひをしてゐて吳れた例の松岡國造に何かしらを相談し、命令さへしたのだ。偶然ではない、故意だ。そして何を命令したか？　云はないでも分つてゐる。之々の事を、之々の方法で、探つて見て吳れろ――それだつた。

元來松岡はお人好しで、いくらか愚鈍でさへあつたが、それにも拘らず、影の中で、影の奧を探るに適する妙な才能を持つてゐた。探索は彼れ一流の氣長と內氣とに依つて、可成り委細に成し遂げられた。さて、その結果を聞くと私は驚かずにゐられなかつた。

で、私は口惜しまぎれに、到頭あの女に就いての色々の祕密を正二へ打ち明けてやつた。おゝ、私は何と云ふ度し難い感情を持つてゐる男か！　憎みが初めは一つでも、それが二つとなり、次には四つとなり、八つとなる。この烈しい鼠算に依つて、私は正二への憎しみをモトにして、先づ、あの背高女を輕蔑し、次には彼の女の周圍にある人々一切をさへ茶化して了つた。善良な人々も不良なものも混沌と私の心のルツボの中で馬鹿にされながら煮え返つた。私が正二に聞かしてやつた惡口と云ふ

のは浅ましくも次の如きものであつた。〔何うか許して下さい〕私はそれを極く略して此處に語り直さう。全く、私はある事、無い事を、自分の眼で見たかのやうに斯う云つたのでした。

×　　×　　×　　×

正二、聞けよ。……何うだ、それ丈けでも、もう落膽したらう。所が、未だその先があるんだから面白い。それとも、厭だと云ふなら、よさうか？　聞きたい？　極つてるさ、自分の女の事だものな。ぢや、話すが、あのKと云ふ美しい尼さんのお師匠さんの、もつとずつと年寄りな猫背の尼さんが、お寺の隣りへ、林泉會と云ふ家を持つてるぢやないか。あれは、お前、感化事業と云ふ事をやる家なんだよ。で、その家へ、R警察署から、巡査の附添ひで、廻されて來たのが、つまり、あの春子さんなのさ。その時にや、お孃さんぶつて、花模様の被布と云ふものを着てゐたつけ。下の着物は何んなに汚くても、被布をその上へ着ちまふと、人間はずつと上品に見えて來るんだ。それに、あの女つたら、隨分顔を桃色に綺麗に化粧したり、髪へ光つたガラス飾りをするが、下着の襟の妙にふくらんでる事つたら何うだい。あれは、お前、襟がよごれるとは、それを取り去らないで、すぐその上へ、又新奇をの縫ひつけて、三つも、四つも、襟が重つて了つたから、あんなにふくらんでるんだぜ。で、もう、くつゝける襟がなくなると、それが白粉で鼠色に染まり、その上、油で黒くなつて、光つて來る迄、うつちやつて置く。それから、いよ〳〵、たまらなくなると、今度は一枚はがす、下のも汚れてはゐるが、未だ少しは好い。又汚れる。もう我慢が出來なくなる。すると、また、はがす、さうして、あんなにふくらんでゐた襟が、到頭、平らになつて、一番上等の、祕藏の錦紗が表はれて來る。まあ、今迄、話した襟の事は半分嘘なんだが、あの女の不精は丁度そんな風なんだ。だから、年寄りの尼さんが心配して……いや、心配したのは襟の事ぢやない、もつと別のもつとえらい事だつた。

さうさ、林泉會に居ても、あの娘はホクロやエクボで顔を賑かにして、ニコニコと愛嬌よくしてゐた。それは好いとして、あの女は時々、隣家の大人しい娘に惡い事を教へたり、小使錢をゆすつたりしたのだ。その內、年寄りの尼さんの下に使はれてる下女のお金もなくなつた、そこで養つてある不良な男や女が檢べられた。分らない。だから、

「今度、盗まれたらわかるやうに、私の持つてゐるお札の緣へ赤いインクを目印しにつけて置きませう。」とこの下女が獨りごとを云つた。

尼さんはそれをとめて、

「さう云ふ謀みにも罪がある。」と云つて、食パンの頭みたいな自分の頰ぺたを撫でさすつたものさ。

所が何うだい？　それから十日とたゝない內、又、下女のお金がなくなつた。そして、春子さんのバスケツトの中から、赤インク附きの十錢札が出て來て了つた。まだ、その頃の春子さんにや、新米

の刑事と同じやうに、隨分手ぬかりがあつたんだね。だから狸色の尼さんは落膽するより、むしろ、喜むで斯う云つたものだ——

「まだ、見込みがありますよ、何處か正直な所があるやうだ……」

尼さんは出來る丈氣長に、この山猫娘の面倒を見てやらうと決心し、色々の方法で、まあ彼の女の心へ、善い筋をつけてやり初めたんだ。心へ定規をあてがひ初めたんだ。

それは好いとしてさ。その內、何だか知らない眼のないやうな大きな顏の若い男が林泉會へ訪ねて來た。男の云ふには、

「春子を返して下さい……。」

「返せません。」

「でも、あの偉い娘は私のものです。」

「それにも增して、佛樣のものです。」

男はがつかりして、大きな顏から眼もなくなつて了つたやうな風だつたが、でも、割合に心の柔らかな奴だつたらしいので尼さんはこの男をも憐れがつて、或る葬式會社の事務員に世話してやつたんだが、さうなると、男の奴も涙を流して喜んでゐたのは何う云ふ譯だつたらうね。

所が、この大人しい男が、或る日えらく醉つ張らつて、尼さんの家へやつて來た。醉つぱらふと、大きな顏の中から眼が双葉のやうに表れて來た。春子さんは尼さんの背中へすがり附いて、尻尾を卷いて、顫へてゐたつけ。男は急に叫び出した。

「尼さん。監督つてのは何う云ふ事を指して云ふんだい？」

「佛樣のお慈悲の加つたものですよ。」

「戲談だらう。だつて、私の春子はR警察署の渡邊巡査へ艶書を送つたぢやないか。」

それで尼さんも驚いて了つた。男をなだめて歸してから、尼さんは眞面目な言葉で云つた——

「春子さん、それは本統ですか？」

「いゝえ、渡邊さんに、唯だ、就職口を賴むだ丈なんですわ。」

「その必要が何處にありますか？　私が探して上げる就職口ではいけないのですか？」

「でも、餘り、御世話になり通しで濟まないですもの。」

「その言ひ譯を佛樣は喜びなさるかしら？」

それで、問題はハッキリしない內に、消えて了つた。と思つたら、又起つて來た。何故つて、例の渡邊巡査の奴、何の耻ぢもなく、堂々と、林泉會の表て玄關へ乘り込むで來やがつた。奴のニキビの治つた顏は食パンの尻のやうだつた。

「春子さんは居りますか？」斯うなんだ。

困つて了つたのは尼さんだ。之は艶書の結果なのか？　それとも唯だ就職口の依頼の結果なのか？何方なのです、と、露骨にも聞けやしない。それに何うだらう。春子は巡査の聲を聞きつけると裏から緒の切れた下駄をバク〳〵云はせて、飛び出して來た。尼さんは玄關に立つた儘、考へ込むで了つた。到頭思ひ切つて、かれた聲を張り上げて、

「あゝ、手前共に置いてある娘たちは、無斷で外出させない規則になつて居りますが……」

「御安心なさい、何より私が附いて居りますから……」食パンの横手のやうな顔の巡査は振り返つて斯う答へ、春子の丸い腕をとらへて、又、門の中へ這入つて來た。何だか譯が分らない。巡査は少しすると、歸つて行つた。尼さんがそれを追ひ駈けて、お腹を兩手で押へながら、門の外へ出た。彼の女は云ひ憎さうに巡査へ尋ねた——

「何う云ふので御座います……春子のシン底の心持ちは？」

「私に甘い色目を使ふのですけれどね……」

「その他には……？」

「困つたものです……」

「何かあるのですか？」

「私は斷りました。」

さうだ。春子は斷られた。女として、一番器量の無いやり方ではないか？　もう此の上の恥ぢはありやしない。あの女は何時も自動詞なんだ。受け身と云ふ事を知らないのだ。

それから三日たつと、今度は服の背中へ一杯カビを出して、加島巡査が春子に會ひたいと云つて來た。

尼さんは留守で、弟子の美しい尼さんが居る丈だつた、あれはフリジヤのやうな好い人だね。自動詞の春子は長い事、この巡査と相談した。背中のカビもブラシを出して來て、はらつてやつた。それで巡査は歸つて行つた。フリジヤの尼さんは心配して、巡査を呼び戻した。二階へと上げて春子に聞えぬ所で、之も亦、相談した。

「春子さんは貴方へも祕密な手紙を上げたのですか？」斯う尋ねて尼さんは自分の事のやうに顔を赤く染めちやつた。

「さうではないが、渡邊君が病氣なので、代りに見廻つて上げたのです。」

何う云ふ譯で見廻るのだ？　何の必要があるのだ？　此の點が餘りよく分らない。

それから又一週間！　春子の所へ渡邊巡査から飛び切りに贅澤な封筒で手紙が來た。尼さんが立會ひの上で、封が開かれた。

手紙には、小間使ひの口があるから、世話をする、行く先は大きなパン製造所の主人の妾宅だとあ

る。

妾宅はよろしくないと尼さんは反對した。所が其處へ加島巡査が新しい服を着て這入つて來て、春子の監視は今後自分が引き受ける、長い事、お世話樣でしたと云ひ切つた。

尼さんは警察から引き受けた少女を、又警察へ返すのだから、何うも文句が附けられない。

それから、尼さんが向ふを向いて蚤を取つてゐると、渡邊巡査が訪ねて來て、

「春子さんは？」

「加島巡査が連れて行きましたよ。もう。」

「それなら、春子の荷物を私が引き取つて行きませう。」

「もう一つも殘つて居ません。」

それより、氣になるのはパン屋の方だ。一體、春子は小間使ひに行つたのか、それとも妾に上つたのか？　まさか巡査がそんな世話をする筈もない。その點だけは安心して好い。心配なのは巡査と春子の仲が好過ぎる事だ。之はこの先何う進むで行くだらう？　又、巡査には、加島と渡邊の二人がある。一體、春子の戀人は何方なのだ？　渡邊は春子の申し出を斷つたらしい。では、加島？　この邊の消息は長い事私にも分らずに了つたんだ。

葬式會社事務員が又林泉會を訪ねて來た。

「パン屋の妾宅に春子はもう居りませんよ。」と、彼れは落膽して云つた。眼はないけれど、涙丈が光つてゐた。

「では何處へ逃げたんだらう？」

「H小學校內の小使室の三疊を間借りしてるんです。」

「貴方と御一緒に？」

「いゝえ、何だか、沈むだ顏をして、思ひ切り孤獨になつて見たいなんて云つてるんですがね……」

「收入は何處からあるんです？」

「今はB洋服店の裁縫部に這入り込むでゐるんです。巡査達からも六圓と七圓と借り込むだ相です。」

「裁縫部？　では以前の醜聞を隱してゞすね？　あゝ、あの女はミシンの名人なんだね？」

「皆、巡査の世話だと聞きましたが……」

聞きなさい、正二、お前の愛人は化物だと私が前にも云つたのを覺えてるだらう？

×　　　×　　　×　　　×

以上の說明は大部分事實だつた。松岡國造はそんなにも委しく檢べて吳れたし、私も實は林泉會の尼さんに會つて色色話しを聞いたのでした。

丁度その頃の事、私の妻のリン子は出來る丈美しく着飾つて、狸だか、狐だかのボアとマフなどを

身に付けて、私の所へ忍んで來た。そして、何だか不快な話しを續け打ちに持ち出して、私を暗い穴倉の底へ引き入れた。彼の女は私たちのもう一人別の息子、英一と云ふのが、何處其處の市街で、何だか惡事を働いて、留置場へ投げ込まれた事迄、細かく、又、荒く、もう辻褄も合はずに喋べり立てた。そして、感心な事に、母親らしく聲を立てゝ泣いたりして、「之と云ふのも、皆、父親の心掛けが間違つてゐるから、その應報なのだ。」とうそぶいた。

この時の私の落膽が何う云ふ風にウネつて行つたか、おゝ、それは誰れも知つてゐる譯がない。私は獨りで道を步き乍ら、泣き狂つた、溝へ片足を陷して、新らしい靴をよごしたりした。何うして斯うなのだ。何うして……。誰れも、返辭をして吳れるものは無かつた。

それ位の事は何でもない。次にはもつと忌はしい災難が待つてゐた。私は內々それを豫感はしてゐた。では、別に驚かなかつたか？　途方もない。私は飛び上つた位だつたぢやないか。

正直に云はう。正二が警察の手につかまつたのです。一體何うしたのかと思つて、そこへ行つて見ると、

「父親が惡いから、息子も惡い。」なぞと誰れかゞ云ふのだから、默つてはいられやしない。

「何て簡單な考へだ。片假名よりもつと簡單だ。」と、私は情なくなつて呟きました。實を云ふと、私はもう腹を立てゝゐた。私が斯んなに善い人間になつてゐるのに、未だ皆さんは疑つて見たり、昔の事をあからさまに思ひ出して、それを淺間しい樂しみにしてゐなさるのだ。分つてゐる。分つてゐる。

偖て、それよりも、署長さんの云ふには斯うなのです。

「お前の家のタンスを檢べる必要がある。」

勝手に檢べるがよい、所が私の家にはタンスなぞありはしなかつた。署長は本箱の事をタンスなぞと洒落れて呼ぶのだ。

「そんなら、藥罐の事を消防夫の帽子と呼ぶがよい。だが、口のついた、そして、蓋のある帽子とは何たる事ぞ。帽子それ自身が元來人間の蓋なんだに……」何だか分らなかつたが、私は妙に署長へ反感を抱いて斯う獨語したのでした。

本箱は私が立ち合ひの上で檢べられた。所が全く、戲談をずつと越えてゐる事が其處に起つて了つた。本箱は本を入れるものだに、その中から、二人分の茶碗と、もうカビの生えてゐる餠菓子とが出て來た。

「こりやあ何の譯だ？」と、私は自分の家庭の內情が不可解なのに驚かされて了つた。

あとで、子供に聞き糺した所、彼れは私を嫌つて、食器も別のを使ひ、又、別に隱れて、菓子を食べるのを一番の樂しみにしてゐたのだと分りました。私は背中の方から胸の方へ、寒さと寂しさが突

き拔けるのを感じたものだつた。

「長い間、散り散りでゐると、親子の心でも斯んなになつて了ふのか？」實に、實に私は人が居ない所で、自分の腕を嚙みました。壁へ向つて泣きました。その事を壁だけが知つてゐる筈だ。

それより、例の署長は何うだつたでせう？　本箱の中には、何も面白い種がなかつた。彼れはゴミ隱しをやつてゐる青鬼の子供のやうな顏をして、鼻の穴をふくらまして了つた。

「餅菓子！　成る程、この餡の中に、何かしら惡がある。」と、彼れは思つたらしい。青鬼の甥め！　何でも窮極の所へ「惡」と云ふ核軸を豫定せねば承知しないのが彼れなのだ！　けれど菓子は菓子以外の何でもありはしない。いや寧ろそれは寂しい父親と、馴れない子供の間に出來た淵と似たものに過ぎなかつたのです。それは甘くなく辛いものだつた。

考へるのが私は苦しい。この古くさい頑丈な胸が痛むでさへ來る。

息子を充分に教育し、彼れの性格の再建を試みねばならぬと心懸けて、餘り一流とは云へぬが、兎も角、あの私立大學へでも通學させる丈の運びにしてやつたのは一體何處の誰れなのか？　それとても、私の實子として入學させるには赤い字のある汚れた戶籍謄本を大勢の人の眼へさらさねばならぬので、まあ、その點も色々と無理なつくろひをして、何うやら都合をつけてやつたのは誰れなのか？

それを皆さんは好く知つてゐて下さるのだ。

それだのに正二は逃げ出して、警察の御厄介。英一も何處かの留置場。之で私の心がさぞせい〳〵した事だらう。さぞ、さぞ滿足な事だらう。私はもう淚も出ない。たゞ、ぢつと、いきむで寒さを耐へ、眼を裂ける程見張つて、顏の筋が泣きさうに歪むのを制してゐる。何と云ふ態とらしさ、然も、之が自然の成り行きなのか？

その時だ！　私が又、妙にこじれて、考へ出したのは……。

「この心持ちは何んだ。之を淋しさといふのか？　それなら、淋しさとは何だ？　ハハア、私は何か間違ひをやつてゐるんだな。何うも本統の事が一つも出來てゐないやうぢやないか？」

自分が惡い。子供が惡い。然し、叱らねばよかつた。邪魔なぞせねばよかつた。

私はせめてもの罪ほろぼしに、其處で一つの善い行ひを少しばかりした。つまり、あの心臟病の建具師、青ぶくれのした倉内嘉吉の女房が產をしたばかりだのに、七つになる上の兒が池へ落ちて死んだので、之を始末する者が誰れもない。その親父は息が切れて、立ち居にも差し支へる。それで私が葬式一切の世話を燒き、半分丈費用をすけてもやつたのだ？　思ひ出して見ると、哀れな事だ。眞白い屍骸、遠く拔けて行つた幼い生命。何うして斯う云ふ事が起り得るのだ？　私はあの冷い肌をさすつてやつた。私の唇は恐れと悲しさで顫へた。小さい手の指が藻搔いた形になつた儘、堅く縮むでゐ

るので、念佛を稱へ乍ら、靜かに平らにしてやつた。おゝ、小指を藥指にからませてゐた。苦しかつたらう、苦しかつたらう。

私はもう勞れ切つて家へ歸つた。急いで話さう。其處へ、一人の何だか譯の分らない、口のとがつた、ズックのやうな顏色の若い女が訪ねて來て、しきりと私にお辭儀をした。

「何の用だ？ 早く云ひなさい。」と、私は背中や肩の痛みを耐へつゝ尋ねた。女は啞だつた。彼の女はヅル相な眼附きをし、臆病な手附きで一枚の紙切れを差し出した。それには斯う書いてあつた。

「——私は二年前から發作的に盜癖を生じ、夢中で人のものを掠め取るのです。あとで考へると、恐ろしくて仕方がない。然も、自分で矯正する事が何うしても出來ない。聞けば貴方は私のやうな者を正しい道へ返して下さる力を持つてお出での由、何うか私をこの苦しみから免れさせて下さい。——」

私はその時、あまり勞れ過ぎてゐて、何だか適當な分別を失つてゐた。そのために、思はず斯う叫むで了つた。

「そんな偉大な力のある奴が人間の内に居るとでも云ふのかい。」

私の顏附が恐ろしかつたと見えて、啞娘は鶴のやうな叫びを上げて外へ逃げ出した。私は初めて驚き、彼の女をなだめる爲め、直ぐ跡を追はうとした。然し、私の下駄の鼻緒が切れてゐたか、何うだかして、私は駈け出せなかつた。いや、駈けたければ、跣足でも構はぬのに……。私は駄目だ。折角、建具師の兒へ親切にしてやつたのに、もう直ぐ斯んな片手落ちをしてゐるのだ。私は後悔した。そして、啞の跡を追つて、悲しく夕暮の道をさまよつた。

凡てが間違つてゐる。齟齬が一切である。合はぬ齒車の間へ挾まつて、私は身を碎き刻まれてゐる。

もの忘れをしたやうな氣分が暫く續いてゐた。だが、その結果は隨分と惡いものでした。何故つて、極く自分に都合の惡い事を、私はふと思ひ出して了つたのです。

夜、寢ようとすると、まるで他人のやうな聲が、自分の口から出て來るんです。「デュルケム君！ 犯罪が此の社會に必要である譯は、それが道德や法律の進化に取つて不可缺のものだからさ。社會進化のためには、古い化石的な道德意識の力がはびこり過ぎてゐてはならぬ。社會が個人的な獨創性に對して、十分自由を與へると、その時、一方に於いては舊態を脫した天才や發明家が表れ、その他方には伴隨條件として色々の犯罪者が出て來る。後者は前者を生むための必至的な犧牲である。さうだ必至的なのだ。血の力によるのだ。社會と脈を通じてゐる根本の生命に依る事なのだ……。」 それでは、もう之は苦しい、殘酷な考へだ。自分の心より血の方がずつと古手の惡の本尊なのか！ 何うにもならないではないか！

あまり酬いられる事の少い私のその頃の生活……息子等は私を笑つて、捨てゝかゝつてゐる「待つ

ておくれ、私はお前たちに絹の衣服を買つてやるぞ、たゞ待つて吳れさへすりやよい。私が斯んなに追ひかけてゐる譯が、お前等にはちつとも分らないのかい？　私は靈の拔けがらだ、お前等こそ私の靈なんだ。待つて吳れよ、待つて吳れよ、私は親なんだよ、お前等は子なのだね？」斯んなにして私があせつても、つかむものは「無」丈だつたのでせうか？

「お父さん、私たちは之からお父さんの眞似をして、何かやり出しますよ。」答へは斯うなのです。誰れが苦しまず、悲しまずにゐられるでせうか？　私はもう何も知りはしない。唯、我慢が出來なかつたのです。

「血が惡いのだ。それで斯うなるのだ。」と私はまるで辯解のやうに云ひました。そして困つた事に、この考へが大層ハッキリして來て了つて、胸や頭一杯に、何時も輝き渡つてゐたのです。

「之ではならぬ！」と、私は或る朝、早く起きて、霜を喉一杯に吸ひながら、悲しみました。何か本を讀むで見よう。だが、えらい霜ではないか？　肌が寒く、私の顏には血の氣がなかつた。眼が貧血して、冷たいガラス玉を入れ眼してゐるやうな氣持ちだつた。

私は古い本を取り出した。ガラスのやうな眼から水が出て來た。つまり、寒さが沁み入るんでした。本には斯う書いてあつた。

――三界は唯心だ――佛語は心をもつて本となすのだ――邪正の因果――妄を返して眞に歸する事――五法自性八識無我――法身常住――生死涅槃の平等――圓通無礙――お丶愚昧な事よ！

讀むだ。だが、滿腹の時に、料理の本を讀むやうな、一種、面倒な氣分が起つてゐた。私は無足類のやうに陰鬱になつた。皮面へサラ〳〵と細い鱗でも出來たやうに、味氣なかつた。

「一體、私とは何う云ふ人間なんだ？」

私は時々驚いて斯う叫むで見た。だが一寸も驚かないと同じだつた。驚き――それは一種生き生きとした喜ばしいものに相違ない。だのに、今の私にはそんなものは感じられなかつた。私は自分の個性を强ひて沒却し、何か自分のでないイビッな假面をかむつてゐるのではないかしら？　それで、斯んな風に、驚きがなく、眼鏡の上から、眼藥を差してゐるやうな氣持ちになつてゐるのではないかしら……腹のくちい時、料理の本を讀むでゐるやうな氣持ちに……。玉子、乳、バタ、砂糖、何でもありはしない。

私の心は始終子を產む兩棲類なんぢやないかしら。初めは水の中にゐる。肺と云ふものがない。それが段々出來て來る。エラが段々縮むで、鰓孔がふさがつて了ふ。やつとの事で陸へ上る。だがもう心の子が出來る。心の子を見る。又エラが出來てゐる。私の心はエラと肺とを持つてゐる。水と陸を行つたり來たりする。いや、そんな論議は全く辻褄が合はない。實は、もつと、緊密な事實が私の眼前に展開されてゐたのです。

聞いて呉れますか、それが何だと!?

よろしい。斯うなのでした。

私の古い汚い兒分、あの秋田幸之助の事なんです。彼れは恐ろしく寒い朝、K警察署に留置されて了つた。私が向上會を開いて、何かしら重要な事をやつてゐるのを知つてゐて、彼れは警察の留置場から、或る人を頼むで、私へ呼び出しを掛けて來た。私は大變厭な心持ちになつた。けれども、耐忍するのは此處だと思つた。仕方なしに留置場へ行つて見た。私は彼れに會つた。すると彼れは泣いた。南京金魚のやうに眼をふくらかして……。

私は署長へ嘆願してやつた――

「お願ひです、署長さん。彼れは唯だの一時間丈しか賭博の帳場に坐つてゐなかつたのです。それに、彼れは日露戰爭の殊勳者で、金鵄勳章を天皇陛下から頂いてゐる男なのですから……」

「何？ 勳章だつて？」と、鷄のやうに喉の所へトサカの餘りをぶら下げてゐる署長は醉つたやうな赤い顔を大きなエボだらけな手で撫でゝ呟きました。そのエボには舊式なお灸がすゑてあつたつけ。

何うも此の勳章が効を奏したらしい。秋田は無罪と云ふ結果になつて了つた。

彼れは向上會へ少しの間奉公すると云つて、私の家に居坐つたが、その內、斯う私に打ち明けた。

「私は鄕里に五才の女の子が置いて來てあるんですよ。未だハシカもしない、むき玉子のやうな子なんです。」

「それを引き取りたいとでも云ふのかい？」

「まあそんな風なんです。で、私は身を切るやうな思ひをして、私の恩人松村さんに、今度やつと百二十五圓借りる事が出來たから、愈よ、――あゝ嬉しい――今朝出發しようと思ふのです。」

「それはよろしい。旅行費が十五圓、土產物が十圓、子供の養育料百圓と云ふ割り當てだらう？」

それは好い。で、彼れはB港から汽船へ乘るため、汽車でB驛迄行つたのです。所が、何う云ふ廻り合せか、O十字街で、體をすれ合したのが、山田吉藏だつたのです。學問もなにもない、ほんのナラズ者の山田は、幸之助が何う云ふ考へを持つて、其處を步いてゐるのかを察し得なかつた。それに幸之助は何時も雲の上でも行くやうにうつかりと、爪先立つて、遠くの方を見て步く癖があつたのですからね。

「此處の所をズーッと曲つて、一緒に行かうよ、好い所があるんだよ。極樂のやうな、嬉しい所さ。眼がパッチリと冴えて了ふやうな、酒がなくとも醉へるやうな所なんだ。」と吉藏は幸之助を誘つた。

二人は暗い帳場へ坐つた。電氣のある時代にカンテラがともつてゐた。彼等は賭けた。敗けた。それで、幸之助は寒空に襦袢一枚になつて了つた。彼れは胸がつまつた。胸の中に大きな舌が出來て、肋骨のすきを嘗めるやうだつた。百二十五圓がもう無になつて了つた。幸之助は顔中が脹れ上つたや

うに熱し、笑ふと涙がしみ出して來た、寒いのに湯へ這入つてゐるやうだつた。恩人松村？　身を切るやうな金、それを幸之助は考へ初めた。五歳の女の子？　田舍で待つてゐるだらう。もう先へ手紙がとゞいてゐる。だのに、自分は薄黒い襦袢一つで、痩せた雪だるまのやうになつて居る。土産の人形？　未だ買つてない。之から買はうと思ふ。未だ之からでも間に合はう。二十五錢。安いものだ。安いが然し金がない。感きはまつて彼れは一先づ私の家へ歸つて來ようとしたらしい。それで彼れは又B驛の構内へ這入つた。待合室、何でも其處に大勢の人がゐた。毛皮の外套を着た一人の人が他の人へ一寸鞄を見張つてゐて下さいと賴むで、切符を買ひに行つた。殘つた人が、何か云ひ忘れたと見えて、もしもしと叫びながら、之も前の人のあとを追つて駈け出して行つた。はてな、腹のくちい人のやうな鞄丈がぢつとソーファの上にため息をしてゐる。それは落ちついた隱居さんのやうに何も云はない。幸之助はちよつとその把手に手をかけて見た。持ち上がる。その譯だ。力を入れて引つぱつて見たのだから。それから鞄を下げたまゝ急に彼れは歩き出した。グルツとテーブルを廻つて、ストーブの前へと出た。すると、其處に立つてゐた襟卷をしてゐるミミヅクのやうな爺さんがいきなり幸之助を捕へて了つた。

又、警察だ、彼は留置場からはるばる私へ呼び出しをかけて來た。私は又金鵄勳章の事を云ひに出て行つた。何と云ふ兩棲類だらう。何度でも水をくぐるのだ。

それより、皆さん、自身で考へてやつて下さい。私のシン底の心持ちを……。

私は幸之助の雪だるまのやうに單純な顏を見ると、もう胸がつまつて了つた。

「さうだ、この愚劣さは正直正酩の彼れの所有物なんだ。決して借りものぢやない。彼れは自我と云ふものへ蓋をしてゐない。表面へずつと奧のものをさらけ出して、雪だるまのやうになつてゐる。臓腑も何もありやしないんだ。」

私はそれが何だか羨しいやうな氣持ちになつて來ました。之は危險な心の狀態である。一歩しか餘裕がない。私は自分をふり返つて見た。ことによつたら、私は生きた自我と云ふものを餘り强ひて沒却してゐたのではないか？　この「心の味氣なき全體」はその爲めに湧いて來たカビなのではなからうか？　え？　誰れかうまく說明して吳れないか、この六ケ敷い點を？　私は私の血を密閉したり、封印したりして好い氣になつてるのではあるまいかしら？

本統に生きるとは何んな味の事なんだ？　モルヒネ中毒者のやうに唯倦怠してゐるのが一番好いとでも云ふのだらうか？　何かもう少し苦しみの强いのがあつたら、まだ私は幸福だらうに？　私は淋しい。子供等は何處へ行つた？　さよならとは何う云ふ意味の言辭なんだ？

それに、何たる事だ。私の心の眞中へは、何時しか非常に惡い直覺——直覺だか概念だか私自身に

も分らぬ——一種の諦認が出來上つてゐたのです。

それは何か？　斯うです、——「私の周圍に色々な顏を見せてゐる人間たちは、その命の根本でもつて、何だか、私と氣脈を通じてゐるらしい。だから彼等が不意と行ふ行爲が皆私自身の運命を暗示し、敎唆し、又、時には私自身全體を象徵するんだ。

たとへば私が非常に立腹し、もう憤懣のやり場に困じはてゝ、他所の家の軒燈へ石でも投げてやらうかと、ふと思つたりして、こらへてゐる。さうすると、何うでせう。例の手品師になつた男が酒を飮み過ぎて、何の悪戯だか知らないが、名士の家の電燈を五つ六つも破壊して了つたんだ。

そして彼れは鐵砲の先へ帽子を冠して東京の須田町を歩いて居た爲め、警官——おゝ、始終、警官だ——に捕へられて了つたんでした。

一體斯んな私の厭な妄想は眞實なのでせうか？　いや、分つてゐる、みな、愚にもつかないコジツケなんだ。けれど、自分の運命が何うも他人の運命と似過ぎてゐるために、苦しくて仕方のない人は、決して私だけではないでせう。

其處で、もう一つ實例を附け加へるのだが、之はもう實に私の肺腑を血だらけにゑぐり散らした事でした。

私の向上會に一寸した關係のある淺田と云ふ六十男の身の上に斯う云ふ不快な物語りが持ち上つたのです。

いや、この淺田老人と云へば、彼れの頭に就いて、一寸妙な思ひ出を私は持つてゐる。次手だから云ふが、彼れは私に斯う話したつけ——

「私の髮の毛が黑かつた時分にや、そこへ一本でも白髮が生えると、私は氣にして、この謀叛者をこくめいに引き拔いたもんだがね。その內、何うだらう。私の年は何より好い證據を髮の毛で表した。もうすつかり白髮になつちまへば、何も白髮を拔く必要はない。いや、驚く事に、今度は、ひよつと間違へて、その中へ一本でも黑い毛が生えると、さあ、それが氣になつて、私は引き拔かずにゐられないんですよ。」

實に妙だ。昔尊重されたものが、今度は蔑視される。そして、昔さげすまれたものが今度は尊重せられる。可笑しい。そして道理にかなつてゐる。

この淺田は三十歲の頃、親讓りの數十萬と云ふ財產を費ひつくした擧句、妻子を置き去りにして、家を逃げ出した男なんですが、それから流浪の旅をつゞけ、色々の悪い事をし、又、その償ひに少しばかり好い事もして來たのです。私に會ふときは、悪黨に好くある長い齒を突き出して——

「寄る年波は恐ろしいものだ。この頃は我が子が戀しい、戀しくてならない。妻の事は一寸も考へないが……」

なんて、すつかりふさぎ勝ちになつて語り聞かせるのでした。所が、何う云ふ手づるに依つてか知らぬが、その息子の居所が不意と分明したんですね。青暖簾をピラ〳〵さした水菓子屋の店を開いて、相當に暮してゐるのを聞くと、淺田老人はもう夢中になつて了つた。彼れは胸にかけてゐる聖母マリヤの像を取り出して、嬉し涙に暮れながら、それを額に押しつけたりする騒ぎだつた。

彼れは斯う獨りごとを云ひました――

「息子よ、可愛い子よ、私は歸つて來たよ。お前の所へな。いや、歸つて來たとは云はせぬかい！ぢや、やつて來たのだ。私は老いさらぼへて、頭も眞白になり、額には重い皺が出來た。目はかすみ、齒も拔けて了つた。歩くと息ぎれがするし、此の頃では食もめつきり減つた。夜は何となく世の中が悲しくて寢られないし、その上、咳に苦しめられ通しだ。なあ、息子、父は勞れた。それで今は夜も日も温い巢をもとめてやまないのだ。鷲のやうな氣の荒い鳥にさへ巢はあるのだ。だのに、この涙もろくなつた老人にそれが許されない譯はありやしないな。さあ、私の巢は何處なんだ。息子、私は歸つて來たよ。」

仲々、うまく云ふぢやありませんか？　で、彼れは青い暖簾がかゝつた水菓子屋の店頭へ出掛けて云つた。コロガキ、リンゴ、ザボン。結婚の申し込みでもする若者のやうに、彼れは何度も顏を赤くして、立ちどまつたり、行つたり來たりして、心を怖えさした。ミカン、ネーブルがある。見れば自分が昔殘して行つた、その息子がもう一人前の若者になつて、萬年筆を耳の間へ挾むだりなんかしてゐる。耳の形！　不思議だ。人間と云ふものは何う云ふ風にして育つんだらう？　赤ん坊の體には、もう初めから、未來に出來る大きな形が、縮めて仕込んでゞもあるのかしら？　あれ？　あのこせ〳〵と屈む所が妻の若かつた頃の姿にそつくりだ。何か腹を立つてゐるのかしらな？　汚い爺いが店を覗くので、それを厭に思つてるのかしらな？　うん、私の事をちつとも氣附かないのだ。赤の他人の又他人だと、斯う上つらに思ひ取つてるんだ。だから、厭らしく感じるのは當然すぎる。私が一言、唯だ一言、「これ、息子よ、お前の父は私だよ、長い間會はずにゐたな。その私なんだよ、好し、好し、さぞお前は私にあひたくて、毎日あくがれてゐたらうね？」とでも云つてやつたら何うだらう？　さあ、急に狀態は嚴肅になる。霜の朝のやうになる。息子の疑ひの目がしばらく眩しさうに輝く、それから？　それからが重要なのだ。彼れはわつと泣きついて來る。いや、よし、よし、私には皆分つてゐる。會つてやるぞ、會つてやるぞ、許してやるぞ。許してやるぞ。

斯んな風に淺田は獨りで錯倒的に考へた。で、彼れは到頭、息子に切り出したんですよ。夢中になつて、然も内氣に、耻かしさうに、そして、幾らか親らしく見せないといけないと思つて、一種の威嚴なんかも附け加へたらしい。

すると、息子はすつかり不快な顔をして。

「私の父はもう死んで此の世には居りませんよ。何を間違へてるんだ！」と叫び出した。然も息子は涙ぐむでゐる。間違ひ所ではない。すつかり眞實の所を承知して、もう胸がつまつてゐるのだ。

「え？」と、淺田は盲犬のやうによろけて了つた。「お前は、この哀れな、もう直き死んで行く父を、喜んで迎へて與れるんだね？　さうだらうとも……」

「子供を捨てる親には用なんか無いんだ。さうだとも……」

で淺田は首が縮むで堅くなつて了つた。之は又、何と云ふ刎ねられ方だ！　さあ、行くには行かれず、歸るには歸られない。身動きも出來やしない。一體、この原因は何だつたのだらう？　それさへ、淺田老人には分らないんだ。

　この事件の解決のためには、結局、この私自身が出掛けて行きました。そして息子をいくら柔しく說きつけて見ても、彼れはグヅねた驢馬のやうに一層頑固になつて、

「母親なら引き取るが……」と答へる丈なんです。淺田もつくぐ〵諦めて、もう、初めの勇氣はすつかりなくなつて了つた。唯だアウアウと云ひながら、ソツ齒で冬の風を嚙むでゐた。

　この時、急に店の電燈がついた。リンゴやネーブルは湯から上つたやうに快活に輝き渡つた。昔はマンコウと呼ぶ、黒アバタのあるリンゴが流行したが、今はさつぱりそれが見えない、それに、此の息子は仲々のシマリ屋と見えて、果實の籠へ紙を貼つて炭取りにしてゐる。それは好いとして、私は考へた末に斯う云つた——

「では、このお父さんをお母さんだと思つてさ、さう云ふ心持ちになつて、引き取つて下さいな。」

「心持ち？　こんな重大な事に心持ちなんかを混ぜて何うするんです？　心持ち、心持ち、それが一生重荷になつて、私に附いて廻るぢやあないか？」

　不孝な云ひ分けだ。淺田老人は傍らから私の袖を引いた。彼れの眼は眼ヤニだらけになつてゐた。私も途方に暮れて、カラ風の中に立ちよどむでしまつた。

「昔。我が子を捨てゝ家出した私が今さら面倒を見て與れなぞと云ひ出したのが誤りの元なんだ。斯んなに年をとつて淋しい思ひをするのも、元は皆自分から出た事なんだ。」

　如何にも平凡な結論です。然し、平凡だと云つて何うして、之が捨てゝ置けませう。彼れもその息子も私も三人とも涙で一杯になつて了つてゐるのに、然も周りの空氣が氷のやうにぎごちなくなつてゐる。

　其處です。私はどうしてもハッキリ云はねばならぬ。この面白くもない場面は一體誰れが描いて見せてゐるのだ？　淺田老人の運命が私の運命と少しも似てゐない理由が何處にあらう。

　私はもう腹が立つて了つた。運命の神が鋏をもつてゐるなら、何故私と他とをつなぐ紐を切つて與

れないのだ。この紐！　尻尾のやうなものは一體何だ？　と斯う私は叫むで苦しがりました。えい、自分で自分の面の皮をむいて、椅子へでも張りたい位ぢやないか！

私の精神は分裂し初めた。蜘蛛の巣のやうに、系統を保つてゐた構成が、風で吹き破られた。もう、恐ろしい破壞に近づいてゐる。それが私に實感された――人々は熱い湯を飲むと、胃の中が重く温かくなるのを知覺するでせう――丁度そのやうに、私は私の胸の中に何だか惡いものを温かく、又、冷たく實感したやうなのでした。

惡心の前置きと云ふものがある。それは夢や、空想の形でもつて、先づ現れて來る。私は一體何んな夢を見たと思ひます。あゝ、私はもう斯んな風だ、駄目だ。こんな夢を見た上句はきつと現實界の中にも墮落が起つて來るのだ。夢は私に取つて適確な豫言のやうに見える。もうこの豫言は消す事が出來ない。夢！　そんな雲のやうなものが、私の運命を鐵のやうに固い軌道で規定するのか？　私が何んな夢と空想との中に私自身の肉を燒きつけてゐるか？　私は僞らずに皆云つてしまはう。

×　×　×

私の心は依然として正二にこだはつてゐたらしい。何うして、斯う執念深いのか？　やはり、あの惡い女、春子が影にゐて、色々と操りをしてゐるからだ。

私の夢の中へ正二は急に表れた。彼れは口の中へ小さい笛を仕込むでゐると見え、笑ふたびに、高い音を立てた。私は直ぐ彼れへ向つて斯う話しかけた。

「あゝデュルケム。英國では益々犯罪者の數が減つて行くが、その一方、發明家や天才の數も減つて行く。米國では益々犯罪者の數が殖えて行くが、同時に、發明家が續出して、世界一の新しい價値を築き上げてゐる。犯罪は社會の變轉を準備するものだ。社會進化のためには化石のやうな古い道德意識が重くはびこつてゐてはならぬ。新しい眞理は初め罪惡の形ちで現れる。此の深遠な法則！　この世に犯罪があると云ふ事は、他方に於いて、價値ある獨創性の爲めに進路が開かれてゐる事を示すのだ。二者の關聯は必至的のもの、自然的なものだのに、一方は罰され、他方は讃められるのだ。分らぬ事ではないか。」然し正二は元より私の言葉に耳を貸しはしなかつた。

「貴方は『蜜の女』を知つてますか？」と正二が尋ねた。

「それは日本の話し？　お前は春子の事を云つてるのだな。」

「えゝ、直ぐその樹の茂みの裏に、一軒の家があつて、蜜の女は其處に淋しく住むで居りますよ。」

「何う云ふ女？」

「體から甘い蜜が出るので、それを人々に嘗めさせて、お金を儲けてるんです。」

「嘘！」

「本統！　私もさつきなめて來ました。片腕が二十五錢です。」

「お前は性的の事を云つてるんだね？」

「いえ、唯、甘い丈の事です。食慾の他には何も考へる暇はないんです。」

「何かしら暗い影がある。」

「兩腕ならば四十五錢に割引です。」

「私を此の惡い境地から救つて下さい。」と私は叫むだ。

「私もすつかり胃を惡くして了つたんです。蜜ですからね。然し、又治つたら、出掛けて行くつもりです。蜜の女が貴方にもよろしくと云ひましたよ。」

「嘘！」

劍が飛むだ。白い石に突きさゝり、そこに文字が表れた。「奥義」と、それは讀まれた、

× × ×

だが以上の事件は皆夢に過ぎない。では、現實の方は一體何んな變化を初めてゐたか？

私はさつき、何だか私の泥のやうな心が惡い事を犯しさうだと云つたやうでしたね。けれど、もつと直接に告白するなら、私はもうその惡い事をし初めた。

もつとも大して惡い事ではない。だが多少とも罪でないとは云へない。又、この罪に引きずられて、他のもつと大きい恐ろしいものが表はれて來るかも知れない。

私は皆さんにもう何も云はない——その私が犯した新らしい罪については……。

私は犯して了つた。犯して了つた。もう、何も言へない。それ丈だ。然しこの祕密は何れ皆さんに見破られるにきまつてゐる。

向上會は何だか見すぼらしくなつて了つた。それに、夕べの大雨が洩り込むで、板の間は流れのやうだし、煙草の吸ひがらが、濡れて其處へ投げ出されてゐると云ふ始末だつた。人は一人も居やしない。丁度手すきになつてゐて、番人の松岡迄が外へ仕事に出てゐた。郵便屋が何だか帶封した郵便物を持つて來たが、こんな家の樣子を見ると、その儘、何も置かないで、急いで立ち去つて行つたやうだつた。私はそれを一町も離れた所から、ぢつと眺めてゐた。雨の中で、傘をさしながら。あゝ風が行つたり來たりする。灯火が向ふの方へついたりしてゐる。

何が私の斯んな失墜の原因であつたかを確かには斷言出來る譯がない——思ひもよらぬ事だ——。何んな些末の事にも、七つ八つの重要な原因の祕むでゐるのが普通なのだから……。けれども、私自身、私の心の中を見詰めるのに、何うも、一ついけない事がある。

「自分は駄目だ。いくら精進しても、血それ自身からして汚れてゐるのだから。見よ、私が斯んなに大人しくしてゐるのに、私の息子が、丁度私の若い時代に私がした通りの惡い事をやつて見せてゐる。彼れ等は私の影、私の靈の斷片なのだもの。」

之が大變悪い諦めとなつたのを、皆さんは直ぐ氣づくでせう。

「何うせもう仕様がない。成れ、成れ、成るやうになれ。私が善くしてゐても、彼れ等があんな風な事をしてゐる。そんなら私も同じやうにやらうではないか？」何と云ふ淺間しい獨言でせう。之は人事でない。皆私の事なんぢやないか！

私は口惜しがつた。狼のやうに吼えた。胸の中に錐と錐のもみ合ひを感じた。

斯んな歌を皆さん御存知ですか？

　歌ひ足りずば、けなされる
　歌ひ過ぎても、きらはれる
　丁度よく歌つても、讃められぬ。

それで私は、あんな悪い思ひを起し初めて了つたらしいのでした。

時が經つた今、考へ直すと悲しくも殘念でならない。一寸した心のゆるみが、理由もないやうな口實を造り出して、自分を辯解して、悪事を助長するのだ。

　私は再び明らかに後悔してゐます。何うかもう一度眞面目に自分を見直したいと思ひます。然し、今お話した所は、私の心の向上的努力のみではない——實は、つまらぬ口實でもつて、たやすく悪に染み込む、この情ない心のことなんでした。ハイドが居ない時ジーキルがゐる。ハイドが出て來ると、ジーキルが消えて了ふ此の仕方のない心を私は何うしませう。

　私は皆さんに聞きたい。何か好い方法で私の心へ一つの利き目のある足枷を與へる事は出來ないのでせうか？　足枷？　さうではない。もつと自由なくつろぎを持つた救ひが此の心の上に降つて來ないでせうか？

　恐らく、私の斯んな懺悔の一部分の又一部分を聽いた丈でも、皆様のうちの最も親切な人は悲しみ、驚き、次のやうに嘆いて下さるに相違ない——

「水で手が洗へる時に、何者によつても、心が洗へないと云ふ事があるのだらうか？」

　私等が一番先に考へねばならぬのは、この品座のやうな人の——善い方へ努力してゐながら、時々、極く不確かな理由から、たやすく墮落するやうなゆるみを持つてゐる靈には、大層重い悪癖が、錘のやうに掛つてゐると云ふ點である。

　その苦しみを少しでも輕くしてやるやうな手段が我れ我れには何うしても出來ないものだらうか？

　又若し、彼の心が永久に善い方へと轉化し得ぬとしたら、せめて彼れの息子——若い内は心も柔かく、何方へでも變化させる可能性があるから——丈でも、少しづつ仕合せな境地へ連れて行つてやられないかしら？

又假りに、彼れ等迄が、惡い環境の中で思はしくない生育をしたゝめ、何うしようもなく心がねぢけて了つてゐるのであつたら、せめて、之から、彼れ等が生む所の、彼れ等の幼い子孫を丈でも、喜ばしい心持ちに仕立てゝやることは出來ぬのかしら？

そんな思ひにかられ、私等は今後品座の息子等に、絶ゑざる注意を向け、彼れ等の心の動き方などを成る可く如實に見て行きたい。

親しみが增すと、彼れ等は色々の內輪話しを私等に聞かせるだらう。それによつて彼等の心の持ち方を推しはかり、何とか善い方へ向つての靜かな、向上的な歩みを續けさせてやりたいものだ。」とね。

お願ひです。何うか、哀れな彼れ等に關與してやつて下さい。それにしても、私の子供等は一體何處をさまようて、この夜更を過してゐるのでせうか？　私は不意に彼れ等を心配する。いや、心配なのは彼等の身の上ばかりではない。この私を自分で見よ、此處に焦慮せねばならぬ大きな難關が橫はる。

子供を引き上げてやらうとして、自分が引き下げられた靈。自身に一定の深い根柢が缺けてゐるため、他への親切な關與も却つて身の仇となるやうな此の性格。おゝ、關心よりも先に自省が何んなに必要だかと云ふ點を忘却してゐるこの心。愚かな者よ。うなだれた首を、もう一度高く保て。小さい蟲。コホロギさへ、その長いヒゲの一本を體の後方に廻し、他の一本を前方に伸ばして、過去の經驗と未來の暗示をば、自己の現在に參照し、暗闇の奥に、尙ほ善き生存を全うするではないか？　行く先を見詰めよ、過ぎ去つた道を顧みよ。刹那の喜怒哀樂に盲ひ勝ちな自分のやうなものに取つては、眞にこの注意が重要なのだつた。

向上會も、繼續し通さねばいけない。旣に敎誨師さんは旅から歸つて來てゐる。新しい免囚を三人丈世話に預りたいと云ふ話しを看守さんが持ち込むで來てゐる。以前保護してやつた松岡やエスキモーのやうな大河原が又歸つて來て、自分で火を熾したり、飯を炊いたりしてゐる。さうだ。フレームを大きくこしらへて、色々な花たちにも温い蔽ひをしてやらねばならない。爲す可き事が非常に多いのを私は思ひ出す。

室內の掲示板へは敎誨師の手で新しい文字が書き記された――

計算にうとい性質を改めなさい。

無秩序を恐れる事。

なまけを去る事。

無分別に泣いたり笑つたりせぬ事。

皆、之等の卑近な事項は彼れ等免囚ばかりにではなく、當の私にも必要なものだつたのを深く知ら

ねばいけない。

一匹の蚊の足を指先で捕へる。蚊は苦しむで悶える。然し、一つの諦めが附くと、いきなり身體を強く振り動かし、指に挾まれた一本の足を犠牲として後に殘して迄も、その身體丈を足から切りはなして、輕く、より善き方へと舞ひ上つて行く。私はそれを知つてゐる。

許して下さい、この私を……私は再び決心しました。今度こそ、自分で自分を完全に處理し、自分の惡い足を切り捨てゝも、遠い彼方へのあくがれを保ち通さう。私には今こそそれが分る。さあ、之で凡て起つた事は語られました。私は私の告白を閉づるに當つて、私の取り得もない靈の上にさへ、高きものゝ手が關與してゐる事を、強く明らかに感ずるので、尙ほ更ら、新らしい悔いに身を燒かるるので御座います。

幼年と老年

その一　印刷教習所

A街とE街の境目に横たはる露路を奥深く這入つて行くと、その突き當りに、人々は一戸の貧寒たる印刷工場を見出すだらう。その家の扉は白ペンキで塗られてゐるとは云へ、長い年月に亙る雨や風のために、ペンキの光澤は全部奪ひ去られて、たゞ石灰でも見るやうな荒いキメ丈を其處に止めてゐる。更に注意して見ると、その荒いキメの上へ、釘で引き搔いた痕が、辛うじて讀める程度の粗雜さで『〇〇兒童園』と云ふ文字の形をなしてゐる。然もその文字の凹みに丈、泥が喰ひ入つて、一層寂れた趣を添へてゐるのも奇妙である。

　家の內部は極めて狹い。それにも拘らず天井の採光窓は室全體に光りを供給する事が出來ないので小柄な印刷臺が造る深い物影は既に夜のやうな黑さを宿してゐる。

　此の印刷教習所は初めB君の單獨經營で成り立つて居たのであるが、軈て經濟上の壓迫を受けるやうになつて、町會のS氏F氏K氏等の援助を仰ぐに至つたものである。云ふ迄もなく此處で働く職工見習ひと云ふのは全部×町邊の細民兒童で、現に私が訪問した日にも彼等の三四人が絣や縞の木綿服の上へ、ゴムの大きい前垂れを掛け、手の先を黑く光らせながら、機械の操作や、植字の練習を行つてゐた。丁度その時、非常に光澤のある髮の毛――もう二月位刈らない――を持つた男の子は切つ立つた植字臺の前に立ちすくむで何か考へ事をしてゐたが、その片手を芝居の女なぞがするやうに、そつと帶の間へさし込むで、首をかたむけた樣子が如何にも可憐なので、不圖私の深い注意を引いた、彼は空腹を覺えたらしく、監督の方へ步み寄ると、恥かし相に今日の勞銀を要求した。監督は笑ひながら、この子供をからかつたが、それでも直に三錢程を子供の小さい手へ握らせてやつた。

「賃銀は何んな規定になつてゐるのですか？」私は子供が其處を去つた後に、さう監督へ尋ねて見た。

「一時間二錢から五錢迄です。そして三時間以上は働かせません。」

「その時間內でならば子供等は任意に仕事場へ這入つて來、任意に出て行つても好いのですか？」

「さうです。子供は時とすると非常に疲れ易いものですから。」

「修業年限は？」

「子供の賢愚に依つて、一定しません。然し一年か二年も練習すれば、本統の印刷會社へ行つて働けるやうになります。」

「その曉には、彼等の得る賃銀が大部大きくなるでせう？」

「勿論一圓から一圓六七十錢位迄稼ける筈です。」

「今子供たちが印刷してゐるのは何ですか？」

「H履物店のビラで、赤色と黑色の刷り分けです。行つて、實際を御覽なさい。」小指の爪丈を昔風に長く伸ばした監督は、その爪の先で、子供の方を指さした。

然し、私が印刷臺の方へ足を運ぶよりも前に、突然、一つの新しい情景が私の眼を誘惑した。他でもない。白ペンキ塗りの扉が此の時、靜かに開かれて、其處から明るい光線と一緒に、室內へ這入つて來たのは、未だ十一二歲位の黃色い顏をした少年であつた。全くその顏の黃色さは「十二指腸蟲が寄生してゐるのではないか」と私を危ませた程、病的に見えた。彼れは右の手首を臺灣綿で堅く結むでゐたが、それは恐らく健康を保つ爲のまじなひであつたらしい。

彼は怖ぢけた樣子で、監督へ向つて、仕事を習はせて吳れと乞うたが、氣の毒にも、直ぐ簡單な拒絕の言葉だけを耳にせねばならなかつた。監督は少年の住息する町がこの敎習所の繩張り以外に屬するものである事と、少年自身の素行や經歷が分明しない事とを楯に取つたのである。少年はたじろいだ。ほんの瞬間、その顏面には苦痛と悲哀の情が現れたけれど、それは直ぐ一層不可解な暗い微笑の下に消え去つて了つた。

既に滿ち足りて、勝利の寂しさを痛感する迄になつた人と、自分の企畫が一つとして成らず常に失意の日を送る人と丈が、少年のこの樣な表情に強い同感を味はふ事が出來るのではあるまいか。そしてこの場合、私自身が後者に屬してゐたのは疑ふまでもない事だつた。當時の私は三つ程のそれ〳〵異つた計畫を所謂「見えざる敵」の爲めに打ち碎かれ、今後、何に取りすがつて、自分の身を保つたら好いかも知らずにゐたのである。

私は改めて少年の姿を眺めた。そして獨りで斯う考へ續けた——「この子は彼の住家がT町だと打明けたが、大體、彼處には貧者の長屋なぞ一つもない筈である。然し、あの大きな荷揚げ場には規正しい間隔を置いて、煉瓦が積み上げてある。その間へ筵を敷き、高い煉瓦の積み重ねへと何か屋根になる板を渡せば、其處で生活する事が出來るだらう。そればかりではない。煉瓦のほとりには住み心地の好い毀れたトロッコがある。又下水用の大土管の兩端へアンペラを掛け、中で蚊遣火を焚く陽氣な人々が其處にゐる。若し一人の子供が食品市場の掃寄せ場から拾ひ上げた瓜や茄子を進物にして、その大土管を訪ねて行けば、陽氣な人々は喜んで此の子供にも寢場所を與へて吳れるだらう。」

私がさう考へて居る內に、少年は輕く頭を下げ、脛を風に打たせて、外へと步み去つた。軈て、終業時間が來たと見え、今迄頭をかゞめて働いてゐた少年職工たちは一齊に背を伸ばして、敎習所の唱歌を合唱し初めた。その聲は低い天井に反響して、更に新しく私の心を痛ませた。私は態と少年たちから眼を離して、窓の外に立つて居る葉鷄頭の物古りた紅い色を眺めた。秋の風は既にこの植物を餘りに丈高く伸ばし過ぎて了つてゐた。

監督に別れを告げて、外へ出た私は、最前拒絕された哀れな少年の事を再び思つた。そして、未だ

この近所に彼がさまよつてゐる事を確信したので、急ぎ足に、通りの方へ廻つて行つて見た。O河岸迄來ると、案の如く、私は或る小鳥屋の前に、例の少年を見出した。幾らか怖えながら、私が彼に物を問うた時、彼は却つて氣輕く私に答へて吳れた。

「教習所で斷られて、困つてゐるのかね？」

「困りもしない。鳥を見て居たの。」

インコは美しい頰をしてゐるし、九官鳥は男が妻を呼ぶ聲音を眞似てゐる。然しそれ等は何物でもない。私の考へに依ると、子供に必要な一つの物は幾らかの金錢であつた筈だらう。少年は川がまだ引潮だからヨナゲをするのだと私に告げると、もう私のそばから離れて石垣の方へと駈け初めた。私は自分の用事を捨て、彼の後に從つた。そして船蟲を追ひやりながら少年と一緒に、沼地へ降り立つた。彼は振り返つて、少しばかり迷惑相な顏付きをした。で私は何か言葉を掛ける方が好いと思つて、斯う云つて見た。

「この仕事はつらくはないかね？」

「私の友達は居眠りをして石垣から沼へ落ちたよ。」と、少年は私の問ひとは何の聯絡もない事を語り出した――「石垣へ腰掛けて、頭を動かしてゐたのだが……」

「で、怪我でもしたのかね。きつと、前の晩、眠らずに步き廻つたのだらう。」

「もう死んで了つたさ。」少年は如何にも子供らしい氣輕さで答へた。然しその聲は私の耳へ重々しく響かずには居なかつた。

子供が何處からか錆だらけなブリキ罐を探し出して來て、その中へ木炭の破片や、木屑を拾ひ集めてゐる間に、私は最前彼が教習所で監督に示したあの悲しげな表情を思ひ出してゐた。そして、心ある人々が何んなに好もしい施設をなし、貧しい人々に幸ひを與へようと努力しても、尙ほ多くの貧者は依然として不幸の儘に取り殘されるのだ。」と云ふ言葉が決して僞りでない事を豫見出來さうにさへ感じられた。

一般の人々は不幸な人々に對して、絕對的な關心を傾けるものではない。否、時には不幸な人々を元來、「生れて來る筈でなかつた者」として、嫌忌し、嫌忌しない迄も、蔑視する事が多いのである。何故我等にはそのやうな本能が自然と具はつてゐるのであらう。然も亦、何故此の本能だけに滿足せず、もう一つ別の本能、即ち不幸な人々への憐愍と贔屓とを捨て得ないのであらう。

若し日本人の心性を個々に査定出來るものと假定すれば、一體彼等の內の何割が貧者へ向つて愛好の情を示し、他の何割が唯貴人へ向つてのみ憧憬の情を示すだらうか。この事が判明した時、それは我等を喜ばしめるであらうか、悲しましめるであらうか。

然しそんな淋しい空想は別として、次の時代を形ち造るための少年達の內に、大層不幸な者が多

く、彼等は天然に依つてゞなく、寧ろ人爲のために、幸福な群への仲間入りが出來ず、大切な修業の時間を、無價値な勞苦に奪はれて了ふ幾多の實例を我等は見ねばならぬ。この一事は多くの成人が生活苦に惱むでゐると云ふ事より一層恐怖に價する。云ふ迄もないが成人は枯れるのを待つ身であるのに、少年は之から伸び進歩せむとするものだからである。

その二　路傍に於ける死

1

時は晩秋の曇り日、場所はN町老人保護所の庭内である。朽ちた切株に身を寄せながら、私は傍らの事務員S氏を見あげて——現在幾人の老者がこゝに收容されてゐるかを尋ねた。S氏は蜜蜂の小柄な家（それも蜂が住むでゐない）のひさしを水牛の薄荷パイプで輕くたゝきながら勘定をし、それからかう答へた——

「左樣、市費の窮民が二十人位、國費のが三人ばかり、浴風會から委託されたのが十二三人……」

丁度この時、庭に向つた母屋の戸が開かれて、五六人の老い果てた男女が、木製の段を踏下る足つきも危く、よろめきながら外へと出て來た。彼等は枯草の間に坐つたり、塀へ取りつけた緣臺風の板に腰かけたりして、まぶたの垂れ下つた顏や口のうまくふさがらぬ顏を、吹く風にさらしながら、ものう氣に天の方を見あげた。

中でも私の心を痛くひいたのは頭を丸く綺麗にそつた、年格好も分らぬ老婆——老婆といふよりは老婆でさへもない一種の存在物であつた。彼の女は他の老者の沈欝な有樣をあざける如く絕えず大きな口を開いて陽氣に笑つた。その口は獨立した生物の如く好く動いたが、齒が一本もないために、恐ろしく無氣味な印象を私に與へずには置かなかつた。S氏は私の驚きを横合から觀察しながら、苦笑の内にかういつた——

「あれは昔、可成り有名だつた遊女で、隨分男を泣かしたさうですが、現在のあの姿を御覽なさい、だれだつて無常の感を起さぬ者はないでせう。」尙S氏は語を繼いで、この坊主の老婆が背中に美しい刺靑をしてゐる事を告げ、それを見せてもらふため私を促して、彼の女の傍らへ近寄らせた。老婆は快く片肌をぬいで、その醜くもしわばんだ背中を私達の前にさらして見せた。その刺靑は西洋人を樂しませる目的と見え、百合花と紅バラを交叉した圖であつた。

「私に欺された毛唐が」と、老婆は泡のたまつた舌でいつた——「何人あつたとお思ひですい？」これは確にゲーテやシェークスピヤが想像でもつて作つた魔女よりも適確な實在性を持つてゐた。鼠のやうな口鬚、南京豆の表皮のやうな背中の肌、この老婆は其れ等の魔女風な資格を悉く具へてゐた。

次に私の眼をひいたのは、恐ろしくまぶたの垂れ下つた老人であつた。彼は何かを見ようとする時

必ず指先でまぶたを上方へつまみあげ、そして漸く安心したやうに微笑むのであつた。見ると、彼の衣服の後側は一尺四方程もぬれてゐたが、哀れな事に、それは疑ひもなく尿であつた。

更に、私を不審がらせた、もう一人のやせ衰へた老人――彼の右足は棒のやうに堅く突張つてゐるに拘らず、左足の膝はゆるんだ鎖のやうに崩折れ易くなつてゐた。彼は心中に何かしら穏かでないものを持つてゐるらしく、他の人々から遠く離れ、一人さびしく塀に向き會つて立つてゐた。

「塀の木目が面白い譯もない。あの痣のある老人は何を怒つてゐるのでせう？」と私は傍らのS氏に聽いて見た。

「こゝには、もう怒るといふ事はないのです。」と平氣で答へたのはS氏であつた。

彼等は既に世をあきらめ去つたものである。そしてあきらめるといふ事さへ遠く忘れ去つた者である。食ふ事以外のあらゆる慾望は彼等に取つて餘分な虚榮と見られてしまふ。そして食ふといふ慾さへも、しば／＼經驗した強い飢ゑのために、ひどく緩和されてゐるのであらう。彼等は最早不平を訴へる力さへなく、面白くはないけれど、捨て去る事も出來ぬ生活を續けてゐるのである。然し彼等の内、尚少しでも手先の動く者へはそれ相應の日課が授けられる。一寸した紙細工、竹細工、雜役等は彼等に僅かな報酬を持つてくる。その金で、彼等が買ふものは、主に燒芋やにがい駄菓子、――老いた口も尚多少の糖分を要求するのである。

2

さて、それから一月半ばかり後の事であつた。私はH町の停留場でS氏があわてふためきながら、G町行の電車に飛び乘り、又、どう氣がついてか、急いで飛び降りたのを横合から見かけた。私は驅けて彼に近づき、丁度小雨が降つてゐたので、彼の身體を私の傘の中へと誘ひ込んで、かう尋ねた――

「用事はどういふ事なのですか？」

彼の眼鏡は顏の活氣で曇つてゐたが、それでも直ちに私を見究めて氣ぜはしく答へるのだつた――

「塀を見詰めてゐたあの老人が逃亡した。……今電話で通知があつたから迎へに行くところです。」

次の電車で私はS氏と共に、K停車場までゆき、その近所にある某理髪店へと急いで入り込むだ。

その店の内部に横たはつてゐたのは例の疲れ切つた老人Jさんで、その顏面にある痣は前よりも一層濃く見えた。彼の息はいまだ通つてゐたが、最早強く悶える力もないらしく、彼の灰ばむだ眼は唯天井の隅の物影を見つめるのみだつた。S氏は熱心に老人の名を呼むだ、と瀕死の意識は不意に覺醒して、怒りの相貌の下に最後の力で働きだした。彼はS氏に何かしら恨みの言葉を答へると、再び偏屈相に堅く口を結むでしまつたが、それからはもう何を問うても答へようとはしなかつた。そばに來合せてゐた巡査や青年會の人を押しのけて、老人の耳元へ坐つた私は、ある辯解の方法（今は述べる暇がない）でもつて、彼の善良な心を呼びさまし、眞實な答へを促した。すると老人は死に際の息もか

すかに、次のやうな意味の事を、人々に語つて聞かせた。

――私は親戚も知己も持たぬ孤獨な弱者であり、その上病人である。この頃では病氣も一層重り、半身がしびれて、立ち居にも事缺く程である。けれど私の心だけは強く生きてゐて、どう忍耐しても保護所の殘酷な仕打に甘んずる事が出來なかつた。私は明日死ぬのが分れば分る程、どうかして一度丈、自分の心をうつとりさせるやうな平安と自由を味はひたく思つた。ところが昨日、私の妻から不意に手紙が來た、その文面によると、彼女はI縣T郡のY炭坑で氣樂に暮し、風習として飯は茶碗からでなく、どんぶりから食ひ、髮は結はぬが稼ぎが多いので、湯へは毎日浴する由であつた。彼の女は頻りと私を招くので、私は昨日の深夜祕かに保護所を拔けだした。

《戸の錠前を破壞した事はどうぞ許してもらひたい。》かうして私は杖にすがつて、よろめきながら炭坑の穴へと急いでゐる。だのに足がすくみ、眼は暗くなつた。私が倒れてゐるのは何故で、この布團はだれの所有であらうか？　私は一度氣が遠くなつて、再び眼覺めたが、然も一切の事がよく分らないのである――。

3

私はS氏を顧みて、老人の妻から昨日手紙が來たかを尋ねた。S氏はそれを否定し、四日程前に來たのはクリスマスを祝ふ慰問の繪葉書で、それはある未亡人から收容者全體に配布されたのだと答へた。全くJ老人は自らいつた通り親戚も朋輩も持たぬ孤獨の人だつた。けれど、I縣T郡Y炭坑は事實において存在する有名な場所であるゆゑ、老人の言葉は却つて私達を不審がらせた。

やがて老人の手足の上へ、この世でする最後の苦惱が現れた。彼の乾いた舌は震へ、彼のしわばんだ喉は波打つた。そして次の瞬間汚い衣服をつけた老人の死體は冷くそこに橫たはつたが、彼の魂は貧者といふ名から切り離されて不定な方向へと飛び去つた。

4

その後、私はJ老人が死の直前に經驗した稀有な錯覺の事をある年若い心理學者の許へ書き送つてやつた。彼はある感動を持つてそれを讀んだ旨を述べ、更に次の如き感想を書き加へて、私の元へ寄越したのである。

――昔の人は時とすると、その死に際に、極樂を見んとする單純な慾望を持つて、息を引き取る事が出來た。J老人もまた恐らくその種類の人であつたらう。けれども時代は彼を不思議な渦中へ卷込んだ。現代とは何であらう。今日の世界において病氣より老衰より、時に死より恐るべきものは飢ゑである。あの人は病氣だといつても人々は最早驚かぬ、然しあの人は職がなく、飢ゑてゐるといへば人々は戰慄する。このやうな時代においては、極樂の幻想が後退して、就職と滿腹との希望にとけいる事は極めて容易である。この老人は事實においてそれをなした、といつても過言ではないであら

う。悲しい事に、今や人々は死に關聯する宗教をさへ持ち得ぬ程、生につながる諸種の焦躁で身をつからせてゐるのである。〔それは旣に宗教の無効と不用性を暗示してゐる。〕

この事を痛まずして、何を先に痛むべきであらう。現代においてわれ等が見る一切はたゞ生命の無意義なる消耗、過度な疲勞、そして多くの靈が群團しつゝ、尙孤獨の意識に惱むでゐるといふ事だけである。

過日貴下から私に與へられた手紙は、印刷敎習所を追はれた哀れな幼年の事に就いて語つたが、今日は又この不思議な老人の事を私に知らしめた。全く私の心は二重の苦患を經驗してゐる。

此處に一つの劍が現れて、人の眼をゑぐり或ひは耳をそいだら、我等は當然その劍を憎惡するだらう。現代の社會機構は其れ自身一個の巨大な劍であり、然も直接には姿を現さぬ奸惡な刄である。それ故、我等がこの劍を鍛へ直して、一層有益無害な他の形態を創り出さうと焦躁するのは、魚が水に走らむとすると同じく、至當の事ではないか。——

ミレー

一

その頃、バルビゾン派の巨匠ジヤン、フランソア、ミレーは、彼れの夫人が毛糸の類で編むで呉れた褐色の厚いチヨツキを着、その短いチヨツキの下から、洗ひざらして地の薄くなつた白いシヤツをのぞかせてゐた。

彼れが胴にしめてゐる巾廣いなめし皮の皮帶は老いた馬の蹄のやうにしび割れてゐたが、それについてゐる眞鍮の金具丈は何時も明るく光つて、黒い毛のヅボンを固く上からおさへつけてゐた。そのヅボンのポケツトには煉瓦色の鉛筆と黒色の短いチヨークが横つてゐた。そしてヅボンの盡きた所には百姓が穿く大きな胃袋形の木靴が見出された。

彼れは頬と顎と口の上に黒い髭を貯へてゐたが、時とすると口髭丈を剃り落す事があつた。さうすると、彼れの顔は一層農夫らしくなつて、子供たちを痛く喜ばすのだつた。彼れの眼は大層好く感情を表し得る特殊な光りを持つてゐた。しかしこの光りは喜びよりも悲しみと結びつく事の方が多かつた。又それは朝の間柔和に輝いてゐても、夕暮れには暗く沈み勝ちとなつた。もつとも此の徴候は午後になると出て來る輕い病熱のためだつたかも知れない。彼れはよく自分の手の平へ白い朱子のやうな光澤のある甲蟲類を乘せて見た。そして若し甲蟲が急いで逃げれば手の熱が高いのだと空想した。

ゆつくり逃げれば、それは極く自然の狀態なので、彼れを充分滿足させる事が出來た。

彼れが時々せく咳はこの頃大變おだやかにはなつたけれど、却つてその深さを增したやうに見えた。事實、極端な過勞は彼れの病ひを一層重くさせ、彼れの精神から多くの希望をうばひ去つて行つた。

惡意に滿ちた多くの批評家は彼れについて斯う噂した。

「ワツトーは地面を描いてさへ、珠玉の輝きを創り出した。然しミレーの描く泥は依然として泥だ。彼れの畫は上半分だけ繪の具で描いてあるかも知れぬが、下の方は泥で描いてある。」

又、ミレーの子供たちは子供たちで次のやうな事を云つては、貧困な彼れを悲しませた。

「お父さんの頭巾からも何か非常に好いものが出來はしないかな。」

この深い憧憬を持つた言葉は初めての耳に理解しにくい。然し、本統の意味は斯うなのである。以前、子供たちは母親の古シヨールから三ツの財布（と云つても美しい小石を入れるための）を造つて貰つて、一つづゝ自分のものにした事があつた。それで次には當然、父親の雨にさらされた古頭巾からも、財布か、それともせめて指無し手袋位なものを創り出せ相に思つたのである。

子供に每日食を與へるためには、時々親達が二日位づゝ斷食をする必要のある生活——それがもう長い間續いて來てゐた、そして最近、夫人が又姙娠した事と、夜ともす燈火の油さへない事とが、暗

黑な室の中央に立ちつくして、子供等のいびきを聽き入つてゐるミレーの心を慌しく叱責するのだつた。

二

時は旣に朝である。室の中央には繪の乘つてゐない畫架が空しく立てられ、その上方には紺碧の木綿や靑磁色の絹の襤褸を束ねたものが、丁度はたきの先のやうな形をして垂れ下つてゐた。是れはミレーが色の配合を硏究するために備へてある一種の道具なのであつた。

畫架にもたれて、獨り淋しく立つてゐるのはミレー夫人である。今、彼の女の眼から走り出した淚は、白くて短い生ぶ毛の輝いてゐる顎の先へと廻つて、早くもそこに美しい玉を造つた。彼女の赤い兩手はもう一度顫へて、その指先に挾まれた紙片を繰り廣げた。紙片の上に黑チョークで描かれた繪は疑ふ迄もなく、ミレーの手になつたもので、それは描き上らぬ内に、二本の太い線で斜めに消し去られてあつた。昔、レオナルド、ダ、ヴィンチは一人の僧侶が首を縊つて死んでゐる有樣を素畫にした。今、ミレーの作つた圖も瞬間の後に首を吊り下げようとする人の姿であつた。然もその姿は頭巾附きの僧服を着るかはりに短いチョッキをつけ、胃袋形の木靴をはいてゐた。吊り下げた繩の線は力強く何度もなぞつてあるために、紙へ溝を造つて凹むでゐた。

三

更に十分が過ぎ、十五分がたつて行つた。半ば自失したやうになつてゐるミレー夫人は、その時庭の方から起つて來る足音によつて、意識の曇りを破られた。その足音は一種特別な間隔を持つてゐるので、此の頃中風を病み初めた畫人テォドル、ルッソーのそれである事が分つた。軈て窓口へ表れたルッソーと室內のミレー夫人とは、丁度今外出してゐる主人について色々と噂し合つた。夫人は夫の何んな努力も金策を成就させ得まいと云ふ事、從つて夫は一つの笑顏も造らずに、いづれ我が家の門口へ歸つて來るだらうと云ふ事を豫見してゐた。そして彼女は最前室の隅から拾ひ上げたミレーの樂書をルッソーへ示さずに濟む丈の心の落ち着きが如何にしたら得られるかと思ひ煩つて、眼を穩かな靑空へ向けたり、左の手で乳房の少し上の邊りを押へたりして見た。

精神的には美しいものと考へられ易い貧困も、生理的には何れ程の害をなすかを、ルッソーは沈默の內に考へ續けた。然し何う云ふ思ひ附きをしたのか、不意に窓枠へつかまつて首を上げると「信心深い奧さん、怒らないで私の話をお聽きなさい。」と前置きしながら、次のやうに語り出した。

四

——あなたの夫のフランソアと云ふ名は、アシシの聖者を紀念するために與へられたもので、ミレーの守護者が聖フランシスである事も疑ふ要がありません。

或る時、そのフランシスが一軒の寺院を掃き淨めてゐると、其處へ一人の若い農夫ジョヴンニが表れて、弟子入りを乞ひました。聖者は元よりそれを承諾したのです。が、承知しないのはジョヴンニの父でした。この哀れな老人は叫びました。「息子が出家して了つたら、あとに殘る私と病ひの妻は何うして食をつないで行くのか？」

富裕な織物商人の息子であつたフランシスに取つては、家を捨てると云ふ事さへ、彼れの事蹟を飾る派手な祭りの一つに過ぎなかつた。然も、赤貧のジョヴンニに取つては、神に使へるための門出さへが、親の飢餓と云ふ事に依つてさまたげられねばなりません。

貧はつまづきの石と同じです。あらゆる好もしい發意も、善なる憧憬も、この石によつて挫折されねばならぬとは何事でせう。——

五

晝過ぎになつて、ミレーは漸く我が家へ戻つて來た。彼れは自分の親しむ可き室内にゐながら、尙ほ放浪者のやうな姿をしてゐた。彼れの心は雪の唯だ中で、閉ざされた戸を叩く者と同じやうであつ

た。

再び其處へ訪れて來たルッソーは何う云ふ方便からか、いきなり明るい聲で友を呼び、次に斯う云つた——「非常に好い都合だ。あなたの畫を買ひたがつてゐる人があるのだがね。それは隣り村の郵便局員なのさ。」

「不思議だ。」とミレーは振り返るなり、沈むだ聲で答へた。彼れの口調は下ノルマン人の通癖を持つてゐて、幾分速度が遲かつた。

ミレーは貧困な點では彼れと殆ど同じ樣なルッソーから、今迄何回となく、色々の形で、物質上の恩惠を受けてゐた。それで最早此の上何んな場合でもルッソーの心配は掛けまいと決心した事が度々であつた。然しミレーの斯んな心持ちは親切な友ルッソーに依つて、暗々裡に直覺されてゐた。「それ故にこそ、この親しむ可き友は架空的な郵便局員の名を借りて、實は彼自身の金を私に惠むのだらう。」とミレーには直ぐ推察されたのである。

「それなら」とミレーは改つた調子で再び口を切つた——「その局員君を此處へ連れて來て下さい。彼れ自身で私の畫を撰つた方が好からう」（之は皮肉でも自暴自棄の言葉でもなく、恐らくは貧苦のため過敏となつてゐながらも、尙自立を憧憬してやまぬ精神から奔り出たものに相違なかつた。ルッソーは灌木の茂つた道を歸つて行く間にも、郵便局員と云ふ名が彼れの空想から出たのでない事をせめ

てもの喜びとせずにはゐられなかつた。事實丁度今彼れの留守宅で、彼れの妻と話し合つてゐる實在的な人間――それは正しく隣り村の郵便局員でもあり、妻の遠い親戚でもあつた。唯だいけないのは此の局員がミレーの繪の買上げなぞと云ふ發意を夢にも知らず、今日もルツソーの小品畫を、親類のよしみから、無料で貰はうとして、はるばる來て居たと云ふ事であつた。

六

ルツソーは先づ一定の金を郵便局員に渡して、自分の下心を語つた。そして凡てを飲み込むだ局員と共に、再びミレーを訪れた。局員は非常に落ちついて、卓子の上へ貨幣を置いた。貨幣と貨幣とは打ち當つて、金屬性の堅い音を立てた。隣室からはミレー夫人の嬉し相なすゝり泣きの聲が幽かに洩れて來たが、それは唯だ默つて戶口に立ちふさがつてゐるミレーの物慣れた耳へ丈響いて、二人の客には氣附かれずに濟むだ。

事件は之で終つた筈である。然し一層不思議な場面が次の瞬間に表れて來たのを何う書き加へたら好いだらう。局員は多少愚かしい表情をして何か考へてゐたが、やがて鑑賞の力もないその眼を鞭打つやうにして、窓外に廣がる穩かな自然の風光と、目前に並べられたミレーの繪――樹木と地平線の圖、羊飼ひと流れの圖――との深い類似を比べて見た。

全く、自然が大きい池ならば、繪は掌にすくはれた池の水のやうなもので、兩者の本質は少しも變りがなかつた。

局員は其處で俄かに決心の深い吐息を洩らした。彼れは「もう一枚この小版のチョーク畫を頂きませう。」と云ふと一緒に、別のポケツトから自身の持ち金を引き出して、それを再び卓子の上へ置いた。ミレーは別段驚く必要がなかつたけれど、ルツソーは不意に心を打たれて、その足の位置を換へねばならぬ程だつた。

七

その夜、美しい朧月の光りを背にあびて我が家へ歸つたルツソーは、附け込むのを怠つてゐた日記帳を引き出して、今日の事件を細かく認めたあと、次のやうな考へを書き加へるのを忘れなかつた。

――

この一例は自然そのものが、又、自然の儘の人の心がどれ程眞實と好意に滿ちてゐるかを私に深く直觀せしめた。郭公の雛が鶯の雛をその巢から故意に蹴落し、或ひは毒蛇が鋭い牙で人の肌を刺さうとも、否、その他の百の否定的な實例が私をおびやかさうとも、私は決して絕望しまい。

百に對する一つの割合をもつて現れて來る所のものこそ、一つにして尙ほよく百の力を持つてゐる

がらである。

信頼と敬愛の心を以てする貧者たちの堅き結合こそ、今後益す増大す可き巨大な力の貯藏池である。其處に凝集した生命は炬火となつて燃え、鐘となつて鳴る。それは枯渇せる舊習を燒き、眠れる友を呼び醒まし、眞に自由なる領土、蜜と乳との流るゝ川を指し示すだらう。

ホテル女

——或る助手の思ひ出　その一——

何んな平俗と不遇の内に、顧みもされず、名も知られず、死んで行つた人間であつても、それ自身としては新らしい存在であり、この世界の恒久な運爲の中に、唯だ一回より出現しない、稀有なるものであらう。そして、この稀有こそ、〔或る考へ方よりすれば〕飽きる事のない尊敬を以て、見守らる可き、充分な資格を具ふるものに相違あるまい。

そんな『稀有』の一例に外ならぬ、あの柔和だつたホテル女の人となりを、物語らうとするに當つて、何よりも先に私の腦裡へ浮び上つて來るのは、次のやうな一つの畫面である。

時は烏賊の大漁が續いた大正X年の秋。場所はB全科病院内の事であつた。

副院長附きの助手として「多くの戸惑ひと少しばかりの働き」を日課に、面白からぬ朝夕を暮してゐた私は、丁度その一週間程前、一個の無頭兒を大きなガラス罎へ、アルコール漬にする事で、大分と骨を折つたのであるが、今日はまた、その罎の表面へ一寸した覺え書きの紙片を貼る必要にせまられて、糊のついた人さし指の先へ二枚の小さい西洋紙をかるく乘せ、さて、もう一方の手で、標本室の扉を勢ひよく押しあけたのである。

はねかへる水の樣に光り輝いた室内一面の强い光線はまともに私の眼をうつた。と同時にもう一つ別の何物かゞその光線をさへぎつて、私の網膜に鑄型の如く同じ形をした黑い殘像を幾つも浮動せしめた——その殘像の原因は何であつたか？ 他でもない。二ッ三ッ瞬いた途端、私はそこに立つてゐる一人の女性を、立體としてより、寧ろ、黑い平面として、ごく輕い驚きの内に認めたのである。

彼の女の直ぐ前には、五尺程も長さのある白ペンキ塗りの木箱が置いてあつたが、更にその中には副院長の知己だと云ふ或る香具師に依つて運びつけられた四尺五寸餘の大烏賊が橫つてゐた。〔何故此のやうな烏賊が筋違ひの標本室へまぎれ込むだか？ それは恐らく副院長がこの水分の多い動物へ防腐の設備をした上で、再び香具師に渡すためだつたらしい。〕

改めて、私が前方を凝視した時、女は自身の胴から半分だけほどいた細いメリンス帶の先を、丁度猫でもなぶるやうに、烏賊の黑く光つた眼の上へと垂れ下げて振つてゐた。彼の女の身體の下層から湧き起つて、腕から手の先、手の先から帶の端へと移つて行く波狀の運動は、それ自身で何かしら或る踊りの一部分のやうでもあつた。

まだ死に切る事の出來ない動物は物慣れぬメリンスの毛ばだつた肌ざはりに驚かされると、黑い眼の外側に添うた柔かい金色の環を大きく見張り、內部に力を入れてゐるものゝ如く、皮面にみなぎる雀斑を不意と變色せしめた。それと同時に一本の足は箱の內側を辷りつゝ蠕動し、もう一つの中央の足は少しく隆起して、鹽に濡れた吸盤を表はした。

この表情は明らかに憤怒以外の何者でもなかつた。リンネが記し、ユーゴーが傳へた通り、この類の冷血動物は怒る事に於て、他の何んな溫血動物からも少しの引けをさへ取らぬものである。

「危い。もしその惡魔が貴方の腕を……」と、その時初めて私は口を切つた。

女は私の制止を喜ぶものゝやうに、直ぐ腕を胸の方へと引き、そして半分ほどけたしなやかな帶を再び丸みの勝つた胴へと卷きつけるのであつた。その動作全體が如何にも無關心な美しさ――殆ど冷淡な程の媚態の閃きを放つてゐるので、私はしばらくの間自分の仕事をかたはらに置いて、微笑みながら彼の女を見守つた。不思議にも彼の女の首の皮膚一寸平方は彼の女の眼と鼻よりも一層魅力的なものであつた。

と、彼の女は不意に私の方を振り返り、そして、いくらか羞かむやうに斯う云つたのを私は記憶してゐる――

「私、今烏賊にしたやうな事を、以前には男の人にしたのでした。」

二

この女性とは何者であらう。そして何故以上のやうな言葉が彼の女の唇から洩れたのであらう。

横濱には無數の立派な小ホテルがある。そのあるものは三つしか寢臺を具へず、他のあるものは一つの寢臺をさへ持ち合さない。それでも尙ほその家の軒燈へはバンクウバホテル或ひはユウカタンホテル、ジヤクソンホテルなぞと云ふ立派な名目が弧形に印されてゐる。時にはその燈火の上に、エナメル塗りの看板が張られ、其處には鰻から噴き出すビールの瀧を硝子コツプが巧みに吸ひ込むでゐる圖なぞも見かけられるであらう。この種の家に住む若い給仕を、私達は何時も簡單にホテル女と呼むでゐるが、今この標本室內に私と向ひ合つてゐる彼の女も亦こんな職業を持つた女性の一人に外ならなかつた。

それ故、「烏賊と戲れるやうに、男と危い戲れをした。」と云ふのも、彼の女にとつては、別段異樣な感懷ではなかつたらう。

彼の女は初めから一個の施療患者として、この病院へ這入つて來たものであつて、私の記憶が誤りでなくば、その患部は心臟と腎臟とであつた。そして醫師から堅く運動を禁じられてゐたに拘らず、人の眼を盜むでは、標本室なぞへまぎれ込むで、態と活潑に立ち廻つてゐたのである。

彼の女――三津木リカ子――の顏容は病ひのために、幾分か姙婦をでも見るやうな趣きを呈してゐた。リカ子はその靑い顏色を痛く恐れて、何時も白粉を塗りたがつたが、生憎彼の女はそれを買ふ丈の金錢さへ持ち合さなかつたので、私が與へた亞鉛華と藥局生から貰つた澱粉とを、自分で混ぜて、

木綿袋へ入れ、それを顔の上へ打ちつけては、せめてもの樂しみにしてゐる風だつた。

彼の女はその歩き方に於て、他の女性から大分かけ離れてゐた。つまり、極端に云ふなら、膝から下の部を幾分外方へとひねるのであるが、然もそれは「足の表情」の一つとして、少しも醜いものではなかつたと云ふより、却つて稍々常識を外れた特殊の美しさで、人々の眼を引きつけさへしたやうである。又、彼の女は可成り大きな足を持つてゐたのに、極めて小さい草履を選つて履く癖があつた。そのため、彼の女の桃色をした踵の肉は、何時も廊下の板の冷たさを直接に味つてゐたのである。

何れにせよ、リカ子はその顔より、その四肢によつて、人々の記憶にとゞまるたちの女であつた。

三

病が増惡して來た時も、彼の女は尙ほ活潑な心を失はなかつた。さもなくばつとめて活潑をよそほつてゐるやうでもあつた。

それ故彼の女がバルコンなぞへ這ひ出して、欄干にもたれながら微笑むでゐるのは、却つて彼の女の氣分がすぐれぬ印でもあつた。

とある涼しい日の午後五時頃、私は又してもバルコンの籐椅子に獨りで坐つてゐる彼の女を見つけ

出した。そして一つ二つの慰藉の言葉をかけてやりたく思つて、彼の女の方へと近よつた。

彼の女が自身の經歷——烈しい暴風雨のために、ホテルが海水の侵入をうけた時、長い間腰を水に濡らしてゐたのが病氣の原因であつたらしいとか、一度父親のない小供を生むだが、三ケ月たゝぬ內、あの世へ行つて了つたとか、記念のため、その子の髮の毛を一つまみ紙へ包むで祕藏してゐたが、暴風雨が其れもさらつて行つて了つたとか云ふ樣な話し——を長々と私に聞かせたのは實にその夕べであつた。

軈て、彼の女は籐椅子をしりぞけて、立ち上り、欄干に寄りすがつて、はるか下の地面を見つめてゐたが、不意と次の樣な一つの實感を、幾分恐怖しつゝ私に訴へたのである。

——彼の女は最近、病が重くなつてから、時々異樣な幻覺に惱まされて困る。それは彼の女の前方へ現れるのでなくその後方と足下とに感じられるので、幻覺と云ふより、却つて幻覺的な土臺と呼むだ方が適當なやうなものである。

後方に感じられるのは鯨の肌のやうに濡れた或る帆船の船腹、また、足下に感じられるのは細い鐵の梯子である。彼の女はその船腹が闇より黑いのを、背中全體に知覺しつゝ、鐵の梯子を一足だけ降りる。

下方は全く未知の深さであつて、その底に水があるか何うかと云ふことなぞもわからない。一足。

そして二足。突然彼の女の爪先は梯子から外れて、その身體は急速に落下する。

この時の氣分は丁度腦貧血が起つた場合と同じやうであるが、胸の中で齒車の廻るやうな氣持ちがするところを見ると、心臓へ血が逆に戻つて行くらしくも思はれる。と、たちまち息がつまつて、我に返る。そしてあたりは再び明るくなる。

一體このやうな幻覺は病氣の一部なのだらうか、それとも彼の女の靈が苦しい身體から離れて、一人淋しい遊びをするのであらうか。

四

リカ子が私に訴へた「落下の幻覺」について、私は少しもその眞僞を疑はうとは思はなかつた。それのみでなく、種々な臓器の病患と幻覺とが奇異な結合をする事の好い證例として、私はこの話しを詳しくノートに取つて置いた。

×月十九日、第三木曜會の小さい會合が精神病科の控へ室に開かれて、はしなくもF醫長の口から、飛行心理とか、彈丸恐怖とか云ふ、戰陣心理學に關する話しが出た折、私はこれをよい機會と思つて、リカ子の幻覺の事を彼れに話して見た。彼れは昔アッシリャあたりに行はれたと云ふ、夢占ひの書物なぞを、所持してゐるやうな好事家であり、その方面の研究家でもあつたから、「落下の幻覺」なぞは彼れに取つて少しも珍重の餘地がない、極く陳腐なものだつたらしい。

それ故、醫長は少し長目な舌の先から、葉卷煙草の屑を吹き出すと一緒に、無造作な調子で斯う私へ教へるのだつた――。

「それは神經衰弱の場合に起る一番普通な現象さ。」

「何かしら不吉なものゝ豫示のやうに思はれますがね、落下と云ふ事は……」すかさずさう問ひ返したのは私であつた。

「さう、夢占ひに依ると、それは發病、病氣の増惡、極端な疲勞、失敗、等の象徴とされてゐるがね。それとも君は斯んな判斷をあまり常識的だと思ひますか?」

五

けれども自然の運爲は如何なる人の想像をも遠く越えた不可知のものである。

F醫長の千篇一律的な豫斷とは反對に、リカ子の病ひはその後、小康を得て、再びベッドから起き上る事が出來るやうになつた。

浴光室の硝子戸越しに、冷い霧雨が窺はれる、晩秋の或る休み日、私とリカ子とは、其處のベンチに腰を竝べて、たゞそれ自身としては何の面白味もないやうな話しの種にさへ、特別な魅力を感じな

がら、長い間樂しく語り合つた。

私は先づ、——自然が人々に與へる苦痛や悲愁の效果、つまり、それらが人の心に努力と改善の願ひを植ゑつける事、三度足を折つた者は自づと良い醫者になれる事——なぞを彼の女へ語つた。

すると彼の女は多少反對の意をほのめかすために、今まで伏せてゐた黑い睫毛を上げ——自分は苦痛や悲しみを知らぬ時に、却つて善い心になれる性質である。それ故氣を輕く持つためには、何うしたら好いかと云ふ事のみが、自分に取つての一番の關心事に相違ない、このごろつくづくと考へるのだが、凡そ悲しみを消し去るには、二つの仕方より無いやうである。一つは自分の元氣で悲しみを追ひ拂ふ事。もう一つはいくら悲しみがその領域を廣げて來ても、それを知らぬふりで暮し、云はゞ平氣でその悲しみとつき合ひもし、邪魔立てなぞもしずにゐてやる事である。と云ふ意味の話しを彼の女一流の云ひ表し方で、簡潔に物語つた。

と、間もなく彼の女は「氣を輕くするため」の好い思ひ附きが浮むだとでも云ふ風に、亂れ髮の首をかしげ、白い八重齒を一寸見せて微笑むだ。そして態と口をきかず、私の懷ろから、小さい手帳を拔き出して、斯う鉛筆で書きつけた——

「斯んな樂しい休み日が又來る事はありません。殘つてゐるあとの時間で、電車カブをして遊びませう。」

私は思ひついて硝子戶の外へ眼をやつた。快い霧雨は幾らか薄れ、向ふ河岸の角へ突然表れて直ぐ消えて行く電車のきしみが、今更のやうに淋しく私の耳へ訪れて來た。

其處で私達は在來のものとは少し違つた方法を取つて、先づ樺色に塗られた電車を彼の女の持ち札とし、海老茶に塗られたのを私の持札ときめた。然し何を賭けるかと云ふ事になると、リカ子は不意と顏を赧らめた。

そして、初めの內は淋しさうな、次には多少冷淡な、その次には熱心な表情をして、斯う云ひ放つた。

「お金はないけれど、それ以外のものなら何でも……」

軈て私たちは不意と襲つて來る愉快な緊張に捕へられた。リカ子の華やいだ眼は、河岸の角から突進して來る電車の上へとそゝがれた。

樺色の四十五號が薄く輝く灯をともして其處へ表れたと思ふと、直ぐ他の角を折れて、消えて行つた。リカ子は衣服の前を掻き合せながら、腰を少しベンチから浮かせて吐息をついた。

もう一臺樺色が通つたけれど、その番號を私達は無視した。

リカ子は如何にも切なさうに手の指を折つたり開いたりした。それは折ると白くなり、開くと赤くなつた。次に走つて來たのは私の持ち札で、海老茶色をした大幅の舊型であつた。

電車の腹の番號が明確に彼の女の目に映つた時、「勝つた……」と彼の女は嬉しさうな聲で囁いた。然し私はその聲を聞きながら、自分が負けたと云ふ意識を妨害するやうな一種の滿足を感ぜずには居られなかつた。それ程、女の喜びは烈しいものであつた。

敗北の印しとして、私は晩になつたら、果實の罐詰を一つ彼の女へ與へる約束をした。それから何故ともなく、斯う尋ねて見ずには居られぬ好奇心を呼び起した――

「けれども、若し貴方が敗けたら、一體何を私に吳れる積りだつたのです？」

するとリカ子は自身の懷ろへ手をさし入れて、首から掛けてゐる一本の打ち紐を引き出した、紐の先には蓋の開く銀メダルが附いてゐて、それをあけると、多分お下げ止めからでももげ取れたらしい靑い硝子玉が二個だけ發見された。彼の女はそれを眺めやつてゐる內に、不意と眞面目な表情に立ち戾つた。明るい喜びのために興奮した心は、悲愁に對しても感じ易くなつてゐるらしく、彼の女はその時俄かに唇の右端を顫はした。そして制し切れない寂寥の感じを、輝く眼の中に表すのであつた。

六

重く壓された心をもつて、私は獨り天井の低い宿直室へと歸つた。そして、ベッドの中央部へ腰を卸すと直ぐ、例の手帳を引き出して、小さい風を起しながら、その頁を繰つて見た。

するとリカ子の幾分亂れた筆蹟から一二枚おいた頁に、私が四日程前、書き込んだばかりの走り書きが、次のやうな事柄を示してゐるのも、苦しく私の眼にふれた。

日々の規約

一、理念との交通を怠らぬ事

一、朝の內に反省――未來のための糧――

一、もうこの上、他人を傷けぬやうに注意する事

私はこの命令的な規則――勿論實行出來た譯ではない――と、リカ子の書きのこした「未來に望みを持たぬ短い命が現在の刹那丈を樂しまうとする意慾」とを引き比べて、兩者の何れが正しいかに思ひ惑つた。

と、間もなく、そこへ快活な大股で這入つて來たのは若いH醫師だつた。

それをよい機會に、私は幾らかじれた心持で、彼れへ斯う問ひ掛けた――

「今日の……施療室の食物は？」

「朝は知らぬ、晝は麩が三片、夜は……夜は茶つ葉、それに油揚げの細く切つたのが四本ぐらゐ……
……」

比較してみるに、我れ我れがこの日採つた食事は、晝が煎り玉子、夜がスープゆでの小魚であつた。我れ我れは健康な明るい味覺を持つてゐる。彼れ等は病み衰へて、食思をきづつけられ、茶碗の音を聞くだけでも、既に胸をつまらすのである。然も我れ我れには美味が、彼れ等には不味が供されるのを、私は何と解す可きであつたらう。

この嚴しい矛盾に行き當ると、私は今更ながら、底の知れぬ不安の打ち混つた、烈しい羞恥に襲はれて、顏を熱くしないでは居られなかつた。

七

人の願ひが一直線に達せられると云ふことは、如何に稀であらう。

快方に向つたと思はれてゐたリカ子の病氣は、間もなく烈しい增惡を示して、私を驚かした。

彼の女の苦痛は全く此の世のものとも思はれぬ程に、恐ろしい限りであつた。

私がリカ子を病室に訪れた折、彼の女は絕えず起る眩暈を和らげる目的から、その長い髮の毛を、ベッドの鐵柵へ高々とくゝりつけてゐた。そのため、毛髮全體は圓錐形を造つて、上の方へと突進してゐるものゝやうに見えた。それは黑く燃える焰にもたとへられ、又は下へ行く程廣がる黑い瀧のやうでもあつた。

噴火口の中途に、引き掛つた女の髮の毛は、下から吹き上げる熱い活氣のため、必ず上方へ向つて、ひるがへるものだと云ふ事を、私はしばしば聞いた覺えがある。全くリカ子の姿態は黑い煙のたゞよふ噴火口を聯想せしめる程に、陰慘な眺めであつた。

彼の女は私を一目見ると、聲を上げて泣いた。

不思議な事に、軈てリカ子は私の腕に卷いてある時計へ眼をつけると、それを厭ふものゝやうに、自身の平手で押し隱さうとした。

その意味は「もう直ぐ來る眞夜中を恐れる」と云ふ事以外の何ものでもなかつたらう。何故なら、彼の女の苦惱は每夜十二時頃になると、むごたらしい迄に、激烈となつたのである。

斯んな場合の「時間」とは一體何であらう。たとへば私が腕の時計を背中の方へ隱した所で、何うして時間と云ふものを後ろへ退かせ得よう。

私は進退谷まつて、たゞ無言の儘その場にうなだれた。そして、自分の悲しむ可きうろたへを紛らす術も知らず、ひたすらリカ子の顫へてゐる胸の上を見詰めるのみだつた。

其處には一枚のハンカチが涙に濡れて乘つてゐたが、何より私を不審がらせたのは、その涙が多少桃色をして布に沁みてゐる事だつた。

「之は恐らく、涙の囊に新らしい病氣が發生したのであらう。それとも眼瞼の裏が炎症を起して、血

を滲出するのかも知れない。」
私は咄嗟の間にさう考へた。と同時に、最早其處に立つてゐる事が不可能になつて、自然と扉の方へ足を移した。
この淡い桃色は私の腦裡に沁み込むで、長い間、鮮かな痛みの種となつた。そして何時の間にか、私の空想の中で、リカ子が生前になしたあらゆる嘆きの最も直接な象徴とさへ變化したのであつた。

八

冷い冬の夜は既に痛く更けてゐた。
私はリカ子の屍骸へ最後の別れを告げたく思つて、半分開いた儘になつてゐる扉の間を、音も立てずすり拔け、そつと屍室の中へ這入つた。
一枚の蒲團も敷いてない簡素な木製ベツドには、星と波形との模樣がある浴衣を唯だ一枚丈着たリカ子が、眞直に仰臥してゐた。洗濯シャボンの香りが高く發散するその浴衣は、糊が利いてゐるため、リカ子の身體を一層堅い感じにして見せるやうだつた。
彼の女の顔面の上には一枚のガーゼが乘せてあつた。しなやかなその布は、鼻の所で高々と隆起し、頬の所で凹み、顎に添うて喉の方へと、丸みを帶びて垂れ下つてゐた。

それは丁度優れた彫刻家が手をつけたばかりの、未製の作品とでも云つたやうな氣韻を含むで、私の心を打つた。
私は息を殺して、そのガーゼの端しを少しばかりめくつて見た。
足の方からさして來る淡い電燈の光りによつて、明るみと陰とを現したその窪みの深い眼のほとりは、僅か昨日と今日との間に起つた、あまり烈しい變化でもつて、私の悲愁を湧き立たせた。
何んな平俗と不遇の間に、死んで行つた名も無い人間であつても、それ自身としては眞に新らしい存在であり、この世の恒久な運爲の中に、唯だ一回より出現しない稀有なるものである。若し一度このリカ子を見失つたなら、私は何處に再び彼の女と同じものを、見出す事が出來たであらう。
愛惜の情は次々と起つて、私の肋骨を痛ましめた。私は片方の手で、元通り、ガーゼを女性の顔の上へ掛け、片方の手で私自身の顔を蔽ひ隱した。

九

然しリカ子の死んだ後迄も、面倒な障害がその屍體に附きまとはつて、彼の女を苦しめ拔いたのは、一體何う云ふ譯であつたらう。
他でもなかつた。私が發した二度目の告知書も、小使自身が出掛けて行つての催促も、遂に、リカ

子の保證人を病院へ呼び寄せる事が出來なかつたのである。

簡單に語らう。私達は詮方盡きて、先づリカ子の納まつてゐる棺——之は和風會の婦人達から贈られたもの——を寢臺車風な車へ移した。そして私と小使とで、それを保證人の家へ運びつけたのであるが、その時、彼れは既に不在で、恐らく債鬼らしい一人の老人が戶のしまつた留守宅を監視してゐた。勿論老人はリカ子の思ひがけぬ歸來を憤怒しながら拒み、保證人の不義理を、筋違ひの私達へ向つて難詰した。

到頭決心した小使は無理に棺を車から引き卸した。と老人は跣足で外へ飛び出して來て、その棺を再び車の中へ押し込むだ。

こんな爭ひのために、梶を乘せた木の馬が倒れると、車體は前へのめつて、棺を下方へと辷らせた。恐らく、その途端、リカ子の屍體は箱の中で頭をあたりへ打ちつけられたらしく、その不快な音響が外へと洩れたのを、私は聽き取つた。

と、老人もさすがに哀れを感じたらしく、リカ子の知己だつたとか云ふ或る若い男の住所を私に敎へて、兎も角、其處へ車を運ぶやうに命ずるのだつた。

私たちはその通りを實行した。然し若い男は頻りと「賣り物に買ひ物」と云ふ言葉を濫用して、リカ子との友情を否定した。そして押し問答の最後には、五十錢銀貨二枚を藁半紙へ包むで、それを無理にも、私の懷ろへねぢ込まうとした。私はその金を受けて好いか惡いかの判斷に迷ひ乍ら、丁度相談でもする如く、車の內部を見かへつた。

一〇

私達は途方に暮れて、再び車を病院へと挽き戾した。

その翌日、保證人が旅行の途中からよこした簡單な葉書は私を痛く憤らしめた。其處には旅先の宿所さへ認めてなく、高田市と云ふ事が消印によつて漸く分つた丈であつた。文面は、態々語る迄もなく、リカ子の處置一切を病院に委せる旨を、醜い走り書きで示してゐた。

けれど病院の規定は一切葬儀費の支出を許さなかつたので、昨日車を挽いた小使が、遂に事情を見かねて、全く仁俠的な心持ちから、不遇な棺を引き取りたいと申し出した。

私はこの親切を喜びもし、氣の毒にも思ひながら、早速副院長へ傳言した。と、彼れの太つた顏面筋肉は俄かに隆起して、何時も惡口を云ふ時にするやうな表情になつた。

「いかん……」と、副院長は重い身體を一廻りさせて、バンドを一穴だけゆるめつゝ、私に云つた——

「あの小使の息子は筋の惡いコロタイプ屋へ勤めてゐるのだ。考へて見給へ、リカを引き取つて貰ふのは好いとして、若しその屍體を寫眞にでもとられて、賣り物にされたら何うするかね？」

私は副院長の斯んな邪推の言葉を聞くと、矢張り氣味の惡い疑雲の中へと迷ひ込まずには居られなかつた。そして私の視神經は今直ぐにもフラッシュライトが照らし出すリカ子の腕を目撃するもの丶如く戰いた。

「それでは……」と、私は暫くしてから、副院長へ訴へて見た――「通夜の席を私が嚴重に監視したら宜敷いでせう。」

二

それは雪晴れの美しい午前であつた。

H醫師と小使と私とはリカ子の骨壺をたづさへて、ひたすらA墓地へ急いだ。

その骨の埋められる場所は、雪崩と共にいたく破壞された斷崖の直ぐ上であつた。

小使は他人から貰つたらしいゆる過ぎる鳥打帽を眼も隱れる程深く冠つて、鼻孔から二條の白い息を吹き出し乍ら、默々として働いた。その實直相な有樣を見やつてゐる內に、私はこの人を少しの間でも疑つた副院長の心底を恨めしく思はずには居られなくなつた。凡てなさる可き事が終つた後、私達は近隣の子供等が置き去りにした焚火のほとりへ行つて、冷い體を溫めた。

勢ひ好い火の活氣は、昨夜、色々の事情で一睡も出來なかつた私の頭へ、却つて沈むだ重苦しさを感じさせた、すると、眼がくらむやうな不快な心持の中へ、突然浮むで來たのは、リカ子が生前物語つたあのよるべもないやうな幻覺の記憶であつた。

私は再び若者らしい傷心へと落ちて、高く晴れた大空へ行き迷つた眼を移した。梢の白い雪と對比されるためか、空の青さは一しほ濃く鮮かに見えた。

私の耳は何處からともなく聞えて來る小川のせゝらぎに捕へられた。そして私の思考力は何故ともなく、古への書に示された通りの賞む可き情景を想起し初めた。

――綠濃い茂みに挾まれて、其處には蜜と乳との流れる廣やかな川がある。この美事な領域に住む人々は、何時も勞働を快樂とし、休息を慰藉として暮してゐた。

若しも彼れ等の內の一人が病むで樹蔭に身を橫へる時には、他人たちが川から乳と蜜とを運むで來て、快く病者を養ふのであつた……

そんな古昔の人々の頭上に廣々と橫はつた大空が、何うして今私達の見上げる大空と別の物だと斷言出來よう。

然し時は過ぎた。同じ大空のもとに、同じからぬ世相は變轉した。

今日は昨日より、明日は今日より、萬人が享有すべき喜びの領域はせばめられ、唯だ屠牛場をでも見る如き凄慘な暗さのみ、その色を增して行くのは、一體誰れの罪に歸す可き事なのであらう。

ラ氏の笛

——或る助手の思ひ出　その二——

一

横濱外人居留地の近くに生れ、又、其處で成育した事が何よりの理由となつて、私は支那人、印度人、時には埃及人などゝさへ、深い友誼を取り交した經驗を持つてゐる。そして彼れ等の一人一人が私に示した幾つかの逸事は、何れも温い記憶となつて、今尚ほ私の胸底に生き殘り、爲す事もない病臥の身（それが現在に於ける私の運命）へ向つて、限りない慰めの源を提供するのである。

時は大正×年、秋の初め、場所はB全科病院の長い廊下であつた。當時の私は副院長の下に働く臨時雇ひの助手であり、面前に立つ私の友は若い印度人（アリヤン）で、極く小さい貿易商の事務員、ラオチャンド氏であつた。

彼れの汗で濡れた廣い額は丁度雨上りの庭土のやうに、暗い光りで輝き、濃い眉毛に密接した奥深い眼は、物體の形よりも、寧ろ唯だその影だけを見つめてゐるやうに、懶う氣であつた。彼れの鼻は以前にも増して、嶮しく尖り、木で造つたかと思はれる程に堅い印象を私に與へた。一ヶ月以前迄、彼れが小指にはめて居たニッケルの指環——鷲の頭が彫つてある——は、今や彼れの藥指へと移つてゐた。この事實は彼れが最近、何れ程急激な速度で、痩せ初めたかを、明らかに證據立てゝゐた。

その日、彼れは私の紹介によつて、病院の三等室へ——それも特別の割引きで——入院する事に決めて貰つたのである。

彼れは感謝の意を表すため、言葉を口走るよりも先に、大層慌てゝ、私へ握手したが、その掌は一種不快な濕さで、不用意な私を痛く驚かした。

「體溫が恐らく三十八度五分位……」と、私は心の内でさへ、尚ほ吃りながら呟いた。

二

その翌晩、長い時間にわたつて、停電があつた。

私は思ひ立つて、蠟燭に火をつけ、不幸な患者、ラオチャンドの室……この室一つ丈けが病室から孤立してゐた、それも道理で、一時は其處が蒲團部屋にあてられてゐた事もあつたのだが——を見舞つてやらうと決心した。

私は夜の九時を報ずる遠い大時計の音を幽かに聽き入りつゝ、蠟の灯を消さぬやう、出來るだけ靜かに、階段を踏み下つて行かうとした。そして、上からじつと下方の闇を窺つた時、何かしら自分の行く先が、泥水に滿ちた深い谷間のやうに思はれるので、自然と足の進みを躊躇せしめた。

然し、私は遂にその谷間の最下へと達した。そして、閉ざゝれた室の扉を靜かに開いて內部へ這入

つた時、私の豫期は不意に其處で破壞された。と云ふのは、一つの人影も、白いベッドの上には見出せなかつたからである。

「ミスタ、ラオチャンド……」と、私は自分をも不快にさせる程な反響を持つた聲で、呼むで見た。

答へは極く低聲に、ベッドの向う側から湧き起つた――全く湯氣の如く落ち着いた調子で、下方から浮き上つて來た。私は直ぐその方向へ廻つて見た。そして、更に新らしい驚きで、自分を戰慄せしめた。『當時、私は若い新參者で、未だ、病院内の一切の事に無經驗だつたから、精神は白紙のやうに傷き易く、印象は墨の斑點のやうに明瞭であつた。』

外でもない、友人ラオチャンドは板の間へ一杯に青色のシャツを敷き廣げ、その上へ蔽ひかぶさつて、二錢銅貨五個分程の血を、丁度シャツの背筋の所へ吐いて居たのである。

彼れは哀訴の心を籠めた眼差しで、私を下から見上げ、次に、鼻孔へ迄も廻つた血液を口中へと戻すため、鼻をすゝつた。

四つ這ひになつた彼れの長い身體、白い靴下の穴からのぞく、薄黑い足の裏、血に染つて赤くなつた大きい門齒、苦痛の涙に濡れた長い睫毛――それら全體は、より所もない孤獨の感じで、細かく波打つてゐる如くであつた。

三

翌朝は殊に麗かな晴天であつた。

私は廊下に漲ぎる輝かしい光線の爲めに、眼球の表面を刺戟された擧句、網膜に斑らが出來たやうな不快な感じを抱いて、再びラオチャンドの室へと這入つて行つた。

彼れの頰はやれはてゝ、風で乾いた泥のやうに、色澤を失ひ、彼れの眼は空虛の中に尙ほ何者かを探し求める如き冷い光りを見せてゐた。

と、彼れは私の口を大きい指で指さしつゝ、

「何か話して……」と、嘆願した。

この一語は疑ひもなく、彼れの心中の寂寥を暗示してゐるものに他ならなかつた。私は先づその一事に心を打たれた。そして全く結果と云ふものを考慮に入れる暇もなく、自然と次の如き意味を、整はぬ英語で口走つた。

――病むでゐる事は不幸である。然し、健康なものが悉く幸福であらうか。私は今の先、一人の工夫が餘りな生活難のため、發作的に氣を取り亂し、丁度其處へ走つて來たトラックの車輪の下へ態と手を差し込んで、レールを組に、四本の指を斷ち切つて了つたのを見た。その各々の指からは一尺づ

つの高さに血がほとばしつた。彼れは今、病院の外科室で治療を受けてゐる。不幸な者が決して貴兄一人でない事を知つたならば、貴兄は何んなに日毎を氣輕く過し得るだらう。何故なら、「不幸」も數多集まれば、何かしら強力なものとなるのだから。——

以上の言葉を聞いたラオチャンドは俄かに聲を隱して泣いた。その事は彼れの病氣に大きい支障を來すおそれがあるので、私は慌てゝ口をつぐみ、あまり斟酌なく話し込んだ事を此の上もなく後悔した。私は何うかして彼れの愁傷を取り消したいと願ひながら、當惑した眼を彼れの枕元へと落した時、半ば廣げられた鼠色の風呂敷の中に、不圖一枚の繪畫と一本の日本風な横笛とを發見した。繪畫は稍々原始的な石版刷りで、恐らくインドラと云ふ神の圖であつた。笛は幾らか寸の足りぬ安價相な出來で、その末端に、素人細工らしい赤銅の鎖が附けてあつた。

所在なさに、私はその笛を取り上げ、そして、云ふ事がない爲めに、却つて態と何かしらを口走つた——

「早くお治りなさい、この笛を吹いて、樂しめるやうに……」

云ひ遲れたが、彼れは誠に巧みな笛吹きで、主に印度の古調を、日本の竹から響き出させる事が出來た。

四

その後、ラ氏の感情は好い諦めのために鎭められて、最早、人の前で、涙を見せるやうな事もなくなつた。その替り、何かしら何時も人を冷いものに見ようとする傾向が、彼れの心の底で育ちかけてゐるのも看過しがたかつた。

悲しい事に、人は多くの場合、二つの極端の間を行き迷ふものである。一つは溫い感情、一つは冷い理性である。前者は自己の不幸に遭遇すると、しばしば烈しい惱亂となり、後者は自己の不幸に遭遇すると、しばしば孤立的な枯渇を來すものらしい。

私の眼があやまりでなくば、ラオチャンドは遂に、冷い理性の捕り兒となつた事を、行爲の端し端しに表した。

けれども、仕合せな事に、彼れの身體の方は段々と盛り返して行つた。そして、しまひには、僅かづゝの歩行を醫師から許されるやうにさへなつた。

或る月の明らかな夜である。彼れは何を思つてか、二階の物干し臺へそつと一人で昇つて行かうとしてゐた。鐵の梯子へ縋つて、月光の下にうごめく彼れの後ろ姿を目撃した私は、一種危險な氣持ちに打たれて、思はず、足を早めつゝ、彼れのあとを追つた。(何故なら、その一週間前、施療部の一肺

患者が寢臺の鐵柵へ帶を懸けて、首を縊つた。非常な努力を以てゞなくては出來ぬ、蹲んだ儘の縊死を、この機會に私は初めて實見したのであつた。」

私が臺上へ達した時、ラ氏は旣に東寄りの手すりへもたれかゝつて、遠く居留地の方を眺めやつてゐた。

「少し動き過ぎますね。」漸く彼れに追ひ着いた私は、なじる心を混ぜて、さう呟いた。

「それに笛なぞを持つて、何うするのです？　吹くのは未だ早過ぎます。」

「いや」と、ラ氏は奥深い眼を五六回瞬いて云つた。「之はたゞ占ひです。」

「笛が……？」

「さうです。今、何時ですか？」

「大時計は九時を打ちました。」

「では、もう過ぎてゐる。」

彼れは私が暫く其處にとゞまつて、彼れの爲す所を、横合ひから觀察してゐて呉れるやうにと願ひ、幾何もなく、一つの珍らしい情景が眼前に表れるだらうと豫告するのだつた。

十分程もすると、暗い梯子の上り口へ、一つの首が浮上つた、首につれて胸、胴全體、そして足の先迄がせり上つて來た。

見る見る、その影は輕い足取りで、ラ氏の方へと歩み寄つて來た。影と云ふのは、之もアリヤンの若い女性、名は覺えて居ぬが、何でも當時、日本へ渡つて來たばかりの、乞食に等しい貧困者であつた。それにも拘らず、彼の女の體は薄い白絹に包まれ、彼の女の手首には、恐らく象牙製と思はれる腕環が三つも重なつてゐて、それらは彼の女が耳なぞを搔くため、腕を持ち上げる度に、決い音響を發しつゝ、打ち合つた。

「私は以前にも一度、此の女に會つた、その時の記憶によると、彼の女は卵形の輪廓をした顏を持ち、乳へココアを混ぜたやうな色合ひの皮膚をしてゐた。彼の女の黒くて長い睫毛や、濡れたやうな暗い色の眼等は、何れも彼の女が純粹のアリア族である事を證據立てゝゐた。」

さて、私は彼の女を態と避けて、梯子を六七段下つた。そして二人の若い異國人が之から何事を爲すのか、少しばかりの興味に繫がれつゝ、眼丈を臺の上へ表して、待ちかまへるのだつた。

初めの內、二人の動作は顯著でなく、二人の言葉も途絕え勝ちであつた。けれども、私の想像力は活潑に動いて、自分の理解出來ぬ點迄をも、强ひて理解して了つた。

つまり、女は頻りに愛を訴へた。男はそれを冷い理性で疑つた。女は軈て男の周圍をめぐつて步き初めた。けれど、男は眼をさへ動かさず、下を向いて默つてゐた。

最後に女は胸のあたりを、縮めた指で搔きむしり、腰を柔かく左右に振つて、じれた心持ちを表し

た。すると、男は遂に横笛を取り上げて、ほんの一節丈を吹き鳴らした。女は喜むで兩手を打ち合した、腕環は搖れて、輕く快い響を立てた。

男は直ぐ横笛を女に突きつけ、吹いて見ろと云ふ意味を英語で云つた。女は驚いて身を引いた。ただそれ丈の事であつた。

二十分程も、尙ほ平凡な會話が續いた。私は遂に耐へ切れないで、再び物干し臺の上へ昇つて行つた。

女が慌てゝ歸つて行つたあと、ラ氏は私を招いて笑ひ、「魔女を追ひ拂つた」方法を私が見てゐたかと尋ねた。彼れは私の質疑に答へて、斯う說明して吳れたのである――

「あの女は昨晩も來た。一昨晩も來た。そして、醫師や看護婦の見てゐぬ所で、何かしら重要な相談をするため、私に會ひたいと要求したのです。そして、私はこの屋上で出會ふ事を彼の女に許した。彼の女は約束の時間に此處へ上つて來た。そして、私の病氣が治り次第、彼の女と結婚して吳れと、嘆願するのでした。私はそれを聽き入れなかつた。何故なら、彼の女が二十圓ばかりの金を至急に借りたいため、私へ結婚の申し込みを敢てするのだと云ふ事が、はつきり分つてゐたからです。二十圓？　何うしてそれが大金でないと云へよう。私は一週間後から、施療にして頂く身ではありませんか。成る程、貴方は私が笛を吹いて後、彼の女へもそれを吹くやうにすゝめたのを、不思議がつていらつしやるけれど、考へて下さい。それは私の病氣を恐れてゐる彼の女の心をためすためにも、彼の女を大急ぎで追ひ拂ふためにも、是非必要だつたのです。」

言葉は簡單で、にべもなかつたが、その中には何かしら取りとめのない諦めが含まれてゐるやうであつた。

彼れが最近何れ程、孤獨に安んじ、自ら足る事以外に何物をも求めぬかを私は今更知つて驚いた。

五

然しそのやうな愛情の行き違ひから、唯一の女友達をさへ失つて了つたラ氏は、時とすると、滿足な心の中に、尙ほ嶮しい寂しさを感ずる事もあるらしかつた。

そんな寂しさは彼れの胸中で幾分か變化して、次のやうな意地惡い行爲となつて表れた。

一週間後のある夕暮れ、ラ氏を不意に訪れたのは、某教會の日曜學校を監理してゐる三十恰好の好青年であつた。彼れは最近にその愛妻を失つたとかで、態と質素な服をつけ、ボタンなぞも取れたものは取れたまゝに放置して、そんな無造作を樂しむでゐる風さへ見えてゐた。

彼れはいきなり一面識もないラ氏に色々の慰撫的な言葉をかけた。けれどもラ氏は少しも喜びの色を表面へ現さぬばかりでなく、何を思つてか、「惡魔退治」と云ふ印度の脚本の事を語り出した。（この

脚本は過日マセドニヤ丸乘組みの印度人達によつて、實演された相である。』それから彼れは引き續いて、

「エスキモーの國には惡魔と云ふ言葉がない。だからエスキモー人へ向つて、我れ我れがいくら惡魔の事を説明しても、そんな惡い者が此の世に居る譯もないと云つて、承知しない相だ。」と云ふやうな話しを、さも羨まし相に物語るのだつた。「神と一緒に惡魔を案出する程なら、その何方をも案出せぬ方が宜敷い。」

教會の青年はこの異國人の心持ちが了解出來ぬらしく、不可解な微笑を浮べながら、立ち上り、廊下に置いてあつた花束の一つを取り出して、それをラオチャンドに與へようとした。

その拍子にラ氏はすかさず例の横笛を取り出して、私の制止をきかず、印度の古調の一節を吹いた。

青年はその不思議な節廻しに耳を傾けつゝ、何かしら自失したやうに、呆然と立つてゐた。

一節が終ると、ラ氏は直ぐその笛を青年の前へつきつけて、「プレイ、プレイ。」と重い音調で要求した。

「下手ですから……」と、青年は拒みかけた。

「それなら、花束も貰はない。」と、ラ氏は恐ろしく絶望的な表情をして呟いた。

この時、青年はラ氏の心全體を直覺的に理解して、驚きの眼を瞠つた。そして白い小さな手を出して、横笛を取り上げた。

ラ氏は夢見るやうな奥深い眼で、青年の爲す所を凝視してゐた。

青年は六つの指をそれ〴〵の穴に當てがひ、遂に決心して、笛の口を自分の唇へと接近せしめた。

「危い?」と、ラ氏は云つた。そして立ち上りざま、青年の手からは笛を、机の上からは花束を、一時に取り上げて、幾度も深くうなづいた。

六

ラ氏の心持ちが段々と穩かなものに變化して行つた時、却つて、彼れの身體が疲弊を増すのみとなつたのは悲しむ可き事である。

退院の豫定は全くくつがへされた。然も最早一錢の貯へをも彼れは持ち合してゐなかつた。

院長はラ氏の經濟状態を充分觀察し、その上、もう餘命が長くないらしいのを了解して、彼れを施療部へ移す事を承諾した。

若しこの世に、天國と地獄とを兼ね具へたものがありとすれば、それは確かに施療室である。

何故なら、其處では救助と殘虐とが、日を同うして行はれるからである。

死と向ひ合つて坐する幾日を、ラ氏はこの苦しい施療室で過し、曾て住みなれた三等室に憧憬の心

を寄せ通した。

彼れは金錢を全部失つた日から、又急激に痩せ初めた。この事は人と物資との微妙な關係を我れ我れへ承認せしめるに充分だつた。

斯うして彼れは再び血を吐く機會に行き會つた。彼れはそれを「生命の支拂ひ期」と戯れて呼んだ。ある時の如きは、止め度なく口から血が垂れるにも拘らず、彼れは態と身體の安靜を破つて、烈しく起き上り、聲を立てゝ、天へ祈りを上げ初めた。

最早、醫師の誰もが、ラ氏のこんな行爲を制止しようとは試みなかつた。何故なら此處は施療部である。若し施療室と云ふものに頭腦があるなら、それはきつと斯う云ふ苛酷な思想を持つたに相違あるまい――

「地上に於いて、實用に適さぬ生命は早く天へ送られる方が好いのである。」

私は恐怖の眼で友人ラオチャンドを見やつた。痩せる丈痩せて、昔日の面影もない彼れはベッドに坐して、體を前後にゆすつてゐた。彼れの眼尻には血の飛沫が一點、アミーバの擴大圖のやうな形ちで附着してゐた。板の間の上へ置かれた、古い洗面器には、彼れの吐いた血が鎭まり返つて溜つてゐた。

と、其處へ、何を慌てゝか、一人の助手が肘を縮めながら、駈け込んで來た。彼れはいきなり板の間の洗面器へ、粗忽な足の先を突きあてた。血は丁度嘗て人間の體内に居た時の如く、波打つた。圓い波紋が次々と表れるのを、ラ氏は侮辱されたやうな顏附きで眺め入つたが、軈て、

「私の血が再び動き出した……」と、悲しさうに私の方を振り向いて呟いた。

「それより、靜かに臥さねば……」と、私も亦落ちつかぬ心で彼れへ云つた。

「私の國では、寢た儘で祈ると云ふ風習はない。」と、彼れが頑固に返答した。そして何事かをパーリ語で唱へては、體を前後に搖するのであつた。

七

再び美しい月の夜が來た。

私は以前に一度經驗したと全然同じ情景を、月光の下に見出して少からず驚かされた――ラ氏が唯だ一人で、物干し臺の鐵の梯子をよぢ登らうとしてゐたのである。私は長い廊下を急いで、彼れの跡を追つて行つた。そして、廣く冷たい天空の直下で、漸く彼れと向き合ふ事が出來た。

「骸骨が斯んなに歩きます。」彼れは辯解すると云ふより、寧ろ、陳謝する如く、さう私へ囁いた。私はその一言を聽くと、最早何んな難詰の言葉を見出す力をも失つた。そして、この夜こそ、恐らく、彼れが大きな天空を眺めて樂しむ最後の時となるだらうと云ふ事を、獨り黯然と豫覺するのであつた。

この美しい月光の宵、私と彼れとは短い時間の内で、極めて多くを語り合つた。

色々な會話の中で、殊に私の注意を惹いた部分は次の三つに他ならなかつた。

ラオチヤンドは云つた——

「私の手に手袋がはまつてゐる。私が手を動かすと、手袋も斯んな風に動く。然し、（此處でラ氏は手袋をぬいだ。）手から引き離すと、勞れたやうにうなだれて、もう決して動かない。不思議ではないか。」

又、ラ氏は物語つた——

「私の叔父に書物を廣く讀むだ、優れた人があつた。彼れは矢張り私と同じ疾患で仆れたが、病臥の日の中で、私へ斯う云ふ事を敎へて呉れた。

ラオチヤンド、分るか。月が虧けてゐる時、それは本統に半分を失つて了つたやうに見える。けれど、實は何者をも失つてはゐないのだ。私が不意に居なくなるとしても、それは月の部分が虧けるやうなもので、實は何も變つた事は起つてゐないのだ。」

この言葉につれて、二人は思はず頭上の天を眺めやつた。私は深い困惑に落ちて、この異國人の旅愁を少しでも和らげてやりたいと願つた。然し、ラ氏は最早全く感情的なものから遠ざかつて、平和に微笑むだ。

更に彼れは斯う呟いた——

「私は何んな場合でも、極く自然に幸福を自分のものとした例を知らない。では、何うして私は幸福をかち得たか？　何時も不幸でもつて、幸福を買つたのである。例へば、私は幼い時から、日本へ渡つて來たいと憧憬れた。然し、その願ひが果たされたのは、横濱で病ひにかゝつた叔父を看護する目的からであつた。

又、私は君と大變親密にして貰つて嬉しいが、さうなる爲めには、私の病氣が色々と機會を造つたのではないか。」

八

ラオチヤンドの死は意外に早く來た。

生憎、私は副院長の用事を帶びて、N地方へ旅行に出てゐたので、ラ氏の臨終を親しく見屆けてやる事が出來なかつた、それを私は今尙ほ殘念に思つてゐるのである。

彼の屍骸が病院から何處へともなく運び去られて後、約一ヶ月程して、私は漸く旅行先から病院へと立ち戻つて來た。

その時、多くの醫師たちは既にラ氏の名前を忘れ去つて、唯だ「印度人」と呼むだりしてゐた。

私は久々に自分の事務机へ向つて坐つた。そして吸取紙を出すために、机の抽出しを半分程明けた。

抽出しが妙にきしむので、私は間に何か挾まつてゐる事を察して、指を其處へ差し込むで見た。窮屈に壓されて、縮むでゐる邪魔物をそつと引き出して、何の氣なしに開いて見ると、それは未だ私が手を觸れた事もない一通の手紙であつた。差出し人はＭ丸乘組みの印度船員某、名宛人は院長及び副院長となつて、その內容はほゞ次の通りの英文であつた。

　此の間、横濱へ寄港した次手に、私たちは貴院の施療部で御厄介になつてゐるラオチヤンドを見舞つてやつた。彼れは瀕死の病者で、その上、自活費を一錢も持ち合してゐない貧者であつた。凡ての費用を貴院から仰いでゐる由を承知して、私たちは、哀れな同胞に對する院長の厚い同情を深く感謝してゐる次第である。御恩の程は決して忘れる事が出來ぬであらう。

　私達は横濱出立の間際に、ラ氏死亡の旨を貴方達から聞いて、驚きもし、悲しみもした。尙ほ貴方方から私達へお託し下された、シヤツ、ニツケル指環、笛等は間違ひなく、彼れの母（今は某家に乳母をつとめてゐる）の下へと達ける事をお約束する。

　私たちが故國へ歸着した時、先づ第一に同胞へ說き明かさねばならぬ事は、院長及び副院長の此の上なき懇切な御所業である……云々……

九

　最後に、私は此處で、ラ氏が云ひ遺した一つの思念を想起する。

「私は何んな場合でも、極く自然に、幸福を自分のものとした例を知らない。何時も不幸でもつて、幸福を買つたのである。」

　それなら、最も大きい不幸たる彼れの死を條件として、漸くに買ひ取つた幸福がありとすれば、それは一體何物であつたらう。

　私は思ふ。それは彼れが日本の地で持ち慣れた横笛を故鄕の母へ無事に送り、その笛をして「汝の息子は平和に息を引き取つた、そして、汝の息子がこの地上から影を隱すと云ふ事は、結局、月の一部が虧けるのと同じで、本統は何一つ失はれて居ないのである。」と云ふ諦認を物語らせる事に他なるまい。

　然し、幸福と云ふには足らぬ、そのやうな淺い喜びを除いたなら、他の何處に彼れの死を以て買つた幸福が發見されよう。私は全く、その問ひに對して、正しい答への出來ないのを寂しく思ふのである。

船大工の肖像

一

ペートル大帝が外國漫遊中に使用した、彼れの印鑑は一種獨特な意匠を持つてゐた――その圖案の中央部には彼れの若々しい肖像が位置を占め、その周圍にはコンパスとか、鋸とか、鐵槌とか、その他機械工業を象徴するに足るやうな諸多の工具が配置され、尙ほその外側に、「我れは學ぶ者の位置にあり、我れを教ふる人を求む」と記してあつた。

この印鑑の圖案は彼れの青年らしい衒氣と、彼れの帝王らしからぬ謙遜とを混ぜ合せて表示して居るものゝ如くであつた。

ぬきんでようとする華かな意志、隱れようとする簡素な意志、この二つが何時も若きペートルの胸底で、爭鬪して居た事は、以上の印鑑のみでなく、彼れの實際生活の上へも種々な形ちで表れてゐる事實である。

例へば彼れは手紙を書く場合にも、自分を他人から甄別するため特別の色調を持つたインキを使用した。と思ふと、一方、彼れは寒微な者達の間にあつて、苦樂を共にし、隱れた所に於いて、彼れの技能を練磨した。そんな場合彼れは人々から「陛下」と呼ばれる度に、顏の半面を痙攣させ乍ら、眉をしかめた。

この痙攣は何かしら彼れの腦や脊髓の疾患に關係してゐたらしい。彼れは元來癲癇持ちだつたのである。

斯うして彼れはその漫遊中に、航海術、製圖術、天文學、植物學、解剖學を學び、又、東印度會社の造船所では、造船術の根本原理を會得した。それ故、この不思議な君主は船大工と同じやうに、塗脂法を手づから實施する事さへ出來た。

二

一六九八年、一月十一日、彼れは愈よロンドンへ乘り込むだ。

時の英國君主はペートルに對して唯だ「和蘭陀水兵服を着るのが好きな、粗暴で、我が儘な青年」と云ふ豫備知識だけしか持つてゐなかつた。それで彼れは自身の宏壯な宮殿や手の入り組むだ庭園を見せびらかすためには、極めて不釣り合ひな賓客だと考へて、さまで、此の露國君主へ興味を寄せようともしなかつた。

然し、一六九八年、二月六日のロンドン新聞には、ペートル手製の種々な器具に關する記事なぞが掲載されて、一般市民の好意ある注意をひいた。

當時、英國のKと呼ぶ一貴族はペートルの、――粗大ではあるが、物事に熱心な――氣質を痛く敬

愛して、是非この君主の肖像を一枚丈自分の手に入れようと心掛けた。

折から、Kの知遇を受けてゐる畫家にNと云ふ者があつた。彼れは和蘭陀仕込みの、殊にレンブラント風の寫實的描寫に堪能な腕を持つてゐた。Kはこの家畫に命じて、ペートルの姿を寫させようと決心したのである。

Kはカルマルテン家で催された晩餐會の折、彼れの意圖をペートルへ打ち明けた。解放的で、氣輕な若い露帝は醉ひにまぎれて、何氣なく、直ぐその場で、英國貴人の申し入れを承諾して了つだ。

三

翌朝十時頃になると、テームス河畔にあるペートルの小さな寓居へ、四十號程の畫布を背負つて、一人の見すぼらしい畫工が訪ねて來た。彼れは過勞のため弱つた心臟を劬りつゝ、家の階段を三段踏むでは休み、四段踏むでは息をついた。

この時、ペートルは未だ床の中にゐて、英國議事堂の内部を夢に見てゐた。「衆議とは何だ？」と彼れは夢の中で、太い腕を振りながら不快な感慨に耽つた。

其處へ彼れの從臣の一人が這入つて來て、畫工Nの來着を告げた。

二日醉から醒めたペートルは、今初めて、昨夜の一寸した口約束を想起する事が出來た。瞬時の靜止をも厭ふ彼れは、不意に、一種重い苦澁感を頭の上から肩先へ掛けて經驗せねばならなかつた。

彼れは家臣の一人へ內密に命じて、「朝臣宣誓錄」や「貴族名簿」の中に、Kの家系を檢べさせた。答へは直ぐ得られた。K家は決して由緒ある正系の家柄ではなかつた。この事がペートルを一度に輕い氣分へと追ひ放つた。

彼れは自分の容貌と少しばかりの類似點を持つた家臣Dへ取りあへず、和蘭陀水兵服を着用させ、それから、頰の肉を出來るだけ堅く緊張させてゐるやうに命じた。このDと云ふ人は、平民の船大工で、その優れた技能のため、帝王から此の上もなく愛されてゐたのである。

斯うして置いて、ペートル自身は家の裏口から外へ抜け出し、白塗りの小舟でテームス河をさかのぼつて、ある英國貴婦人との樂しい會合へ急いだ。彼れは美しい女性の腕や肩を見た時、自分の寓居へ殘して來た貧しい畫工の事を悉く忘却して了つたやうだつた。そして若い君主は諧謔によつて豐かにされた會話を思ふ存分にやり取りしながら、情事に近附いて行く最初の階段を、むさぼるやうに樂しむだ。

ペートルは「若しも」と云ふ言葉を非常に澤山使ひ、貴婦人は「それでも」と云ふ言葉を制限なしに用ゐた。

（尤もこの情事は、ペートルの氣儘から、初まりかけると直ぐ消えて了つて、彼れより寧ろ女性の方

を悔恨せしめた。）

さて、その翌日も、ペートルは某氏の園遊會へ招待されて寓居を留守にして了つた。彼れはその夜、新式の樂隊を聽いて非常な滿足を覺えた。彼れが自國の陸軍へ軍樂隊を新設するやうに決心したのは、この時の好印象に起因した事であつた。

次の日もペートルは獵犬の新種と、大層悧巧な侏儒とを見物するため、朝から某所へ出掛けて了つた。そして、何に興じたのか、自身で大きい太鼓を叩き、並み居る婦人を笑はせた上、露西亞に於ける珍味、蝶鮫の事を長々と說明したりした。

四

一方、ペートルの居室に招き入れられた畫工Nは、其處の中央に、和蘭陀水兵服をつけて坐つてゐる赤ら顔の一青年を見出した。Nは一見して、この青年がペートル自身でないのを悟つて了つた。

「帝王はどちらに？」勞れたやうな物腰のNは首をかたむけて、水兵服の男へ尋ねた。

「帝王は私！」水兵服は斯う答へて、平然と顎を上の方へ向けた。

「御印鑑を！」Nはすかさず云ひ切つた。

「之だらう？」太いヅボンのポケットから取り出した印鑑を僞の帝王は無造作に卵黃色の滑らかな用箋の上へ、幾回も捺した。

畫工Nは印形の上に表れてゐる小さなペートルの像と、今眼前に坐つてゐる青年水兵の顔とを暫く見較べてゐたが、軈て思ひついたやうに、畫布を立て、それから、新型の木炭挾みへ差し入れた木炭で、輪廓を取り初めた。（この木炭挾みは後に佛蘭西の畫人クルベーが使用したのと同じ型である。）

翌日になると、又、同じ時刻に、同じモデルを同じ畫工が寫生した。愈よ着彩が初められ、パレットを舞臺に、細い、或ひは太い筆が頻りと活動した。

Nが一寸下を向いて、パレットの上に、ビチューメンを盛つてゐた瞬間である。彼れは突然烈しい心臟の疲勞のため、頭へ貧血を起して、その場へ四ッ這ひになつて了つた。彼れの手の平は無意識的にパレットの繪の具の上へ置かれたので、指の股から種々な色彩がほとばしつた。

彼れは斯う云ふ場合、生命力の減少のため、却つて何時も生氣に滿ちた幻影を見る癖があつた。その例に洩れず、今早くも、彼れの腦裡へ表れたのは、羊飼ひの質素な服裝をしたヤコブと、恐ろしく大きな翼を持つた天使とであつた。兩者はいきなり手と手を組むで、踊り狂つたが、その內、神聖な者とヤコブとの體は、恰度重ねて燒きつけた印畫の如く、一つに合さつて、何れが羊飼ひ、何れが天使かも分らなくなつた。云ひかへれば、羊飼ひの角ばつた肩へ天使の丸く肥えた肉が加へられたり、或ひはヤコブの白い布の間から、廣やかな翼が羽ばたいたりしたのであつた。

眼が醒めた時、畫工は微笑して、再び筆を取つた。彼れはその間にも、「貧しい羊飼ひの聖化」と云ふ事を繰り返して考へるものゝ如くであつた。

五

出來上つた肖像がペートル大帝に酷似してゐると云ふ譯には行かなかつたとしても、それがNの並ならぬ技巧によつて一點落ち度のない重みと光りとを持つた、レンブラント風な畫面となつて表れたのは疑ふ必要のない事實である。

この肖像畫は貴人K家の重寶として、三代後迄も持ち越され、常に家族たちの間で、敬愛の標的となつてゐた。

三代目のK氏（實は始祖から五代目）は一日、家寶の蟲干しを試みた時、丁度、官職を辭して、注意力にも剩餘が出來てゐたので、この肖像の額を一寸裏がへして見た。そして、偶然にも、木枠と布との間に、挾むである一枚の紙片を發見した。それは氣附かれぬやうに、十六回も折疊むで、一寸位の方形を形ち造つてゐたが、長い時代のために、濃い褐色を帶びて、今にも破れ相な脆さを示してゐた。

K氏はその紙を擴げ、皺を伸ばして、其處に認められた次の文句を讀み返した――

「この畫面に描かれたる處は、或る普通の平民、D氏の容姿に他ならない。

之は民衆の象徴として、崇敬に價する繪姿である。

民衆を導くと云ふ事は、將來に於て、許されない妄想となり終るだらう、我れ我れは民衆の一員として、むしろ、民衆によつて導かれねばならぬ事を喜ぶものである。

民衆の像は素朴で、寡言である。然し、我れ我れはその像の胸奥にこそ、最も廣大な宇宙を洞見する事が出來る。

其處には「自然」と同じ丈の高さがあり、「人間」と同じ丈の深さがある。未だ說き明されなかつた雄辯と智慧とがある。最も立派な正義と、最も莊重な眞理とがある。

そこに含まれた巨大な氣韻は夜明けの廣野に吹く微風のやうであり、初めて雲を破る朝の光りのやうである。

余は推度する――次に來り、次に立つ者は民衆である。我れ我れはその內にありつゝ、然もその全體を跪拜してやまぬものである。一六九八年、旅の畫工、N。」

名人レンブラントが民主的な畫人であつた如く、その流派を汲むNも亦、唯だ糧のためにのみ、貴人等の幇間となつて世を渡る、哀れな矛盾生活者であつた。

一六九〇年頃に於いて、下層者を重んずる思想は畫工達の間に、未だ一個の萌芽を出したばかりであ

つた。讀者も承認する如く、この萌芽は佛蘭西の畫界へ這入つて、最も美事な開花を見たのである。

〔例へばクルベーの如きは一個の立派なコンミユン戰士として一生を終始した。〕

それにしても、三代目の貴人K氏及びその祖先等は一つの長い誤謬に落ち入つて、貴族崇拜時代の眞唯中に、平民の像を愛慕してゐた譯であるが、現在になつて見れば、その誤謬こそ、何物にも增して、正當な事だつたと云へるだらう。

昭和三年九月十四日印刷
昭和三年九月十七日發行

「職工と微笑」
定價金一圓五十錢

著作者檢印
松永

著作者　松永延造

東京市京橋區南傳馬町二丁目六番地
發行者　和田利彥

東京市京橋區木挽町三丁目十二番地
印刷者　川村清次郎

東京市京橋區南傳馬町二丁目六番地
發行所　春陽堂
電話京橋六五二・四四一五番
振替口座東京一六一七番

川安印刷所印行

5
2

582
201